

史 跡

上之国勝山館跡 X

—昭和63年度発掘調査整備事業概報—



1989・3

上ノ国町教育委員会

史 跡

上之國勝山館跡 X

—昭和63年度発掘調査整備事業概報—

1989・3

上ノ国町教育委員会

序

国指定史跡上之國勝山館跡の環境整備事業は昭和54年に着手し本年をもって10カ年を経ました。

百数十年の長期に亘る館の存続、膨大な量、豊富な内容の出土遺物等はいづれも当初の予想を遥かに超えるものであり、様々の遺構も検出され、勝山館跡の重要性が次第に明らかとなって参りました。

この間、勝山館の内容が諸出版物等でも紹介されその存在がようやく知られるようになって参りましたが、尚解明されるべき問題が山積しております。

此度文化庁記念物課の格別の御理解を賜わり、京都大学教授朝尾直弘先生、神奈川大学教授網野善彦先生、東京大学教授石井進先生、函館大学教授榎森進先生、山形大学教授仲野浩先生を当町の文化財保護審議会特別委員、勝山館跡調査研究専門員としてお迎え申し上げることができ、現地調査、御指導を賜わりましたことはこの上ない喜びとするものであります。御多忙中にもかかわらず私共のお願いをご快諾下さった諸先生に心から御礼申し上げますとともに、このことの実現について碎心、ご尽力を賜わりました仲野浩先生に深く感謝申し上げますものであります。

諸先生の御力により勝山館や、中世の上ノ国の世界が一日も早く明らかにされることを願っております。

上ノ国町が構想中の「北海道中世の丘」建設にも勝山館は重要な位置をなすものと思われます。

町づくりの事業との連携もさせながら、更に本事業の前進を期すものであります。

文化庁はじめ関係諸機関、諸先生方の一層の御指導、御鞭撻を賜わりますようお願い申し上げます。

平成元年3月

上ノ国町教育委員会

教育長 和 泉 定 夫

本文目次

序

本文目次／表目次

例言／引用参考文献

I	調査概要	1
II	遺構確認調査	3
1	調査目的	3
2	検出遺構と遺物	3
1	柵列跡の調査	3
(1)	位置概要	3
(2)	層序	3
(3)	柵列跡	3
(4)	出土遺物	9
a	陶磁器	
b	金属製品	
c	その他	
2	空壕跡の調査	12
(1)	位置概要	12
(2)	層序	12
(3)	空壕跡	12
(4)	柱列	12
(5)	出土遺物	17
a	陶磁器	
b	金属製品	
c	木製品	
d	石製品他	
(6)	土坟墓	24
3	空壕東平坦面の遺構と遺物	35
(1)	位置概要	35
(2)	層序	35
(3)	検出遺構	39
a	掘立柱建物跡	
b	竪穴遺構	
c	焼土	
(4)	出土遺物	51
a	陶磁器	
b	金属製品	
c	その他	
4	15LM区試掘調査	56
(1)	位置概要	56
(2)	層序	56
(3)	遺物	56

III	小括	59
IV	保存処理	62
V	植物遺存体の同定	63
VI	環境整備工事	64
VII	まとめ	65

挿図目次

第1図	調査位置図	2
第2図	調査区位置図・柵列跡土層堆積図	4
第3図	柵列跡平面図	5
第4図	柵列跡周辺出土遺物①	7
第5図	柵列跡周辺出土遺物②	8
第6図	空壕跡・同東平坦面土層図	13
第7図	空壕跡柱列	9
第8図	空壕跡覆土出土遺物①	21
第9図	空壕跡覆土出土遺物②	22
第10図	空壕跡覆土出土遺物③	23
第11図	土坟墓（平面図・セクション図）	25
第12図	土坟墓遺物分布状況（釘・その他）	26
第13図	土坟墓出土遺物（釘）	27
第14図	土坟墓出土遺物（釘）	28
第15図	土坟墓出土遺物（釘）	29
第16図	土坟墓出土遺物（釘）	30
第17図	土坟墓出土遺物（釘）	31
第18図	土坟墓出土遺物（釘・銅製品）	33
第19図	土塚	34
第20図	第1号建物跡想定図	35
第21図	第2号建物跡想定図	36
第22図	第3号建物跡想定図	37
第23図	第4号建物跡想定図	40
第24図	第5号建物跡想定図	41
第25図	第6・第7建物跡想定図	42
第26図	第35号竪穴平面図	43
第27図	第36号竪穴平面図・出土遺物	44
第28図	第37号竪穴出土遺物	45
第29図	焼土①	47
第30図	焼土②	48
第31図	焼土③	49
第32図	空壕跡東平坦面出土遺物①	53
第33図	空壕跡東平坦面出土遺物②	54

第34図	空壕跡東平坦面出土遺物③	55
第35図	15Lトレンチ・セクション図	57
第36図	木製品重量変化グラフ	62
第37図	説明板詳細図	64

表目次

表1	16J18・23区北壁土層観察表	7
表2	17I9・14区北壁土層観察表	8
表3	16J13・8・15J23北壁土層観察表	15
表4	16I14～15I19北壁土層観察表	17
表5	15J5・10・15南壁土層観察表	18
表6	第35号竪穴覆土土層観察表	43
表7	第36号竪穴覆土土層観察表	44
表8	焼土成分表	50
表9	空壕跡東平坦面出土遺物集計表	52
表10	15Lトレンチ空壕A空壕B土層観察表	58
表11	遺物集計表	61

写真図版目次

P L. 1	勝山館跡遠景
P L. 2	調査区全景
P L. 3	調査状況
P L. 4	遺構検出状況

P L. 5	検出遺構
P L. 6	土層堆積状況
P L. 7	出土遺物
P L. 8	出土遺物
P L. 9	調査・遺構検出状況（柵列・空壕跡）
P L. 10	遺構検出状況（空壕・柱列・土壇墓）
P L. 11	建物跡全景
P L. 12	環境整備工事・遺物出土状況
P L. 13	出土陶磁器（柵列跡周辺）
P L. 14	出土陶磁器（青磁・白磁・染付—空壕覆土）
P L. 15	出土陶磁器（美濃・唐津・越前—空壕覆土）
P L. 16	出土鉄・木・石製品
P L. 17	出土陶磁器
P L. 18	出土陶磁器他
P L. 19	出土陶磁器他
P L. 20	骨角器他
P L. 21	保存処理完了遺物
P L. 22	植物遺存体同定写真①
P L. 23	植物遺存体同定写真②
P L. 24	植物遺存体同定写真③

附図 調査区地形遺構配置図

例 言

1. 本書は史跡上之国勝山館跡の昭和63年度環境整備事業に伴う遺構確認発掘調査と環境整備工事について概要をまとめたものである。
2. 環境整備工事については文化財保護審議会特別委員をお願いしている北海道大学 足達富士夫先生、建築遺構の調査検討には同じく、文化学院 鈴木亘先生、歴史的考察等については同じく、函館大学 榎森進先生、山形大学 仲野浩先生、東京大学 石井進先生、神奈川大学 網野善彦先生、京都大学 朝尾直弘先生から御指導を賜わった。
3. 本年度の発掘調査は次の体制でのぞんだ。
調査主体者 上ノ国町教育委員会 教育長 和泉定夫
上ノ国町文化財保護審議会特別委員 北海道大学教授 足達富士夫、文化学院講師 鈴木亘、函館大学教授 榎森進、山形大学教授 仲野浩、東京大学教授 石井進、神奈川大学教授 網野善彦、京都大学教授 朝尾直弘
主管 上ノ国町教育委員会文化課 課長 関登志夫
修景技術専門員 山崎重任（上ノ国町建設課長）
発掘担当者 学芸員 松崎水穂
調査員 学芸員 斉藤邦典 藤田登（森町教育委員会）
4. 本書は、松崎・斉藤が協議の上分担作成した。執筆文担は文末に示した。尚、Vについて 東京大学総合資料館松谷暁子氏から玉稿を頂戴した。
5. 挿図の作成は執筆者の指示に従い作業員が行った。挿図中の北方位は真北を示す。

6. 調査にあたっては次の関係機関と各位に多大な御指導と御援助を賜わった。（順不同）

文化庁記念物課 狩野久、安原啓示、加藤允彦、服部英雄、須田勉、松村恵司、北海道教育庁文化課 裊田敏夫、増田信幸、調査班 森田知忠、木村尚俊、工藤研治、北海道教育庁松山教育局 村山誠己、東洋文庫 渡辺兼庸、国立歴史民俗博物館 福田豊彦、佐賀県立九州陶磁文化館 大橋康二、愛知県陶磁資料館 仲野泰裕、平泉町郷土館 荒木伸介、建造物保存技術協会 高原孝、北海道埋蔵文化財センター 大沼忠春、前田正憲、八王子市教育委員会 新藤康夫、松村富男、八戸市教育委員会 佐々木浩一、大朝町教育委員会 上原隆弘、豊平町教育委員会 圓山龍溪、浪岡町教育委員会 工藤清泰、松前町教育委員会 久保泰、乙部町教育委員会 森広樹、森町教育委員会 藤田登、七飯町教育委員会 石本省三、八雲町教育委員会 三浦孝一、江差町教育委員会 藤島一己、木古内町教育委員会 鈴木正語、余市町水産博物館

作業員

糸畑勝恵、表ミキ子、笠谷奈智子、岸田慶子、鈴木栄一、高橋江里香、高橋裕子、竹内江美子、中里栄子、中里則子、西村よね子、沼沢国枝、八田揚子、平野キヌ子、山崎洋子、鷺田フミ子
小澤光明、草間栄、小林喜幸、佐藤孝、澤田斉久、武田速人、野坂浩二、長谷川貴俊、石田健滋、森義裕、高橋秀次、竹内力、長谷川義憲、松谷隆利、若狭明、小松伸吾、品田英生、田畑内匠、出口雄二、八田千寿、円子智志、佐藤勝久、加賀厚、大原博之

引用参考文献

- 鏡と劔と玉 1931年 高橋健自
- 刀劔 日本の美術6 1966年 佐藤寒山
- 仏具 日本の美術16 1967年 藏田藏
- 茶道具 日本の美術22 1968年 藤岡了一
- 甲冑 日本の美術24 1968年 尾崎元春
- 民具入門 考古民俗叢書 1969年 宮本馨太郎
- 刀装具 日本の美術64 1971年 加島進
- 世界陶磁全集14 明 1976年
- 釣針 ものと人間の文化史17 1977年 直良信夫
- 白 ものと人間の文化史25 1978年 三輪茂雄
- 珠洲古陶 1978年 石川県立郷土資料館
- 珠洲古陶 越中における展開 1980年 高岡市立
美術館「睦」会
- はきもの ものと人間の文化史8 1981年 潮田
鉄雄
- 貿易陶磁研究 No.1 1981年
- 貿易陶磁研究 No.2 1982年
- 貿易陶磁研究 No.3 1983年
- 貿易陶磁研究 No.4 1984年
- 北海道の鉄鍋について 物質文化42 1984年 越
田賢一郎
- 近世城館跡の陶磁ノート 研究紀要4 1985年
井上喜久男 愛知県郷土資料館
- 日本常民生活絵引 1987年 澁澤敬三
- 内耳鍋の研究 1987年 足立順司 静岡県埋蔵文
化財調査研究所
- 美濃陶磁器研究の現状 考古学ジャーナル297
1988年 井上喜久男
- 瀬戸・美濃における大窯生産 岐阜市歴史博物館
研究紀要第2号 1988年 伊藤嘉章
- 美濃窯の研究 東洋陶磁第15、16号抜刷 1988年
井上喜久男
- 北海道における中、近世考古学の現状と課題 物
質文化50 1988年 越田賢一郎
- アイヌの伝統的漁具（マレク）の成立背景に関す
る一試論 物質文化51 1989年 出利葉浩司
- よみがえる中世2 本願寺から天下一へ大阪 1989
年
- よみがえる中世3 武士の都 鎌倉 1989年

I 調査概要

1. 調査

本年度調査対象地区は館主要平坦部北側肩部分及び段下の大手空壕地区である。尚同地区は中央部を東西に御代参道路が走り南北に二分されている。今年度は昭和62年度トレンチ調査を行なった南側部分を主体に行なった。調査は6月1日より12月3日まで行ない、1,500㎡実施した。調査方法は従来通り20m×20mの大グリッドを分割した4m×4mの小グリッド方式、また大手空壕地区西側部分は3.5m×14mのトレンチ方式とした。さらに大手空壕地区東側部分の平坦面の調査に際しては、従来通り柱穴配置略図を作成し柱穴間の重複、覆土の状態を観察しながら柱穴を掘り下げた。尚焼土等は半載しセクション図作成後掘り下げ土壌のサンプリングを行なった。遺物取り上げはI、II層は4m×4mのグリッドを4分割した2m×2m毎の一括取り上げ、遺構面であるIII層は実測図作成後レベルを附して取り上げた。

- 6月 大手空壕地区東側平坦部伐開、表土剥ぎ。
4m×4mグリッド設定。遺構確認作業。焼土、柱穴、37号竪穴確認。
- 7月 大手空壕地区東側平坦面柱穴確認作業。同柱穴配置略図作成、36号竪穴確認、焼土平面図、セクション図作成。段急傾斜面表土除去。
- 8月 段急傾斜面表土除去。空壕A・B表土除去、同確認調査、遺物分布図作成。土葬墓検出。
- 9月 空壕A・B調査、同東西セクション図作成土葬墓調査、同セクション図作成。
- 10月 大手空壕地区東側平坦面調査、35号竪穴確認、37・36号竪穴セクション図作成。土葬墓遺物分布図作成、同実測、写真撮影。
- 11月 大手空壕地区北側部分トレンチ設定、表土剥ぎ、同調査。同地区で空壕A・B確認、同実

測、写真撮影、段上肩部分表土剥ぎ、調査。同地区で柵列確認、同実測。空壕A・B実測、写真撮影。大手空壕地区東側平坦面実測、写真撮影。調査区埋め戻し。

12月 調査区埋め戻し、終了。

2. 基本層序

I層 表土層。10Y R $\frac{3}{8}$ 暗褐～10Y R $\frac{3}{8}$ 褐シルト。草根多量。やや密。

II層 館廃絶後の自然堆積層。10Y R $\frac{3}{8}$ 暗褐～10Y R $\frac{1}{4}$ 褐シルト。やや密。炭化物、OS-a混入。細分される。OS-a純層も含まれる。

III層 館機能時の整地盛土層。10Y R $\frac{1}{4}$ 褐～10Y R $\frac{5}{8}$ 黄褐。密。ソフトローム粒、炭化物等多量に含有する。細分される。

IV a層 縄文期以後より館が機能する直前までの自然堆積層。黒、シルト～7.5Y R $\frac{3}{8}$ 暗褐、シルト。従来までのIV b層はIV a-1としIV a層の中を含めた。

IV b層 10Y R $\frac{5}{8}$ 明黄褐火山灰。やや密。

IV c層 縄文期包含層。10Y R $\frac{1}{8}$ 褐、シルト、やや密。

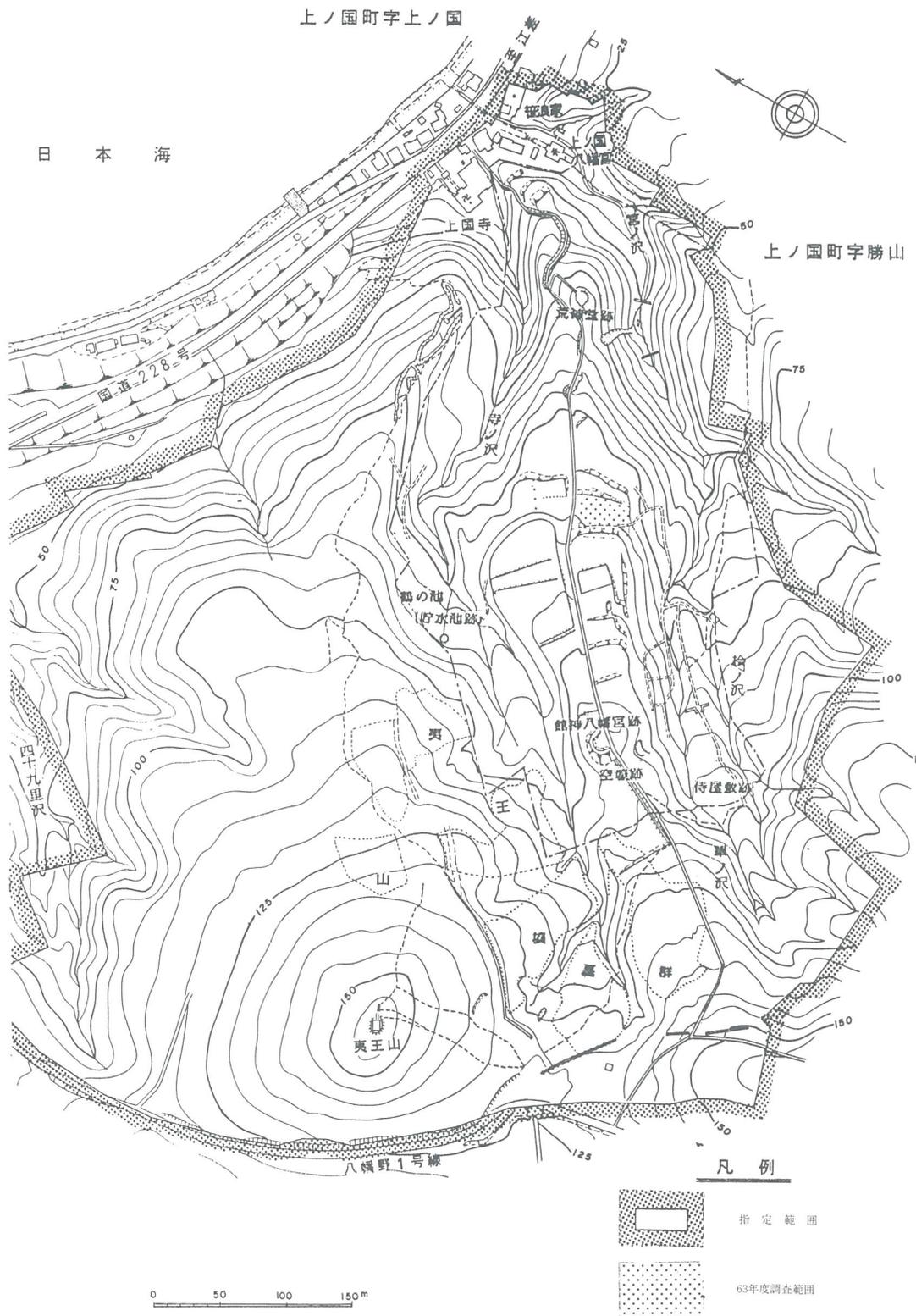
V層 10Y R $\frac{5}{4}$ にふい黄褐～10Y R $\frac{5}{8}$ 黄褐、ソフトローム。

3. 環境整備

今年度は調査区内の段急傾斜面、空壕A・Bの芝張1,100㎡を行なった。

4. 保存処理

昭和58年度より国の補助を得て勝山館跡出土の鉄製品、木製品、漆器の処理を行なっている。今年度は鍋、火箸、小柄、小札等の鉄製品を600点、箸、折敷、木樋等の木製品1,016点の処理を行なった。
(齊藤)



第1図 調査位置図

II. 遺構確認調査

1. 調査目的

昭和61年度に仮整備を行い30年代以降の人工林を除き茅等を刈り取った。その結果正面に大きな段が出現しその前（東）方にも小さな段がつけられている事が判った。更に旧土地所有者から段直下はかつて凹みを持っていた事などの話を聞き、空壕等の存在が推測され63年度トレンチ調査を実施した。この結果段上で巾25～30cm、深さ40～50cmの溝と柱列が2～3条検出され柵列跡とした。この内側直近にも柱穴があり、柵の付属施設等の存在も推測された。段直下には巾7.8m余、深さ2.4mと巾2m深さ1.5mの2条の空壕を検出した。又壕の外側は整地された平坦地となり柱穴が検出され、竪穴遺構の存在も推測された。

これらの経緯から63年度は段上の柵列の規模、新旧等の確認、柵列内側の付属施設等の検出、段下部空壕跡の規模、新旧の確認、空壕外側平坦面の性格解明等を調査の目的とした。又館中央を通る遊歩道北半平坦部での遺構確認調査を実施した。

2. 検出遺構と遺物

1. 柵列跡の調査

(1) 位置・概要

勝山館の主体部は南東・北西を宮ノ沢川と寺ノ沢川に挟まれた台地上に占地している。この台地は前後三段の大きな平坦面につくられ、それぞれが更に地割されている。この一段目と二段目の平坦面は5m余と最も大きな段差を有している。この二段目の平坦面端部で柵列が検出され、その直下、第一平坦面の付根に空壕が検出された。壕は付根から前方15m程の間に2条走り、壕の外側約10mまで小平坦面が続き1.7mの段差を持って前方の次の段となる。

(2) 層序（第2区）

調査区南北での土層観察によれば平坦面端部付近は45～60cmの盛り土整形されたⅢ層が堆積している。この上面から溝を掘り柱を埋設して柵列としている。溝の中は15～30cm深さは42～63cm程である。断面で見ると柱の下端は水平をなすようである。又埋設される深さはほぼ溝底までの50cm前後である。2、3条の溝跡があり北16J区の断面での新旧は明らかでないが、南17I区では内側が新しい。^{註1}

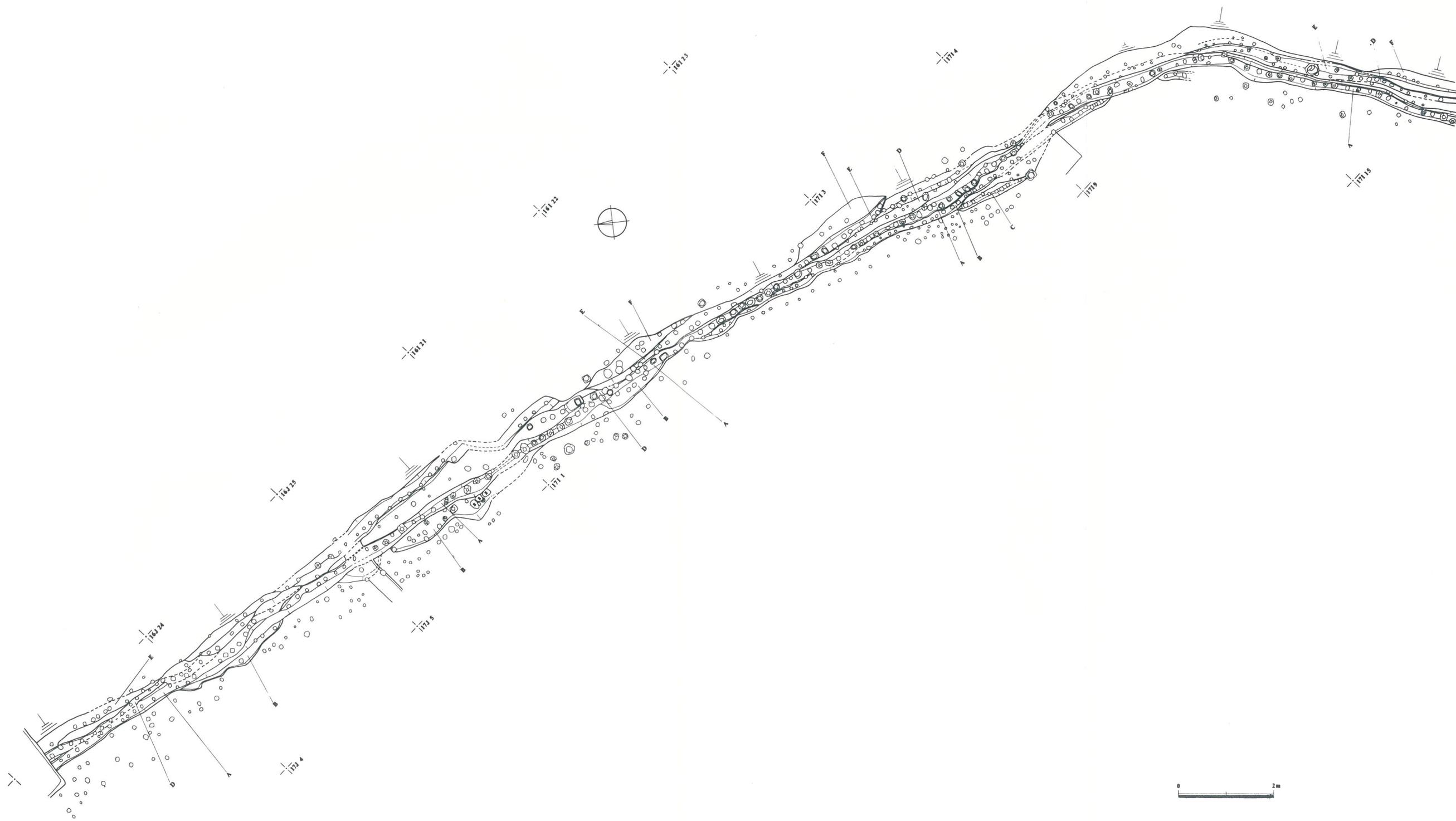
（松崎）

(3) 柵列跡

昭和62年度のトレンチ調査により検出された。館主要平坦面東側肩部分に位置する。柵列の広がりをつかむ事を目的とした。今年度は館中央部を東西に走っている御代参道路より南側の16J23区～17I5区、幅3m×長さ32m程の調査を行なった。その結果Ⅲ層を掘りこみ面とした柵列群が確認された。

a. 規模・形態

柵列群は16J23区より17I4区までN28°Wを基軸として走り17I5区よりN17°E方向に屈曲する。さて柵列は並走あるいは重複しながら6条確認された。図上ではA～Fと仮称した。その規模は柵列Aは溝の幅25～30cm、深さ17～25cm程で中に直径7～16cm、深さ8～30cm程の柱穴が5～15cm間隔で入る。17I1区～2区付近が柱穴も大きく、深い。また柱穴の間隔が最も狭いようである。柵列Bは柵列Aの西側にある。溝の幅は7～25cm、深さは6～20cm程で中に直径8～12cm、深さ10～26cmの柱穴が7～17cm間隔で入る。17I1区～17I4区付近が比較的規則性をもち柱穴が配置される。また柱穴も太い。柵列Cは柵列Bの内側にある。溝の幅は15～20cm、深さは4～6cm程で中に直径4～9cm、深さ6～12cmの柱穴が4～8cm間隔で入る。17I3区附近に若干残存するのみである。柵列Dは柵列Aの東側にある。溝の幅は16～20cm、深さは10cm程で内側に直径6～10cm、深さ8～20cmの柱穴が10～15cm間隔で入る。16J25区～17I3区までは溝が確認されず柱穴のみである。柵列Eは柵列Dの東側にある。溝の幅は17～20cm、深さは10cm程で内部に直径5～16cm、深さ5～15cmの柱穴が6～15cm間隔で入る。17I2～3区附近が柱穴も大きく、深く、その間隔が最も狭いようである。柵列Fは柵列Eの東側にある。溝の両上端が確認できず柱穴のみであった。柱穴は直径6～15cm、深さは10～23cm、その間隔は18～33cm程である。17I1区附近が柱穴も大きく深い。さてこれら柵列A～Fは北西～南東方向へ走っており、その新旧関係は柵列Aは他の柵列B～Fに切られず調査区間内を一本になって伸びている事より最も新しい時期のものである。他の柵列については柵列Aを基準として見ると、柵列Aより西側では



第3图 栅列平面图

17 I 1～4区では柵列Bは柵列Aに切られている。
 17 I 3区では柵列Cは柵列Bに切られている。築造順としては古い方より柵列C→柵列B→柵列Aとなる。柵列Aより東側では17 I 1区附近で柵列Dは柵列A・Eに切られている。築造順は古い方より柵列D→柵列E→柵列Aとなる。柵列Fは最も東側にあたり柵列Eと隣接しているが、柵列Eとの新旧関係は不明である。これらよりみると柵

列Aが柵列A～Fの中央部を走っているため柵列Aと柵列Aの東側柵列B、柵列C及び柵列Aと柵列D、柵列Eの新旧関係は判明したが柵列B、柵列Cと柵列D、柵列Eの新旧関係が不明である。1989年度の調査では御代参道路より北側の台地肩の調査を行なう予定であり、柵列群の新旧関係等を1989年度の調査の課題としておきたい。(斉藤)

表1 16J18・23区北壁土層観察表①

基本層序	層序	色調		組成	備考	
		JIS notation	土色名			
I	a	10Y R $\frac{2}{2}$	暗褐	シルト	やや粗 やや密	
	b	10Y R $\frac{2}{2}$	"			
II		10Y R $\frac{2}{2}$	"	シルト	やや粗	
III	a	10Y R $\frac{2}{2}$	黄褐	ロームブロック混入	やや粗 やや密 やや粗 やや密 やや密 dより明るく黄色fより暗いワット(dよりかたい) 密	
	b	10Y R $\frac{2}{2}$, 10Y R $\frac{2}{2}$	褐、黄褐	ロームブロック5%		
	c	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{2}{2}$	"、暗褐	シルト		
	d	10Y R $\frac{2}{2}$	褐	ロームブロック10%シルト		
	e	10Y R $\frac{2}{2}$ ~ $\frac{2}{2}$	褐、黄褐	ローム粒10%炭化物5%混入シルト		
	f	10Y R $\frac{2}{2}$, 10Y R $\frac{2}{2}$	にぶい黄褐、黄褐			
	g	7.5Y R $\frac{2}{2}$	褐	シルト		
	h	7.5Y R $\frac{2}{2}$	"	黒色土70%炭化物2%混入シルト		
	i	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{2}{2}$	暗褐、黒褐	炭化物2%混入		
	j	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{2}{2}$, $\frac{2}{2}$	黄褐、にぶい灰黄褐	ロームブロック混入、炭化物2%混入		
III*	①	あ	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{2}{2}$	褐、黄褐	ロームブロック20%、炭化物5%混入、シルト	やや密 やや粗(柱痕跡?) 密、ややかたい
		い	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{2}{2}$	黒褐、黄褐	ロームブロック5%、炭化物2%混入	
		う	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{2}{2}$	にぶい黄褐	ロームブロック30%炭化物2%混入	
	②	え	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{2}{2}$	"、黄褐	ロームブロック20%炭化物2%	やや密
	③	お	10Y R $\frac{2}{2}$	"	シルト	堅緻
	④	か	10Y R $\frac{2}{2}$	"	炭化物2%混入	やや密
		き	10Y R $\frac{2}{2}$	"	ロームブロック2%、炭化物1%混入	やや密
		く	10Y R $\frac{2}{2}$	褐	炭化物混入1%シルト	やや粗
		け	10Y R $\frac{2}{2}$	にぶい黄褐	ロームブロック2%、炭化物1%混入シルト	
	⑤	こ	10Y R $\frac{2}{2}$	褐	焼土粒2%、炭化物5%混入シルト	やや密
		さ	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{2}{2}$	暗褐、黄褐	シルト	堅緻
	⑥	し	10Y R $\frac{2}{2}$	褐	シルト	II層の成分を含む
		す	10Y R $\frac{2}{2}$	"	炭化物1%混入シルト	
		せ	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{2}{2}$	"、黄褐	ロームブロック10%、炭化物1%混入シルト	堅緻
		そ	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{2}{2}$	にぶい黄褐、黄褐	ロームブロック混入、炭化物2%混入	堅緻
た		10Y R $\frac{2}{2}$	褐	火山灰10%混入シルト	粗	
IV	ち	10Y R $\frac{2}{2}$	黒褐	火山灰25%、炭化物2%混入シルト	やや粗	
	a			黒色土		
	b	10Y R $\frac{2}{2}$	褐	シルト	やや粗	

表 2 1719. 14区北壁土層観察表

層 序			色 調		組 成	備 考
基本層序	小区分	細 別	J I S n o t a i o n	土 色 名		
I		a	10Y R $\frac{3}{4}$	暗褐	2cm基盤礫ローム粒混入	耕作土 やや固くしまる
		b	10Y R	"		
II		a	7.5Y R $\frac{3}{4}$	"	炭化物混入 火山灰含有30% ローム粒、炭化物混入	ソフト ソフト ソフト
		b	7.5Y R $\frac{3}{4}$	にぶい橙		
		c	7.5Y R $\frac{3}{4}$	褐		
III		a	7.5Y R $\frac{3}{4}$	"	1cm以下基盤礫、粒、炭化物、火山灰混入 2cm礫混入、粘土層 2~4cm基盤礫粒、炭化物含有粘質土 ロームブロック含有 火山灰、ロームブロック混入 火山灰混入 火山灰、炭化物混入 炭化物混入 ローム粒、炭化物混入 火山灰、炭化物混入	ソフト かたい塊状、乾くと白色化する 粗ソフト ソフト かたい ソフト シルト 密、かたい
		b	7.5Y R $\frac{3}{4}$	暗褐		
		c	7.5Y R $\frac{3}{4}$, $\frac{3}{4}$	" 褐		
		d	7.5Y R $\frac{3}{4}$	暗褐		
		e	7.5Y R $\frac{3}{4}$	褐		
		f	7.5Y R $\frac{3}{4}$	明褐		
		g	7.5Y R $\frac{3}{4}$	"		
		h	7.5Y R $\frac{3}{4}$	褐		
		i	10Y R $\frac{3}{4}$	"		
		j	10Y R $\frac{3}{4}$	暗褐		
		k	10Y R $\frac{3}{4}$	褐		
III'	①	あい	7.5Y R $\frac{3}{4}$	"	基盤粒炭化物含有 3cm基盤礫粒、ロームブロック混入	ソフト
		い	7.5Y R $\frac{3}{4}$	"		
	②	う	7.5Y R $\frac{3}{4}$	"	基盤礫含有 2~3mm基盤礫粒炭化物含有	固くしまる
		え	7.5Y R $\frac{3}{4}$, $\frac{3}{4}$	暗褐、褐		
	③	おか	10Y R $\frac{3}{4}$	褐	炭化物含有	およりやや明るく、固い 固い 粗、もろい ソフト 固く、しまる
		き	10Y R $\frac{3}{4}$	"		
		く	10Y R $\frac{3}{4}$, $\frac{3}{4}$	"、暗褐		
		け	10Y R $\frac{3}{4}$	黒褐		
		こ	7.5Y R $\frac{3}{4}$	明褐		
		さ	7.5Y R $\frac{3}{4}$	"		
	④	し	7.5Y R $\frac{3}{4}$	褐	2cm基盤礫含有、塊状、粘質土 炭化物微量含有 下位1cm大粘土塊、炭化物微量含有	ソフト
		す	7.5Y R $\frac{3}{4}$	"		
		せ	7.5Y R $\frac{3}{4}$	"		
		そ	7.5Y R $\frac{3}{4}$	"		
	⑤	た	7.5Y R $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{3}{4}$	"	基盤礫粒含有 2cm基盤礫含有 炭化物含有 粘質土 基盤礫粒含有 炭化物微量含有	粗 ソフト ソフト ソフト 粗、かたい
		ち	7.5Y R $\frac{3}{4}$	"		
		つ	7.5Y R $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{3}{4}$	明褐、褐		
て		7.5Y R $\frac{3}{4}$	褐			
と		7.5Y R $\frac{3}{4}$	明褐			
な		7.5Y R $\frac{3}{4}$	褐			
IV		a	7.5Y R $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{3}{4}$	黒褐	湿性	密 ソフト 密 ソフト 密 ソフト
		b	7.5Y R $\frac{3}{4}$	暗褐		
		c	7.5Y R $\frac{3}{4}$ ~ $\frac{3}{4}$, 10Y R $\frac{3}{4}$	褐		

(4) 出土遺物

柵列の南、平坦部で陶磁器、鉄製品等が出土した。

a. 陶磁器

青磁、白磁、染付、赤絵、瀬戸・美濃灰釉・鉄釉、唐津の碗皿類、珠洲系、瀬戸・美濃、越前の播鉢、甕等が出土している。(P L13-1~19, 21~69, 73, 75~79, 14-36・37, 15-14・23・32・58, 17-34・41, 19-1~5、第4・5図)。

青磁：篋削り蓮弁文の浅い皿、線描き蓮弁・無文碗、稜花皿がある。

白磁：腰部以下露胎で高台が削り出しの輪高台又は抉りのつく硬質の丸皿、端反りの丸皿、腰部をもたず一気に外反する皿、筒型の碗と推されるものなどがある。8は陶質の底部破片で削り出しの高台が着く。

染付：蓮子と体部の直立する角形の碗、糸底端反りと碁筒底の丸皿がある。19は見込み部分が平らで蛇の目に作られる。口縁には省略された波頭文?が描かれ、高台ウラには放射状にカンナ目が残る。蓮子碗の一と推する。^{註2} P L17-34も同類である。37は外面と見込み全体に唐草文を描く皿である。見込みの花は牡丹か。24、25の口縁内側は圏線のみである。

瀬戸・美濃：灰釉は碗、皿、袋物である。38、39は端反りの碗で線描きで剣先型の蓮弁文が施されている。又43、45は櫛状具で線描きされたものである。皿は端反り皿で菊、酢漿草等の印花が押される。49、50は小型のもの、51は襷皿である。15-14は見込みが盛り上る内はがしのものである。高台ウラにトチ痕が残る。53は内面轆轤整形痕の残る袋物下部である。透明度の高い釉調である。

鉄釉は碗と皿である。60、65~67は小片であるが輪高台で高台脇の削り巾が狭いもの、56は頸部がくびれ内反りの高台がつくものと推される。68は輪高台で高台脇が広く高台径もやや大きい例である。69は大ぶりの碗又は袋物と思われる。一部火を被っているが漆黒の釉が内側ともかけられている。64は掲底の皿で、茶褐色の釉が胴下部まで施され、一部3mm巾程の畳付きまで下っている。73は唐津の直口する碗である。

播鉢は越前、美濃、珠洲系のものがみられる。78は頸が大きくくびれ、口端は丸味をもってつくられ、口唇内側のゆるく傾いたところに櫛歯波状

文が施されている。胎土は軟らかみで器面は赤褐色を帯びる。15-58も同様である。P L19-1は叩き目の顕著な壺又は甕である。内面が丹念に整えられ滑らかになっている。灰青色を呈し珠洲系と推される。5は越前の壺かと推する。内面に成形時に内側からおさえた跡が残る。

b. 金属製品

鉄、銅製品がある。

鉄製品：巾広の鋸状のもの(P L16-51)口唇が肥厚し直下が幾分くびれる容器の破片等がある。

銅製品：(P L19-35)は鐔の銅を地金とする破片である。推定7.5cm程の円形で五カ所にハート型の抉りをいれ変化をつけると思われる。周りは銀履輪とし両面共縁に沿って三個の菊花が見られる。象嵌の有無は不明。耳に1カ所鋭い切れ込みがある。欠損した中央部分にも刻みがある。(10図26)。小柄は破損品が2点出土したが出土地点が近く、小口部分と底であり同一個体かも知れない。小口の方は残存する刀身が錆化膨張し包んだ銅が破れている。棟方、地板等に装飾はみられない。

c. その他

陶錘(P L19-45)、縄文・擦文土器等がある。^{註3}

陶磁器の示す年代は、15世紀後半から16世紀末葉の間、殆ば勝山館の存続した全期間に亘っている。

青磁篋削り蓮弁文碗、白磁丸皿、瀬戸・美濃灰釉蓮弁文碗、端反り印花皿、鉄釉輪高台・高台脇削り巾の狭いもの、播鉢等で珠洲系としたものなどは勝山館出土品中、古期のものである。瀬戸・美濃の物は太窯I期に属するものであり、珠洲系の播鉢は珠洲のVI期頃に比定されるものであろう。又灰釉の内はがし襷皿や唐津は後半~末期のものである。内はがし皿は太窯II~III期に属するようである。

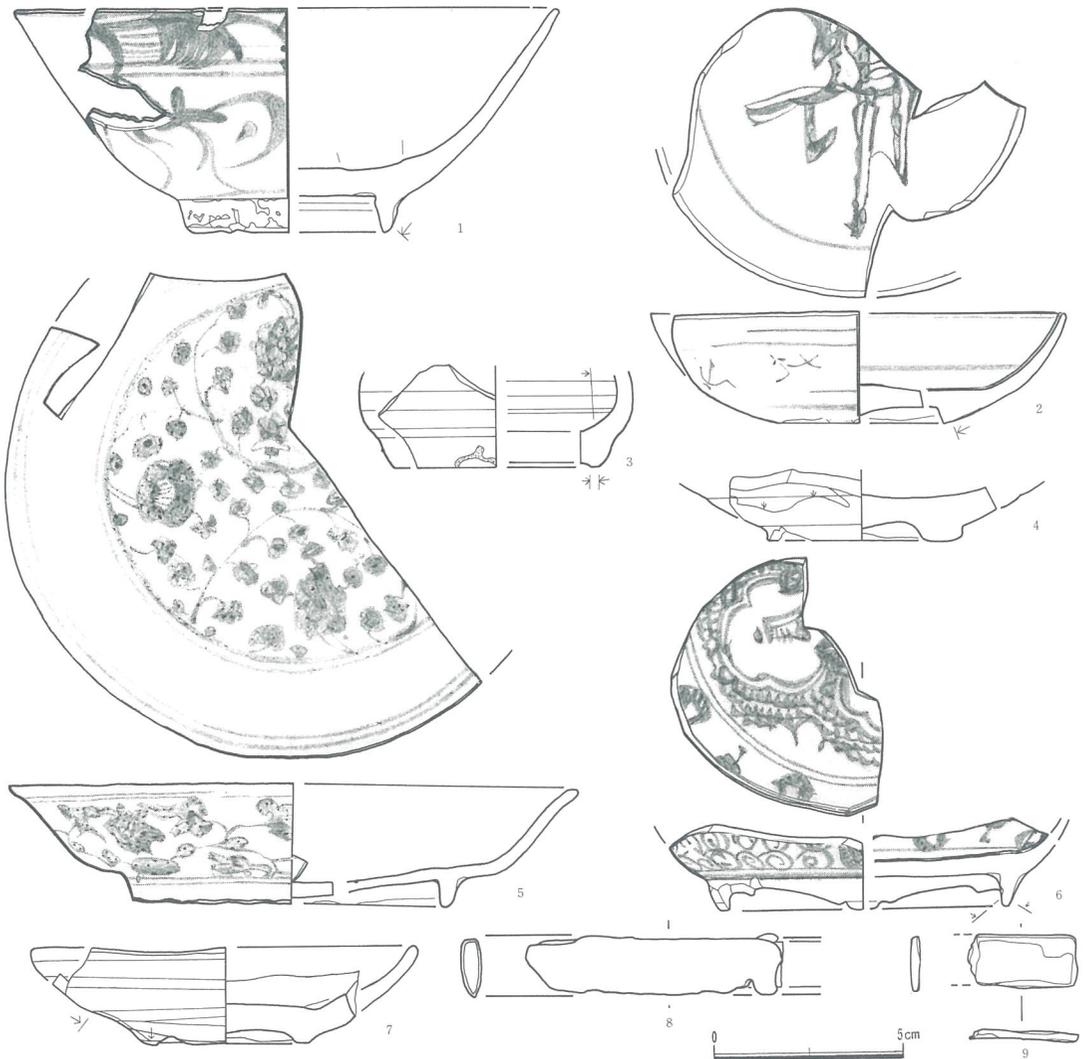
なお器種・製品は殆んどのものがある。陶磁器の中に後述する空壕覆土出土のものとは接合するものが数例あり、13-37などは二条の空壕を越えた東の平端部にまで広がっている。従って基本的に空壕覆土の遺物の殆んどはこの柵列周辺平坦面に帰属する遺物と考えられる。ここでは遺物の概略のみを記した。(松崎)

註1 63年度概報で外側程新しいとしたがこれは更に検討を加えなければならないようである。

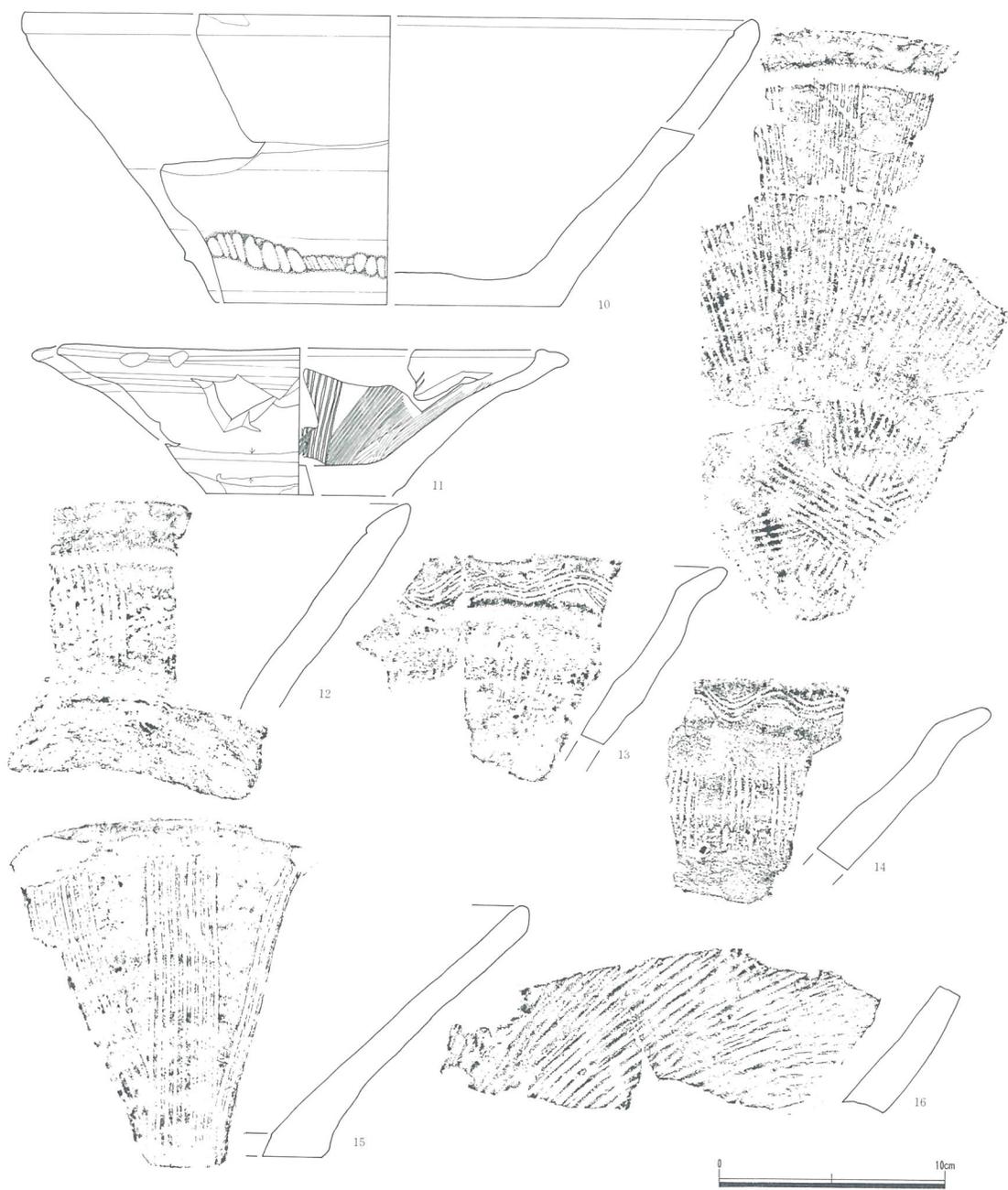
2 これに類するものをつつて勝山館染付碗第I群としたが訂正したい(本概報IV)。

3 擦文土器は土器類が未整理であるのでそれらを併せ明らかにしたい。10年間で10片前後

を数えているが、未洗浄の土器片中に含まれているものもあるかも知れない。



第4図 柵列跡周辺出土遺物①



第 5 图 栅列跡周辺出土遺物②

2. 空壕跡の調査

(1) 位置・概要

第一平坦面と第二平坦面は約5mの比高差を持っている。この第一平坦面の一番奥、第二平坦面の直下に空壕が二重に切られている。この地区の旧地形は約30°の斜面であったがそれを70°余の急傾斜につくりかえ防御を堅くしている。内側の壕はその角度のまま更に掘り下げられており、第二平坦面端部と壕底の比高差は8.3mになる。

二条の壕はほぼ併行して走り宮ノ沢に切り落される。壕と壕の間は小平坦面となるがその南東半で土坑群が検出された。その一基には木棺が納められ、人骨も認められた。他に、鉄製品の出土したものもある。

又、内側の壕の北東端では4対の大形柱穴が壕をはさんで検出されている。

(2) 層序(第6図、表3・4)

耕作土、再堆積層を主とする第I層、O S - aを鍵層とする第II層、館形成時の整地盛土の第III層、遺構覆土のIII'層に区分される。第I層の再堆積層は基盤礫や、その細かく粒状化した小礫・粒と粘質土を多く含む層である。空壕Aの上位から崩落があったとの聞き取り内容をあて、空壕BのそれについてはO S - a降灰以降明治頃の整地を想定したところである(本概報IX)。空壕覆土がAとBで堆積量の異なる事についてはAが段直下にあるため上位からの土の流入による埋没量が多かったと推している。又III' A①とした壕北端面に凹みを持って堆積する層は、上位からの雨水等の流路を示すと思われる。

空壕Bに堆積するO S - aと解している火山灰がそれ以前で館形成期又はその直後に降灰した別のものである場合空壕BとAの関係は全く異ったものになる。後述の壕東の遺構が壕Bに平行して、その平坦部内でまとまりを持っていること、空壕B覆土の遺物は大変少くしかも、I層中からの出土であること、P L. 13-37のように第二平坦面から空壕A、BのI、II層、壕東にまで分布する遺物があることなどの知見と今後の壕中央部の調査結果を併せその結論を得る所存である。

(3) 空壕

検出された空壕は2条である。

内側のAは巾5.3m~10.2m、深さ1.7m~3m。検出した延長44.4m。その南東34mからは宮の沢

に切り落とされるが途中から二手に分れ一方は第二平坦面の下位を取り巻いて南東斜面中腹を回り込む。今一方は第一平坦面の側方に延びている。この分岐点と第二平坦面上部との比高差は11.9m。又この一段低い位置での壕巾は、4m、深さは2m。壕の両側面は中央~西半では青灰色、赤褐色の軟質の岩盤層からなり、直線に近く仕上げられているが南東部から切り落される部位は劈開性の岩盤である為、階段状に近い。壕底に近い部分の両側は上半に比べ急角度をなす。壕底の巾は約30cm。中央付近がやや低く若干の水がたまる(但し壕全体を通して掘り上げた時北半がそのまま寺ノ沢側に傾斜して排水されることは考えられる)。壕掘り上げの明瞭な単位工程等は把握できなかった。南東半の堅い岩盤部の階段状の段差がそれを示すかとも思われる。

外側のBは巾2.5~4.7m、深さ1.1~2.2m。南東端は水松が生えている為掘り切っていないがほぼAと併走し、宮ノ沢に切り落とされると思われる。両側は礫混りの粘土層である。中央附近がAと同様やや低い。又中央より半分は底巾10cmと断面が逆三角形であるが、東半は90cmと広くなり角の丸いU字状となる。

AとBの前後関係については層序の項でも述べたが確実に断定し得るものはない。

(4) 柱列(第7図)

空壕Aの調査区北東端、壕の最も深い部分の両側方に対をなし8個の柱穴が検出された。東側北端の柱間がやや短い西側の柱間からは194cm、6尺4寸等間が求められ、又東西に壕をわたす距離は424cm、14尺である。柱穴の深さは70~100cm、柱穴掘り方の上場は50×60cm前後、柱痕跡の上場は15×20cm前後で、ほぼ垂直である。尚中央の調査で確認しなければならないが、西斜面北端の状況からはこの8個一組で完結するものようである。又、この柱穴列の東西が若干平坦に削られており、特にその東側は溝状の浅い凹みになっている。

やや軟質の岩盤とはいえ、こうした大きく深い掘り方を持ちたい柱を立てる遺構は何であろうか。西は5m余の高さの急斜面が迫り、第二平坦面と連続させるにはそれだけの高さを必要とする。又垂直にたてた時の第二平坦面端部との水平距離は8m余であり、そこに柵列の断続はない(只、柵

表3 16J13、8、3、15J23北壁土層観察表①

層 序		色 調		組 成	備 考			
基本層序	小区分	細 別	JIS notation 土 色 名					
I	①	a	10YR $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$	表土(暗黄褐)				
		b	"	"(黒褐)				
		c	10YR $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$	明黄褐	砂礫が多量に含まれる			
		d	10YR $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$	にぶい褐	砂礫が少なく粘性強い			
		e	10YR $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$	明黄褐	II aに類似するが砂礫がさらに多くあらい	aに類似する		
		f	10YR $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$	にぶい黄褐	多少粘土粒が含まれる	cに類似する		
II	①	a	10YR $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$	にぶい黄褐	黄色砂粒を含みボツボツ			
		b	"	"	II aより粘性つよく砂粒も少ない			
		c	"	"	II bより砂粒が少なくしまっている			
		d	"	"	砂粒の混入がほとんどなく、粘性強い			
		e	"	"		aに類似する		
		f	"	"		bに類似する		
		g	"	"		dに類似する		
	②	a	10YR $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$	灰黄褐	炭化物を若干含む			
		b	"	"	aよりさらに粘性を帯びやしまる			
		c	"	"	aより炭化物が多い	ソフト		
		III A	①	イ	"	にぶい黄褐	粘土粒と砂粒が混合して全体にしまっている	II①eに類似する
				ロ	"	"		イに類似する
				ハ	"	"		
				ニ	"	"		
②	イ	10YR $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$	明黄褐	砂粒が全体でザラつく				
	ロ	"	"	暗褐色土が多く含まれる	ソフト			
	ハ	"	"	粘性を帯びしまっている				
	ニ	"	"	黄色砂粒、礫等が多く含まれる				
	ヘ	"	"	砂粒が含まれず粘性強い				
	ト	"	"	砂粒が多い	ソフト			
	チ	"	"		ロに類似する			
	リ	"	"	ロより砂粒が少なく、粘性強い	イに類似する			
	ヌ	"	明黄褐色土					
	ル	"	"	黄色砂粒が多い	ロに類似する			
③	イ	10YR $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$	灰黄褐	砂粒、暗褐色がまだら状に混入				
	ロ	"	"	暗褐色土が多い	暗い			
	ハ	"	"	ロより黄色砂粒多い	明るい			
	ニ	"	"	砂粒より暗褐色土が多い	暗い			
	ヘ	"	"	黄色砂性が多くザラつく				
	ト	"	"	ハより砂粒が多い	ソフト			
	チ	"	"		ハに類似する			
	リ	"	"					
	ヌ	"	"	細い砂粒が密に混入				
	ル	"	"		イに類似する			
	ヲ	"	"		ヘに類似する			
	ヲ	"	"		ヌに類似する			
④	イ	10YR $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$	にぶい黄褐	小礫、砂粒が主体になるかしまっている				
	ロ	"	"	灰褐色土が若干混入し、やや粘性あり				
	ハ	"	"	ハよりさらに粘性あり				
	ニ	"	"	小礫が多量に含まれる				
	ヘ	"	"	小礫より砂粒が多くしまっている				
	ト	"	"	礫(人頭大)が多量に含まれる				
	チ	"	"	粘土粒が多くしまっている	ハに類似する			
	リ	"	"					
	ヌ	"	"		ホに類似する			
	ル	"	にぶい黄褐	砂粒が多い	ハに類似する			
	ヲ	"	"		トに類似する			
	カ	"	"		チに類似する			
ヨ	"	"	砂粒のみでしまっている	リに類似する				
タ	10YR $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$ 、 $\frac{7.5}{2}$	黒褐色土	粘性つよくしまっている	ヘに類似する				

表3 16J13、8、3、15J23北壁土層観察表②

層 序			色 調		組 成	備 考
基本層序	小区分	細 別	J I S notation	土 色 名		
III B		イ	10Y R%, %, %	明黄褐色土	砂礫を多く含むが粘性強くしまっている 砂礫が少なく粘性強い 細い砂粒と粘土粒の混合でしまっている 砂礫粘土性が多い ニより粘性強くしまっている,若干炭化物混入 へより砂粒多い	ソフト ハに類似するがややソフト ソフト
		ロ	10Y R%, %	黄褐色土		
		ハ	10Y R%, %, %	にぶい黄褐色土		
		ニ	10Y R%, %	褐色土		
		ホ	"	"		
		ヘ	10Y R%, %, %	にぶい黄褐色土		
		ト	"	"		

表4 16I14~15I19北壁土層観察表①

層 序			色 調		組 成	備 考
基本層序	小区分	細 別	J I S notation	土 色 名		
I	①	a		褐	黄赤色基盤礫粒ローム基盤粒、炭化物混入シルト	堅密
		b	10Y R%	褐		
				褐、暗赤褐、明褐		
	②	a	10Y R%, 10R%, 7.5Y R%, 7.5Y R%	黄褐	基盤礫90% 3cm以下の基盤礫 炭化物 2cm以下の基盤礫 4% aの基盤礫50% 基盤粒混入 " シルト 2cm以下基盤礫混入 1cm以下 " 基盤礫混入 シルト 2cm以下基盤礫、炭化物混入 シルト2cm、下基盤礫混入、シルト 5cm以下基盤礫	堅緻 " 堅緻 堅緻 "
		b	10Y R%, %	黄褐		
		c	10Y R%	褐		
		d	10Y R%	"		
		e	10Y R%	"		
		f	10Y R%, 7.5Y R%	"		
		g	10Y R%, %	黄褐、褐		
		h	10Y R%	褐		
		i	7.5Y R%	"		
		j	7.5Y R%	"		
	k	7.5Y R	明褐			
	l	10Y R%	褐			
③	a	10Y R%	褐	7cm 基盤礫 80% 粘土層	堅密	
	b	7.5Y R%, %	明褐、褐			
II	①	a	10Y R%	暗褐	シルト ローム基盤粒 混入 ローム基盤粒 火山灰層状に挟む シルト 火山灰、炭化物混入	密、堅緻 ソフト
		b	10Y R%, %	褐、暗褐		
		c	10Y R%, %	黄褐、褐		
		d	10Y R%	褐		
		e	10Y R%	暗褐		
②	a	10Y R%	褐	炭化物含有、粘性堅、シルト 炭化物基盤礫含有、粘性堅、シルト		
	b	7.5Y R%, 10Y R%	明褐、褐			
III		a	7.5Y R%, 10Y R%	明褐、褐	0.5 ~ 3cm基盤礫含有 5% 2cm以下基盤礫 20%炭化物含有 8mm黄緑色基盤礫炭化物、火山灰含有シルト 基盤礫粒混入 黄緑橙色基盤粒80% 黄橙緑色基盤粒、ロームブロック混入 基盤粒炭化物混入 基盤礫粒混入 基盤礫炭化物混入	やや粗 粗 堅緻 かたい やや粗
		b	7.5Y R%	暗褐		
		c	7.5Y R%	褐		
		d	7.5Y R%	明褐		
		e	10Y R%	褐		
		f	7.5Y R%	"		
		g	10Y R%	"		
		h	10Y R%	黄褐		
		i	5Y R%	赤褐		
III A		イ	10Y R%	褐	基盤粒層、炭化物含有 " 砂層 砂粒層1ミリ 1cm以下基盤礫層火山灰混入 " 1ミリ以下基盤粒混入 砂質土層 2cm以下基盤礫層 火山灰混入 1cm基盤礫混入基盤粒層砂粒 基盤礫 火山灰混入シルト 基盤礫2cm以下混入 砂粒層 基盤礫50% 7cm大礫層90%5ミリ以下川砂含む砂礫層 3ミリ以下基盤粒混入 5ミリ " 8ミリ以下基盤礫混入 基盤粒 " 基盤粒混入層 炭化物混入	粗 " 粗 " 粗 " 固く粗 粗 " 固い " 堅緻
		ロ	7.5Y R%	"		
		ハ	7.5Y R%, %	にぶい黄褐、褐		
		ニ	"	"		
		ホ	7.5Y R%	明褐		
		ヘ	7.5Y R%, %	褐		
		ト	7.5Y R%, 10Y R%	"		
		チ	7.5Y R%	明褐		
		リ	10Y R%	褐		
		ヌ	7.5Y R%, %	暗褐		
		ル	7.5Y R%, %	"		
		ヲ	10Y R%	褐		
		ワ	10Y R%, 7.5Y R%	"		
		カ	10Y R%	"		
		ヨ	7.5Y R%	黄褐		
タ	10Y R%	褐				
レ	"	"				
ソ	7.5Y R%	暗褐				

表 4 16 | 14~15 | 19北壁土層観察表②

層 基本層序	序 小区分	色 細 別	色 調		組 成	備 考
			J I S notation	土 色 名		
III B		イ	7.5Y R%	明褐	堅緻 シルト シルト 団粒状シルト 炭化物 基盤礫 2cm以下混入 炭化物混入シルト 炭化物基盤礫8ミリ以下混入堅緻シルト	イより明 密 密 基盤粒
		ロ	7.5Y R%~%	橙、明褐		
		ハ	7.5Y R%	明褐		
		ニ	7.5Y R%	"		
		ホ	7.5Y R%	"		
III C		イ	"	"	基盤粒混入層固い "	堅緻 密 イよりややソフト 堅緻
		ロ	7.5Y R%, %	橙、明褐		
III D		イ	10Y R%	褐	3cm以下基盤礫混入	堅緻
III E	①	あ	7.5Y R%	褐	シルト	あよりやや暗い
		い	7.5Y R%	"		
		う	7.5Y R%	"		
		え	7.5Y R%	にぶい褐		
		お	7.5Y R%	褐		

列の内側の追求をを行っていないことは先述した)。第二平坦面と連続させると第一平坦面とは連続出来ず、又その逆でもあると思われる。前後の平坦面から独立した施設の可能性が高いようである。現時点ではこれ以上の推測は困難であり、壕北半及び中央部分の調査結果を併せて検討することとしたい。

空壕Bの西側で壕に沿って小柱穴列が検出された。中央付近をはじめ所々間隔があく。中央南の土壇(墓)群付近は重複のため検出できなかったのかも知れない。又北端に行くに従い空壕Bから離れるようである。土壇との接近(重複?)は形成時期差を示すとも推される。空壕Bとの位置関係にも同様の事が言えよう。これらについても又、壕の中央及び北半の調査の結果を併せて検討することとしたい。

尚、土壇(墓)群西のピット群は必ずしも柱穴とは確認できなかったものである。

(5) 出土遺物 (P L. 14~19)

陶磁器、鉄・銅製品、木製品、石製品他が出土した。

前項で述べたがこの空壕跡出土遺物の殆んどは第二平坦面からの流入であり本来第二平坦面の遺構を検討する資料となるものと思われる。

a 陶磁器

青磁、白磁、染付、赤絵、瀬戸・美濃灰、鉄釉、唐津、越前、珠洲系等の碗、皿、坏、盤、播鉢、甕、壺類が出土する。他に擦文土器類6片と縄文時代の遺物がある。

青磁：無文端反り碗、盤、線描き蓮弁碗、稜花皿等がある。

白磁：丸碗、端反り皿、輪花皿、小坏等がある。

端反り陶質の皿に漆で接いだものがある。又P L. 14-65は器体が厚く高台以下無釉となるものである。

染付：口縁端反りの碗、蓮子型碗、端反り皿、菴笥底丸皿、小坏がある。碗には28、32等の高台の大きなものも見られる。又端反り皿に梵字文を描く例がある。

瀬戸・美濃：灰釉は無文と剣先蓮弁の碗、端反り、丸皿、襷皿等がある。端反り皿は中型のものも出土する。又胴部以下無釉となる皿がある。皿の内外面が火熱を受け、見込に溶融物の付着するものがある。他への転用であろうか。^{註1}

鉄釉は碗と皿である。碗は口縁部が僅かに括れる輪高台で高台脇の削り巾の狭い類が多い。他に一段括れ内反りの高台を持つと推されるもの(15-47)、全体に低平な碗などがある。50の高台脇の削りは殆んど巾を持たない。皿は輪高台で腰部以下露胎の腰折皿の同一個体4片である。

播鉢：越前、瀬戸・美濃(15-54)がある、甕・壺類は越前系、珠洲系(19-24)である。19-18は内面轆轤整形痕の残る備前系の袋物かと推される。

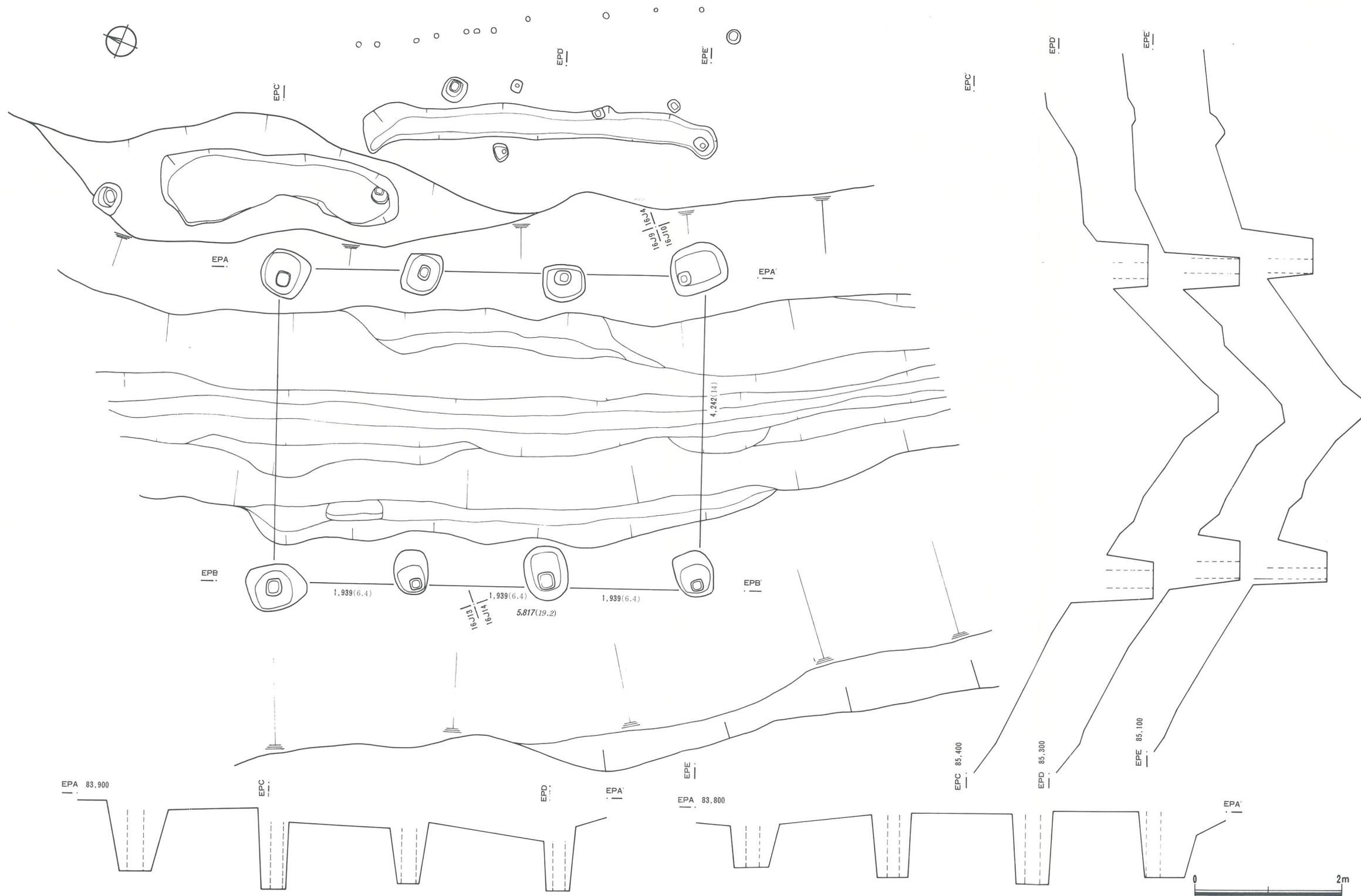
b 金属製品

鉄、銅製品がある。(P L. 16、19)

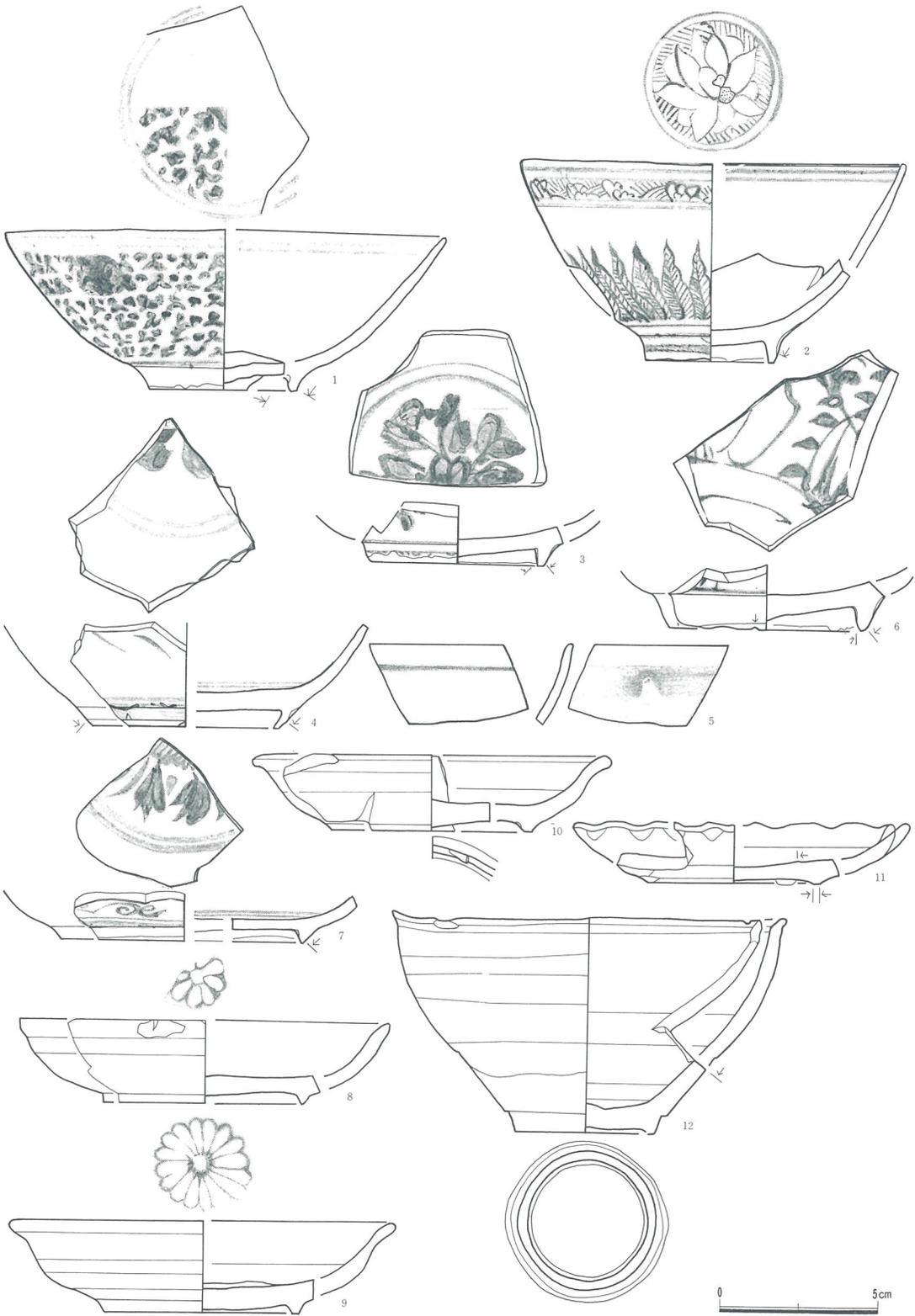
鉄製品：鉄鍋、釘、小札、茶釜等である。鉄鍋は2及び3穴の吊耳のものがある。内耳については不明である。52は柱穴列東溝状の凹みから出土した。一端が角で敲いた形跡があり他端は扁平に尖るようである。タガネのようなものか。49は扇形、断面三角形で形状は斧に似る。刃部にあたる部分は、衝撃により凹凸を呈す。他端に欠失の形跡はなく若干の凹みと肥厚を呈するが、柄を装着するようにはなっていない。56は底面が直角に近

表5 15J5、10、15南壁土層観察表

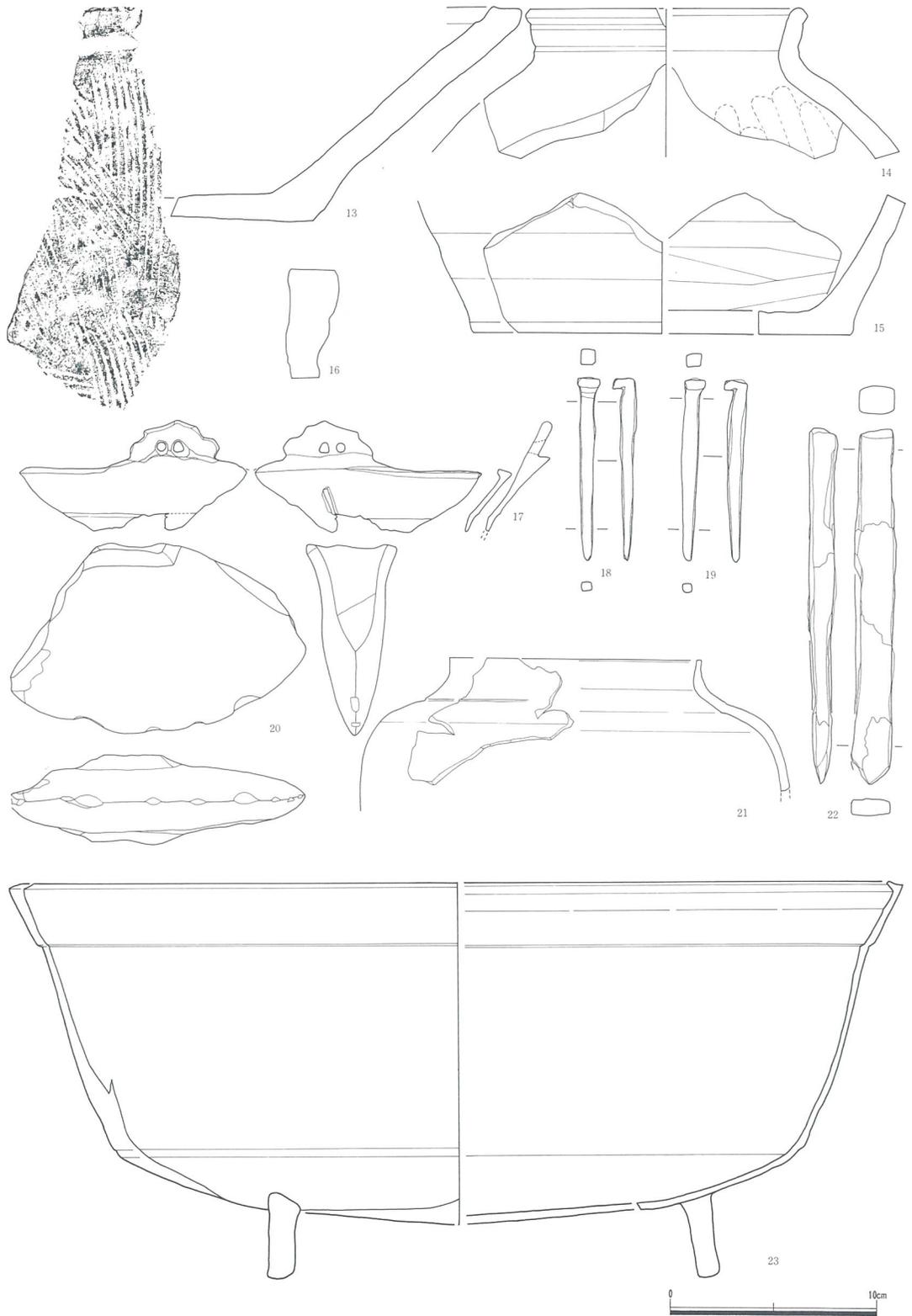
層 序			色 調		組 成	備 考	
基本層序	小区分	細 別	J I S n o t a i o n	土 色 名			
I		a	7.5Y R $\frac{2}{2}$ ~ $\frac{3}{2}$	褐	シルト	腐殖耕作土 ソフト かたくしまる	
		b	7.5Y R $\frac{3}{2}$	"	基盤粒含有		
II					火山灰粒混入		
III		a	7.5Y R $\frac{2}{2}$, 10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{3}{2}$	褐、にぶい黄褐	基盤礫・粒 炭化物混入	密かたくしまる 密かたくしまる かたくしまる かたくしまる 粗軟い eよりややソフト eよりやや暗くソフト しまる nより若干明るい しまる	
		b	10Y R $\frac{2}{2}$	にぶい黄褐	基盤礫粒混入 シルト		
		c	7.5Y R $\frac{2}{2}$, 10Y R $\frac{2}{2}$	褐、暗褐	基盤礫・粒・炭化物混入シルト		
		d	7.5Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{3}{2}$, 10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{3}{2}$	褐	基盤礫・粒・炭化物混入		
		e	7.5Y R $\frac{2}{2}$	"	基盤礫・粒塊状		
		f	10Y R $\frac{2}{2}$	"	基盤礫粒含有		
		g	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{3}{2}$	褐色	基盤礫大小多量混入粘土粒含有		
		h					
		i	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{3}{2}$, $\frac{4}{2}$	明黄褐色	基盤礫粒混入 粘土粒多少含有		
		j	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{3}{2}$, $\frac{4}{2}$	明褐色	小礫少量混入 粘性		
		k	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{3}{2}$, $\frac{4}{2}$	明褐色	小礫少量混入 粘性		
		l	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{3}{2}$, $\frac{4}{2}$	明褐色	小礫少量混入 粘性強		
		m	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{3}{2}$, $\frac{4}{2}$	明黄褐色	粘性		
		n	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{3}{2}$, $\frac{4}{2}$	にぶい黄褐色土	基盤礫粒多量混入		
		o	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{3}{2}$, $\frac{4}{2}$	"	粘土 フロック多量含有		
		p	10Y R $\frac{2}{2}$, $\frac{3}{2}$	黄褐色土	基盤粒混入		
III'A	①	イ	10Y R $\frac{2}{2}$	褐	5mm以下基盤粒粘土粒含有	密、かたい第35号整穴覆土 シルト 基盤粒、焼土粒混入 シルト 焼土粒多量混入 シルト	
		ロ	7.5Y R $\frac{2}{2}$ ~10Y R $\frac{2}{2}$	暗褐、黒褐			
		ハ	10Y R $\frac{2}{2}$	暗褐			
		ニ	7.5Y R $\frac{2}{2}$	"			
	②	イ	7.5Y R $\frac{2}{2}$, 10Y R $\frac{2}{2}$	黒褐	2~5mm黄色基盤粒2mm以下粒状澤含有	ロより暗い イより赤い	
		イ	10Y R $\frac{2}{2}$ ~ $\frac{3}{2}$	黒、黒褐	炭化材密集 シルト		
		イ	7.5Y R $\frac{2}{2}$	黒褐	3mm以下基盤礫、焼土粒炭化物含有		
		ロ	5Y R $\frac{2}{2}$	"	" "		
III'B	①	あ	7.5Y R $\frac{2}{2}$	暗褐	砂粒、粘土粒、炭化物含有	密 やや粗 かたい	
		い	7.5Y R $\frac{2}{2}$	黒褐	炭化物、焼土粒含有		
		う	7.5Y R $\frac{2}{2}$	極暗褐	砂粒、炭化物含有		
		え	7.5Y R $\frac{2}{2}$ ~ $\frac{3}{2}$	暗褐	焼土粒、炭化物含有		
		お	7.5Y R $\frac{2}{2}$ ~ $\frac{3}{2}$	褐、暗褐	砂粒		
		か	7.5Y R $\frac{2}{2}$	褐	砂粒、焼土粒、炭化物含有		
	②	き	7.5Y R $\frac{2}{2}$	"	基盤礫・粒含有、砂質 シルト	かたい 密 密	
		く	7.5Y R $\frac{2}{2}$	"	基盤礫・粒、粘土粒混入 粘性シルト		
		け	7.5Y R $\frac{2}{2}$ ~ $\frac{3}{2}$	"	2~3cm礫混入 粘性 シルト		
		こ	7.5Y R $\frac{2}{2}$	"	4cm礫 炭化物混入 シルト		
		さ	10Y R $\frac{2}{2}$	"	基盤礫粒、砂粒炭化物混入シルト		
		し	10Y R $\frac{2}{2}$ ~ $\frac{3}{2}$	"、暗褐	1cm基盤礫、粒混入シルト		
	③	す	7.5Y R $\frac{2}{2}$	褐	基盤礫少量混入ソフトシルト	かたい かたい かたくしまる密 かたい密 軟い粗	
		せ	7.5Y R $\frac{2}{2}$ ~ $\frac{3}{2}$	にぶい黄褐、褐	基盤礫粒混入シルト		
		そ	7.5Y R $\frac{2}{2}$	褐	シルト		
		た	10Y R $\frac{2}{2}$ ~ $\frac{3}{2}$	暗褐	基盤礫粒、炭化物混入 シルト		
		ち	7.5Y R $\frac{2}{2}$	褐	"		
		⑤	つ	10Y R $\frac{2}{2}$	"		基盤礫混入
			て	10Y R $\frac{2}{2}$	"		シルト
			と	7.5Y R $\frac{2}{2}$	"		シルト
			な	7.5Y R $\frac{2}{2}$	"		粗 シルト
		⑥	に	7.5Y R $\frac{2}{2}$	"		基盤礫粒混入
			ぬ	7.5Y R $\frac{2}{2}$	"		基盤礫粒少量混入 粘性シルト
		⑦	ね	7.5Y R $\frac{2}{2}$ ~ $\frac{3}{2}$	"		基盤礫少量混入 シルト
の	10Y R $\frac{2}{2}$		"	基盤礫粒少量混入 シルト			



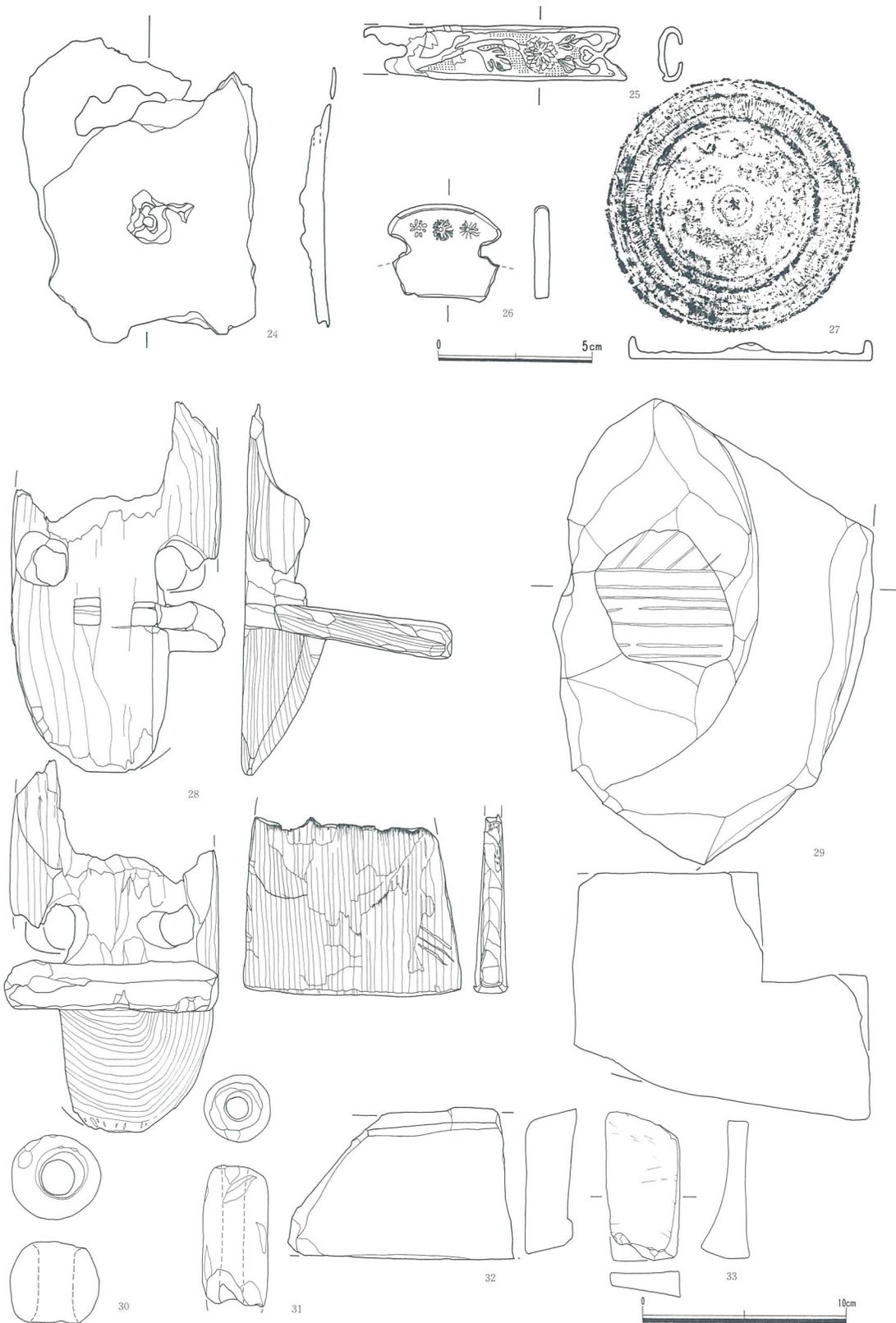
第 7 图 空壕迹柱列



第8図 空壕覆土出土遺物①



第9図 空壕覆土出土遺物②



第10図 空壕覆土出土遺物③

くつくられる大型の容器である。55、56は同一寸法の釘で未使用品かと思われる。一つの規格を示すものであろう。48は頸部が括れ、丸味を持って肩から下半にいたる。頸部に1条の微隆線がめぐる。茶釜かと推するが銹化の故か器体が薄く、下半の丸味も不足するようでもある。壺形の容器かも知れない。

銅製品：鏡、甲冑金物等である（P L, 19）。

36は径7.7cmの鏡で「菊花双雀鏡」と称し得ようか。内区は鈕座に珠紋帯を繞らせ、その上方に雀の「向鳥文」を配し、菊花を散らす。内区と外区は2mm弱の界線で限られ、外帯には二重にやや斜行気味の櫛齒紋が廻り界線の内側には右下りの5個一単位の珠紋が8単位配される。18は八双金物で菊花が配され地は七子につくられる。29は厚さ5mm弱の僅かに湾曲するもので一角に薄い把手状のものが作られる。中央が盛り上がる。仏具の一種であろうか。

c 木製品 下駄、折敷、箸、杵状のもの、木の皮、柱痕などが出土した。（P L, 16）

2～7は箸の欠損品である。全体に面取りをし両端を更に細く削り出す。8～14は偏平な板（杵）状の木片である。厚さ2～3mm。11は特に薄く1mm程である。15は折敷の底板。四隅を切り落し四辺中央に2個の穴がかけられる厚さ1mm弱。20は木の表皮を切断したものである。杉の植樹されていない勝山館の時期ではヒバの皮と推される。17は長円形の台に銀杏歯二枚を差し入れた露卯下駄で（高）足駄ともされる。欠損品の為、全長、前壺等は不明である。鼻緒の孔は内傾する。18はそれに詰めた木製のクサビである。太い方の木口は平坦になる。19は空塚に跨がる柱列の南西隅から出土した柱痕の残欠である。13cm程の巾を残しており一辺がこれを上回る角柱であったと推されよう。

d 石製品他（P L, 16）

66は石臼（下臼）の半欠品である。擬灰岩質の軟らかみの石でつくられ受皿がつく。台底面は荒いノミ跡が残り削り上げられている。目は不明。欠損品ではあるが、臼の径は220mm前後と推される。P L 20-1は鯨又海獣骨を素材にした骨角器である。基部を欠失する。基部は横長の多面体、中央偏円形、先端部偏平の断面形で中軸線上に刺突部が作られる。稜線は明らかでない。ヤス等の刺突

具であろう。

58、59は鉄滓である。碗形鍛冶滓であろう。他に砂粒等を多く含む陶製羽口、陶錘等が出土している。

陶磁器は、茶入以外の殆どどの器種があり製品も同様であることは柵列周辺と変りがない。又その年代も15世紀末～16世紀末の間のもものが大部分である。

鉄製品のうち鍋類は破片が多く全体を推することが困難であるが、保存処理後に接合作業を進め再検討する予定である。

鏡は室町期前半に位置付けられるものであろう。かつて館内から八稜鏡の破片が表採されているが本品は既出土の7面の中では幾分古いものであろう。

今迄数点の下駄が出土しているが露卯の（高）足駄ともされる本例ははじめての出土である。

受皿の付く石臼は茶臼とされるが、既出土の八分角安山岩のものが径180mm前後でつくりも丁寧であるのに比べると粗雑の感が強い。（松崎）

註）「るつぼ」としての使用も想定される。

(6) 土葬墓（第11図）

16 I 9区空塚Aと空塚Bの中間の平坦部にある。調査はN60°Eを基軸として4分法によることにした。その結果和釘、及び木棺の一部である木片・骨等が検出され、骨は加熱されていないので土葬墓である事が判明した。セクションSPA～A'によると南西及び北東の両側の柱穴が当土葬墓を切っており、柱穴の方が新しい事が判明した。また覆土12は木棺を納める際の微小基盤礫を主体とした整地盛土層である。10はシルト層。それより上部の層は10YR 5/4～5/3のシルト+基盤礫+ロームブロックの混層であり再堆積の状況を呈していた。尚覆土をサンプリングしフローテーションも行なった。

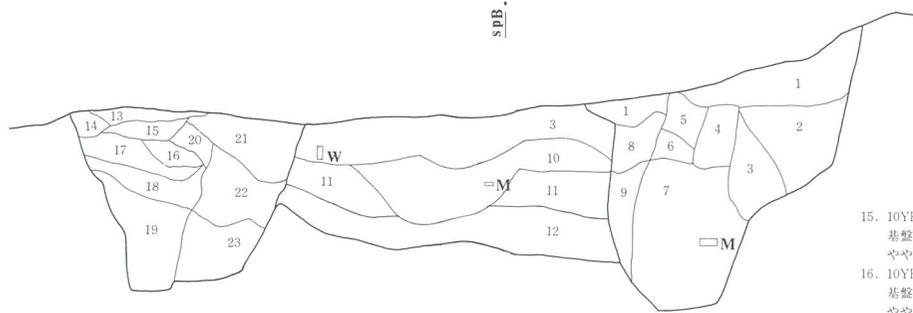
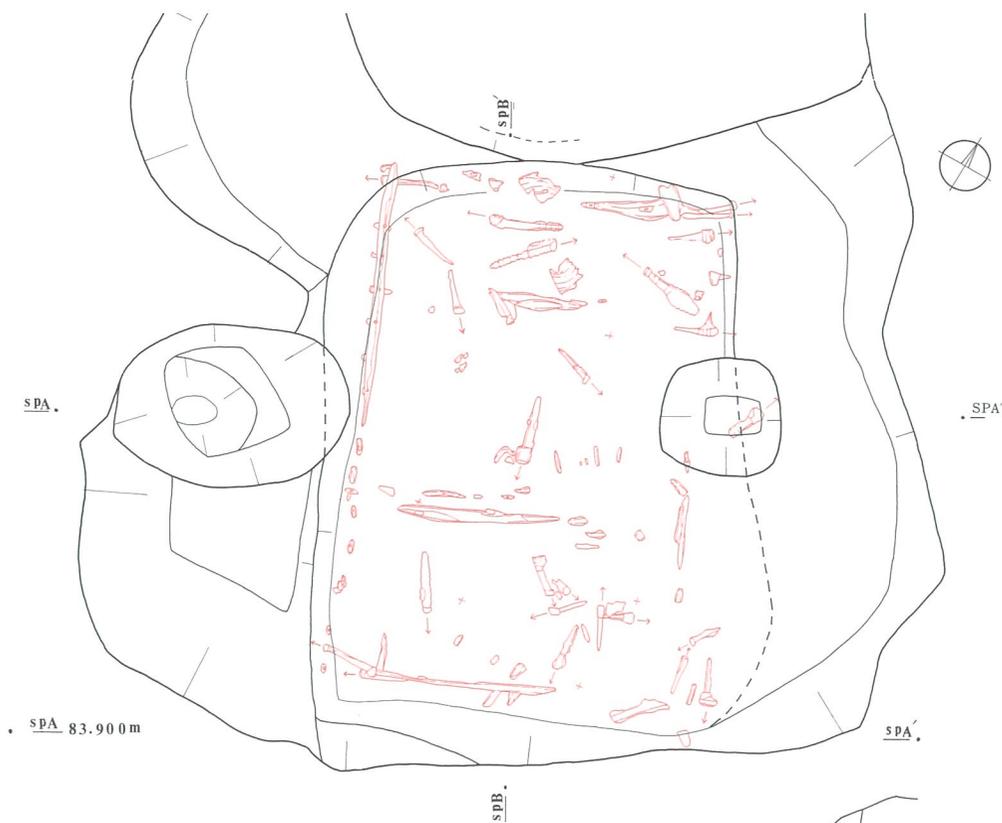
出土遺物

和釘、銅製品、陶磁器、骨が出土した。

和釘（第13図1～第18図49）

いずれも棺材の附着しているものであり特に南西側、南側では木質の残存状況が良く横板の一部が残在していた。折釘、切釘、さっぱ釘の3種類が使用されていた。

折釘（第13図1～19、第14図20～31、第15図32～42、第16図43）



- 1. 10YR%にふい黄褐シルト
10YR%にふい黄橙ロームブロック30%
基盤礫15%
密・堅致
- 2. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫10%やや密
- 3. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫10%
2よりやや明るい。

- 4. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫(中)10%
3よりやや粗
- 5. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫(中)10%
4と殆んど同じだが若干暗いやや粗
- 6. 基盤礫(大)粒径2cm
+
10YR%にふい黄褐シルト
やや密

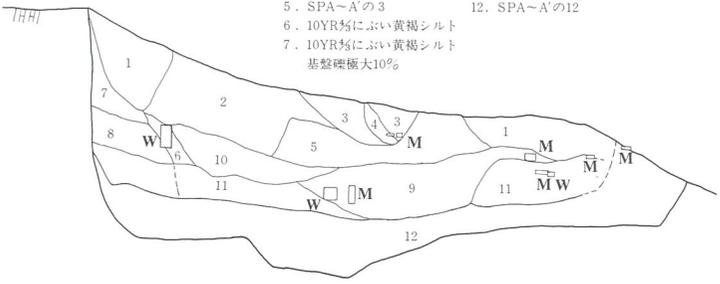
- 7. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫(極少)35%
やや粗
- 8. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫含有
密
3に比し礫が大きい
- 9. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫10%やや粗
- 10. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫10%やや粗

- 11. 10YR%にふい黄褐シルト
やや粗
8より若干密
- 12. 整地層
微少基盤礫層
- 13. 10YR%にふい黄褐シルト
35%
+
基盤礫層(65%)
密
- 14. 基盤礫層
三角地積
密・堅致

- 15. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫5%
やや密
- 16. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫少量
やや粗
- 17. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫少量
やや粗
- 18. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫40%
- 19. 10YR%にふい黄褐シルト
60%
+
10YR%明黄褐シルト
+
基盤礫(極小)
- 20. 10YR%にふい黄褐シルト
+
10YR%にふい黄褐シルト
の混層(50:50)
基盤礫極小2%
やや粗
- 21. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫(極小~極大)
- 22. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫30%粒径3cm大
やや粗
- 23. 10YR%にふい黄褐シルト
35%
+
基盤礫65%粗

- 1. SPA-A'の1
粗
- 2. 10YR%明黄褐シルト
基盤礫(極小~中)20%
- 3. 10YR%にふい黄褐シルト
⑤よりやや粗
- 4. 10YR%にふい黄褐シルト
- 5. SPA-A'の3
- 6. 10YR%にふい黄褐シルト
- 7. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫極大10%

- 8. 10YR%にふい黄褐シルト
基盤礫15%
やや粗
- 9. SPA-A'の10
10.
- 11. SPA-A'の11
- 12. SPA-A'の12



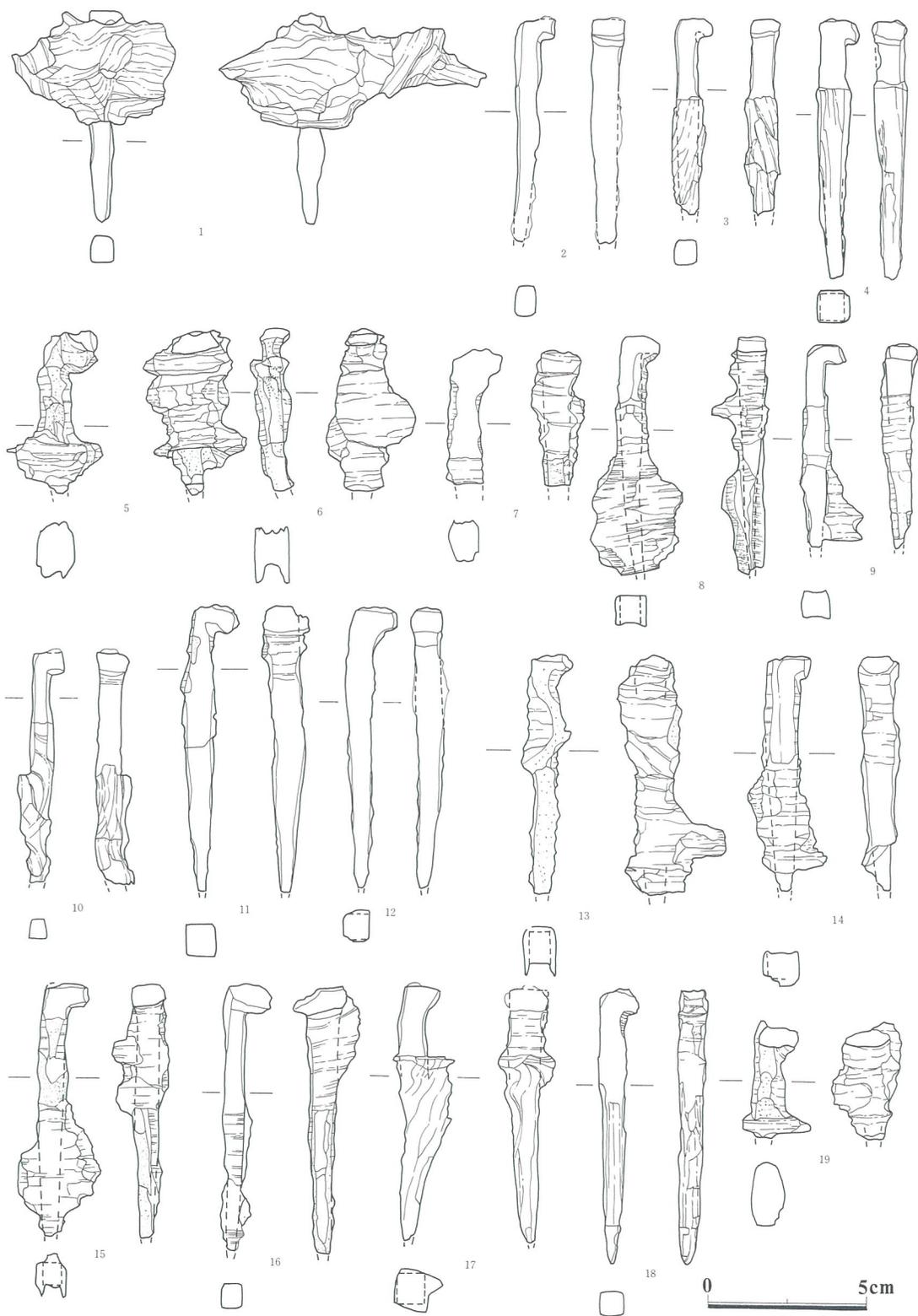
第11図 土坩墓 (平面図、セクション図)



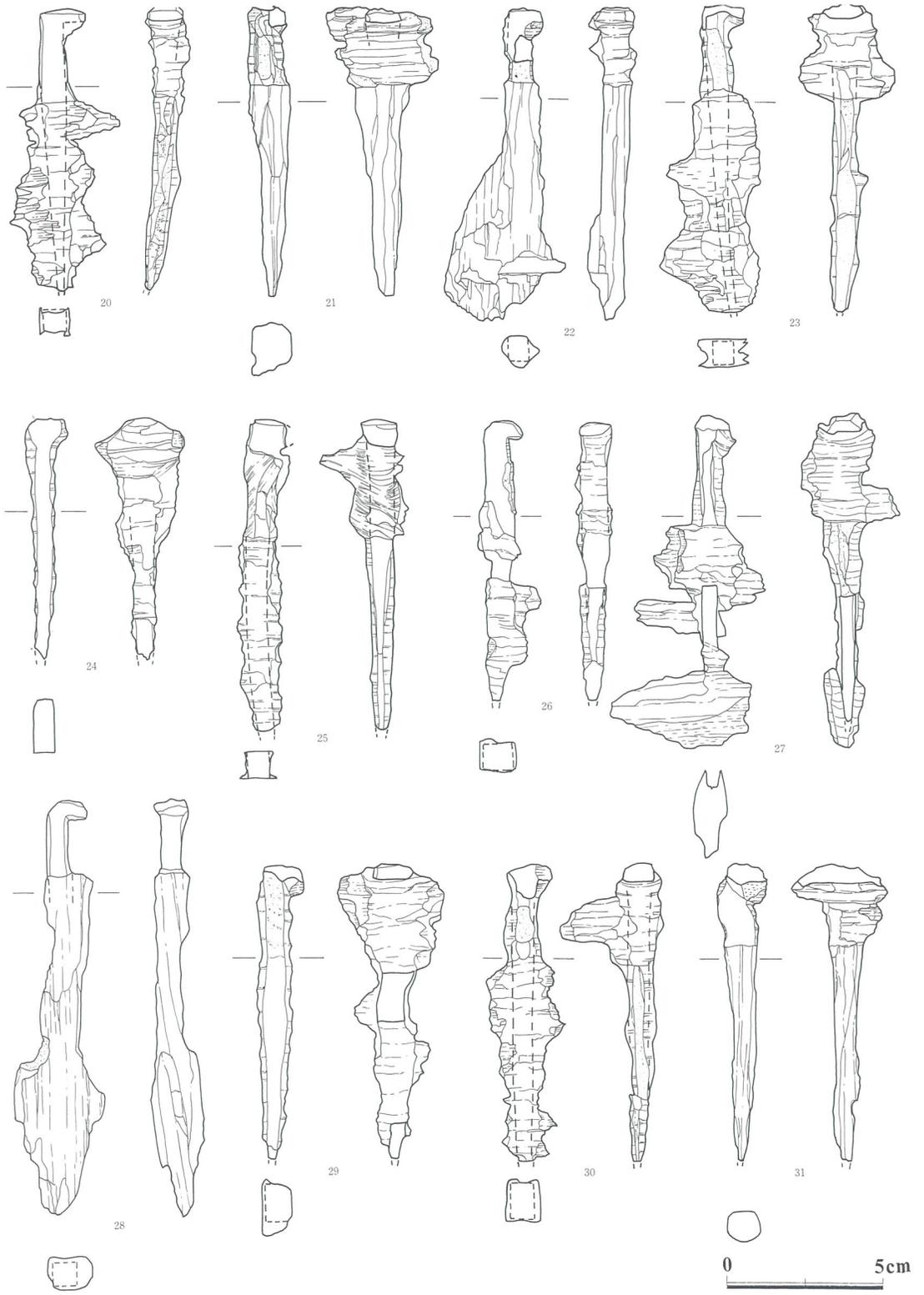
- 折釘
- 切釘
- ▼ さっぱ釘
- N 骨
- NT 歯
- Cu 銅製品
- E 陶磁器

0 25cm

第12図 土塚墓遺物分布状況（釘・その他）



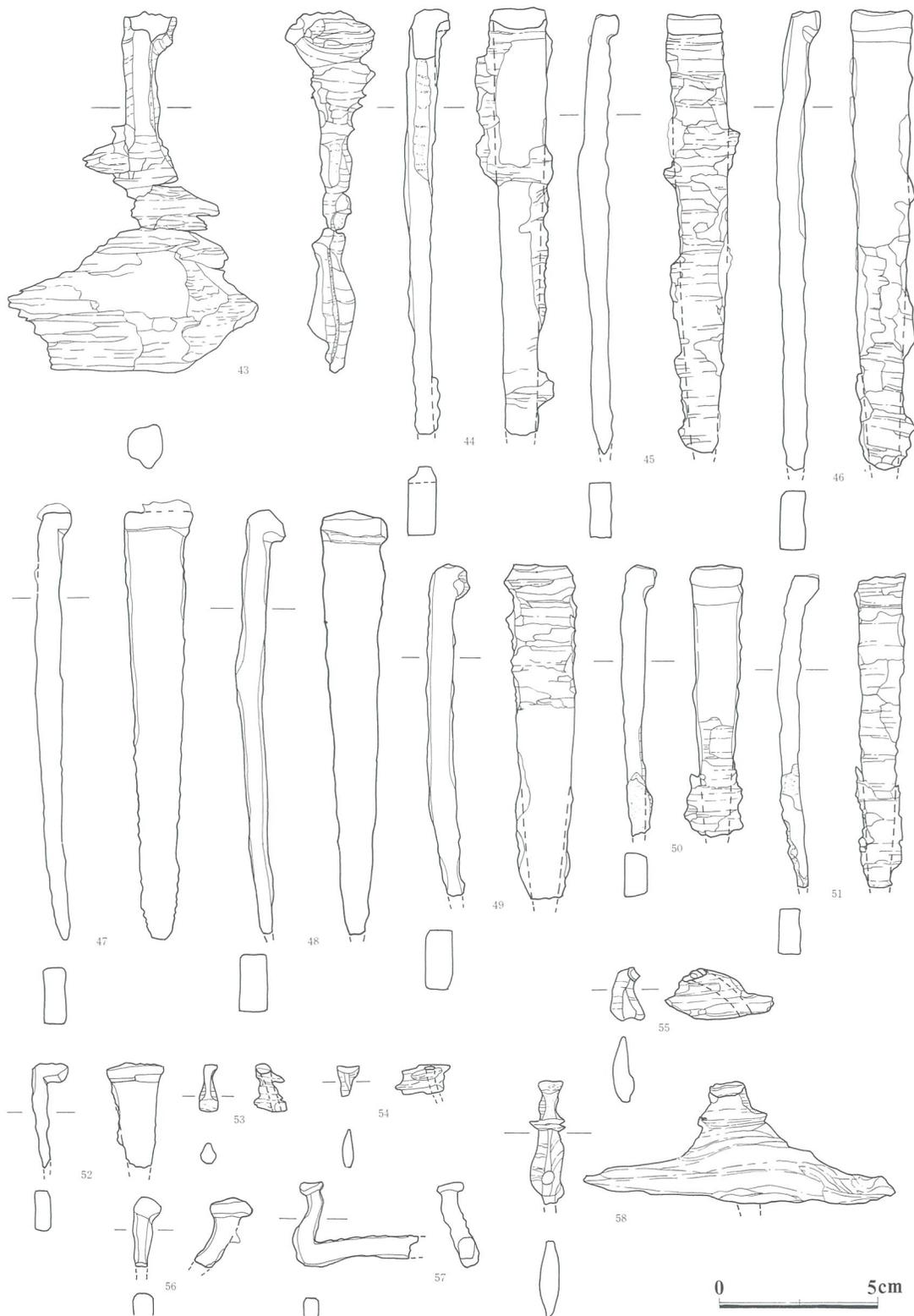
第13図 土塚墓出土遺物（釘）



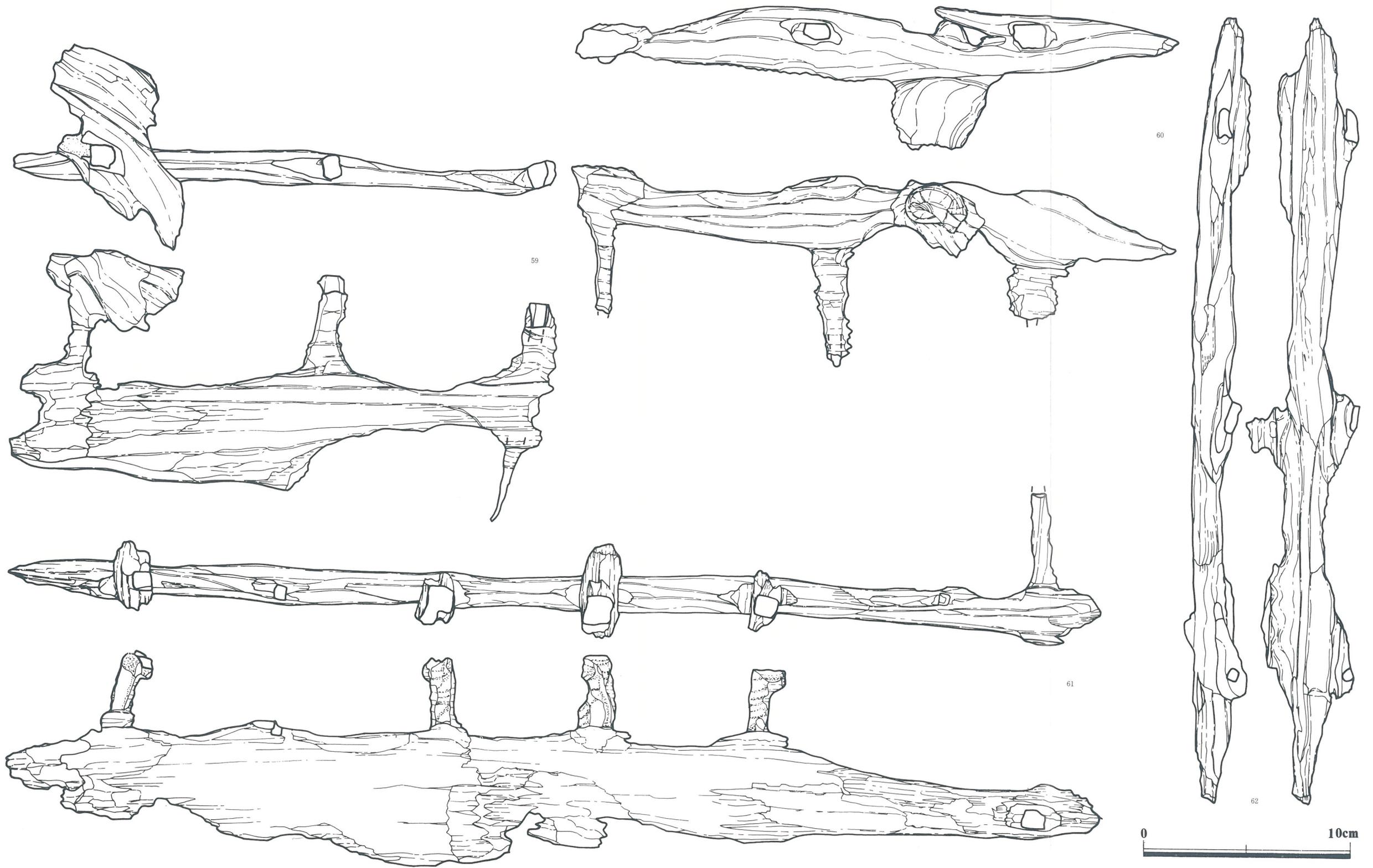
第14図 土塚墓出土遺物（釘）



第15図 土塚墓出土遺物（釘）



第16图 土坛墓出土遺物 (釘)



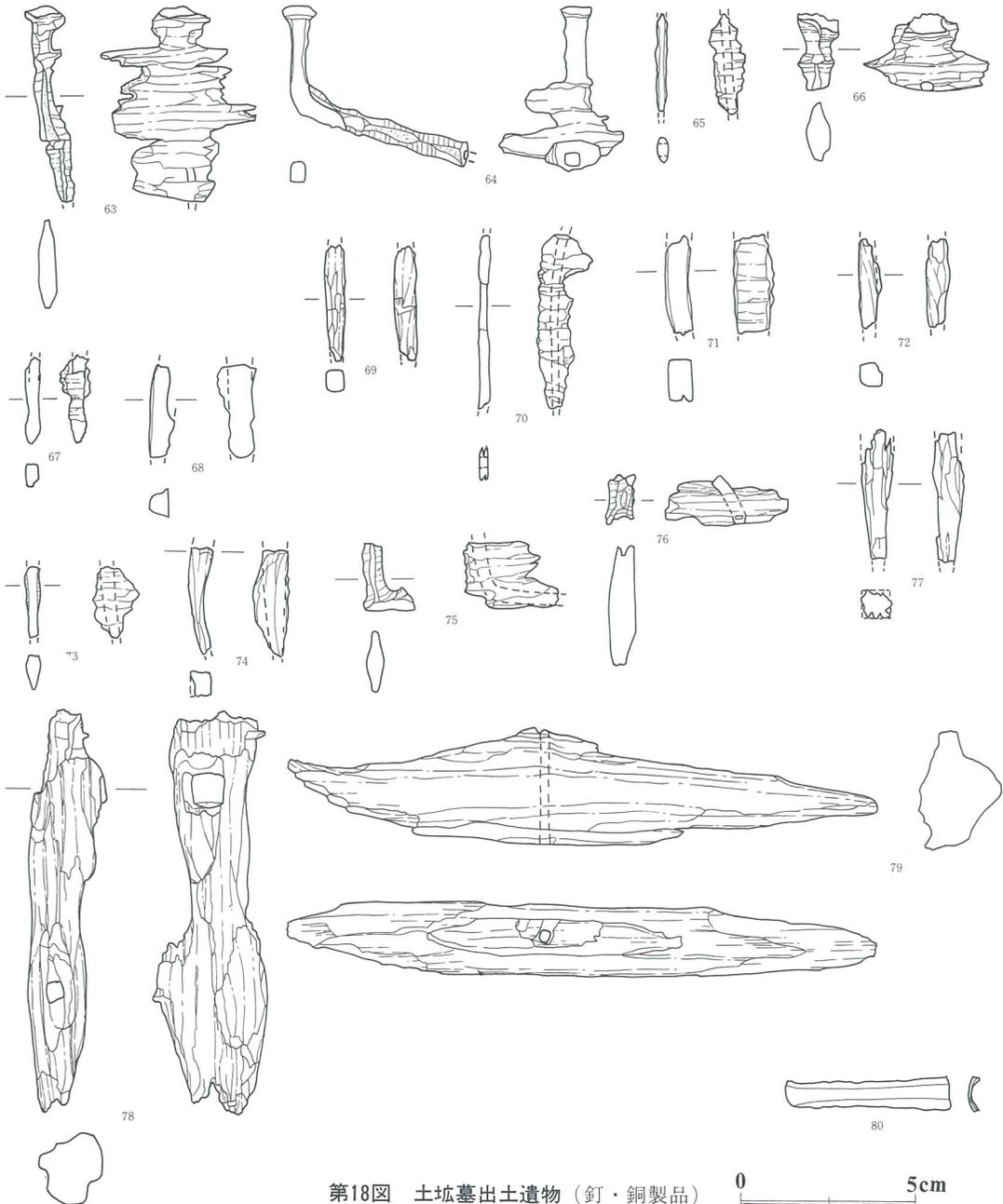
第17図 土塚墓出土遺物（釘）

切釘の基部及び上部を折り曲げる事により頭部
 を作出するものであり、基部と同じ太さで頭の曲
 がった釘である。尚長さは脚部が欠損、基部は木
 質が附着しておりいずれも基部中央幅推定寸法、
 頭部寸法等を検討して推定長を出した。2寸5分
 (第13図1、6) 3寸(第13図2~19、第14図20~
 31)、3寸5分(第15図37、38、41、第16図43)そ
 の他に寸法が3寸~3寸5分と考えられる第17図

59~62の棺材附着の折釘も含め計56本検出された。
 さっぱ釘(第16図44~52)

基部の偏平な平釘の一種で頭部の曲がったもの
 である。折釘よりも頭の折れが短かく小さい。3
 寸5分(第16図50~52)、5寸(第16図44~49)の
 2種計9本が検出された。3寸5分では基部の幅
 が4分、5寸では6分程である。

切釘(第16図53~57、第18図64)



第18図 土墳墓出土遺物(釘・銅製品)

頭部つくり出しのない釘である。1寸（第16図53～55）、1寸5分（第16図56）、2寸5分（第16図57）八、3寸（第18図64）の4種計12本が検出された。尚第16図52は平折釘かさっぱ釘か不明である。その他は小破片の為種類は不明。

銅製品（第18図80）は用途・名称等は不明。その他美濃の碗か皿と思われるものが出土しているが小破片のため詳細は不明。さらに覆土及び最下部整地層のサンプリングをしフローテーションを行なった結果、覆土は総量53,425gに対し骨片1.4g、炭化物2.4g、鉄片6.8g、種子40g、釘細片13.5gが検出された。整地層は総量51,650gに対し木炭33g、種子20.9g、鉄片3.2g、木片1g検出された。

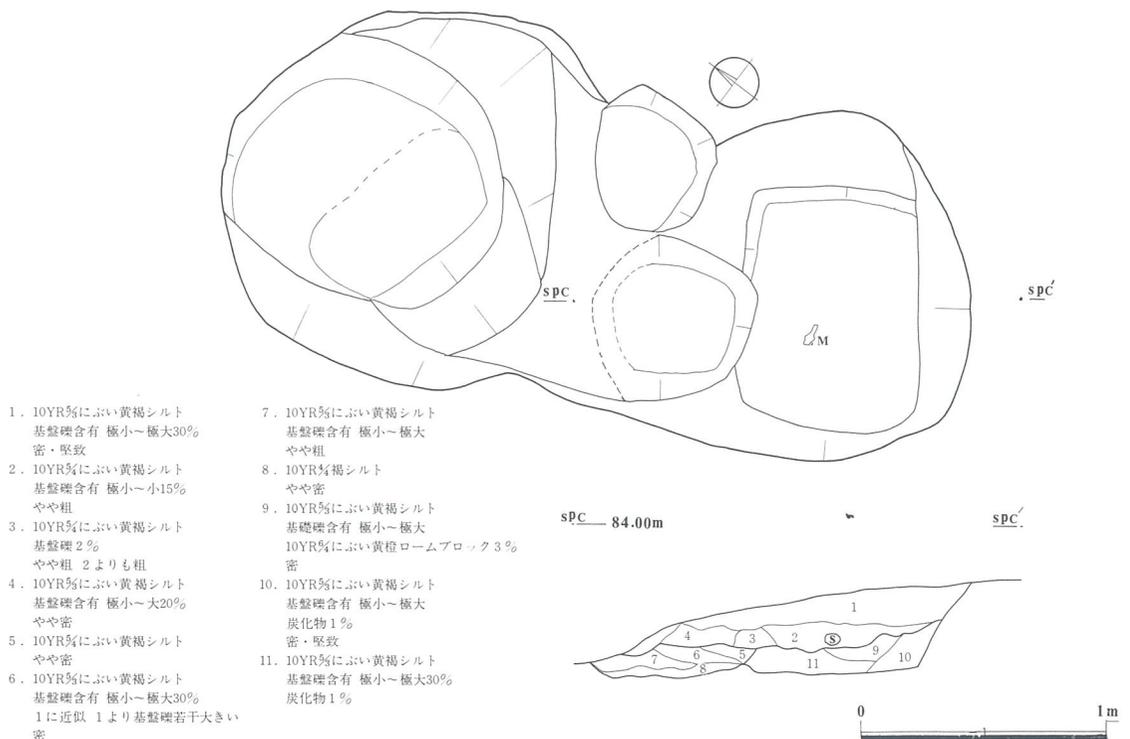
遺物の分布について（第12図）

全体に長方形の分布状況を呈しており、これが木棺の大きさとも考えられる。木棺は約100cm×80cm程である。和釘の分布状況をみると折釘は木棺の南西側長軸方向及び北西側、南東側短軸方向のそれぞれ外周部に分布する。特に南西側の52cm程の長さを有する木棺材（第17図61）では打ちつけられている折釘がすべて頭部が下になっている。つ

まり下から上へ打ちつけられている。尚その間隔は7cm程である。南西側の残りの折釘、北西側の折釘も同様に下から上へ打ちつけられている。また東側に若干分布する折釘は頭部が木棺の外側に向いており、棺内側へ向けて打ちつけられている。切釘、さっぱ釘は木棺の内部に散乱しているが、主に北西側と南東側にやや集中する傾向がある。骨は木棺内部に散乱している。歯は北西端、銅製品は南東端、陶磁器はほぼ中央部に位置する。

小結

調査の結果墓壇は110cm×90cmの隅丸方形を呈しN30°Wの方向に長軸をとる。深さはセクションによると33cm程であるが遺構確認等のため削平されており、掘りこみ当時は50～60cm程の深さがあったと考えられる。木棺は上述のとおり100cm×80cm程で墓壇底層の上に微小基盤礫を主体とした整地盛土層の上に置かれたと考えられる。木棺材の厚さは残存の木棺材等より1.5cm程である。また釘の分布より折釘は木棺の底部外周、及び横部分の外周に打ちこまれたと考えられる。さっぱ釘、切釘は棺の上部外周に打ち込まれていたものが長い年月の間に木棺が土圧によりつぶされ、木片と



第19図 土 壇

ともに内部に散乱したと考えられる。これらより釘は種類により使う部位を変えていたと考えられる。また歯は北西隅にある事より頭位は北～北西方位と考えられる。

土坑（第19図）

16 I 9区にある。空壕Aと空壕Bの中間の平坦部に位置する。土葬墓より1.5m程北西にある。規模は長軸135cm×短軸推定110cm程である。土坑中央部より和釘の出土が見られる事、下端に方形の浅い掘りこみを有し、セクション観察では底部がフラットになっている事等より墓と考えられるセクション観察によると西側に隣接するピットに切られている。覆土（図5～8）にはすべて炭化物が入り9にロームブロックが入る。尚下端の方形の掘りこみが墓塚と考えられ、その規模は100cm×70cm程である。（齊藤）

3. 空壕東平坦面の遺構と遺物

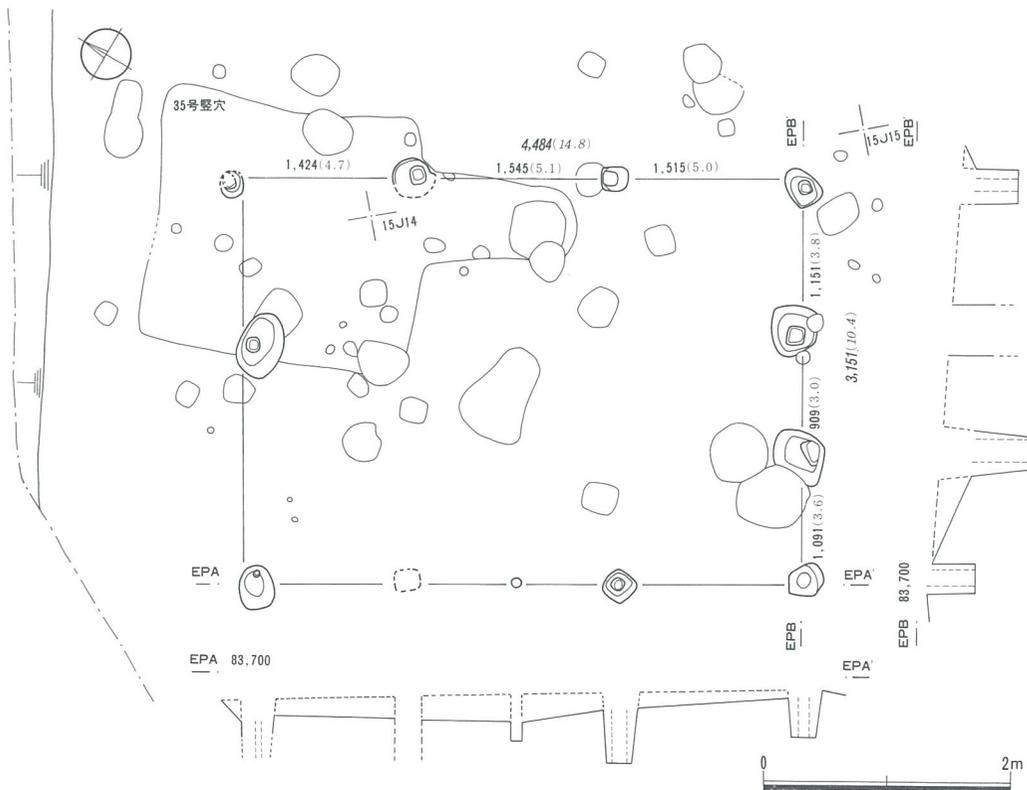
(1) 位置概要（第2図、付図）

第二平坦面と5mの段差を持つ第一平坦面は、幾分東へその長軸を寄せて広がっている。面積は約3,750㎡である。中央を遊歩道が通り左右（南北）に各2～3段の小平坦面がつくられている。この第一平坦面右（南）の最も西よりの小平坦面の二条の空壕の東側に遺構の形成が見られた。

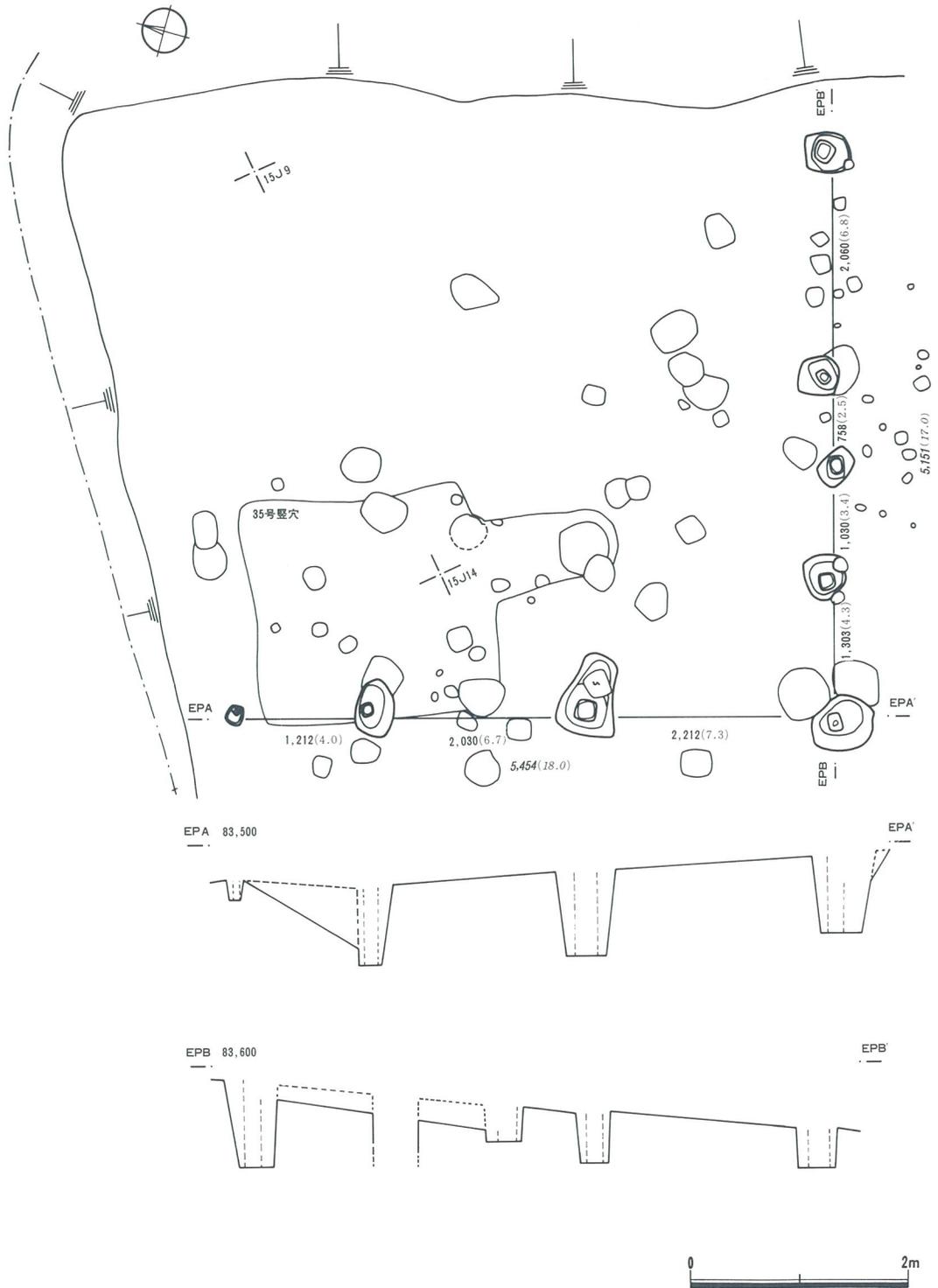
空壕Bの東およそ2～3mのところ旧地表と思われる漆黒の面がある。この上に空壕の掘り上げ土を盛土し平坦面をつくる。遺構はこの盛土整地地面につくられる。

(2) 層序（第6図、表4、5）

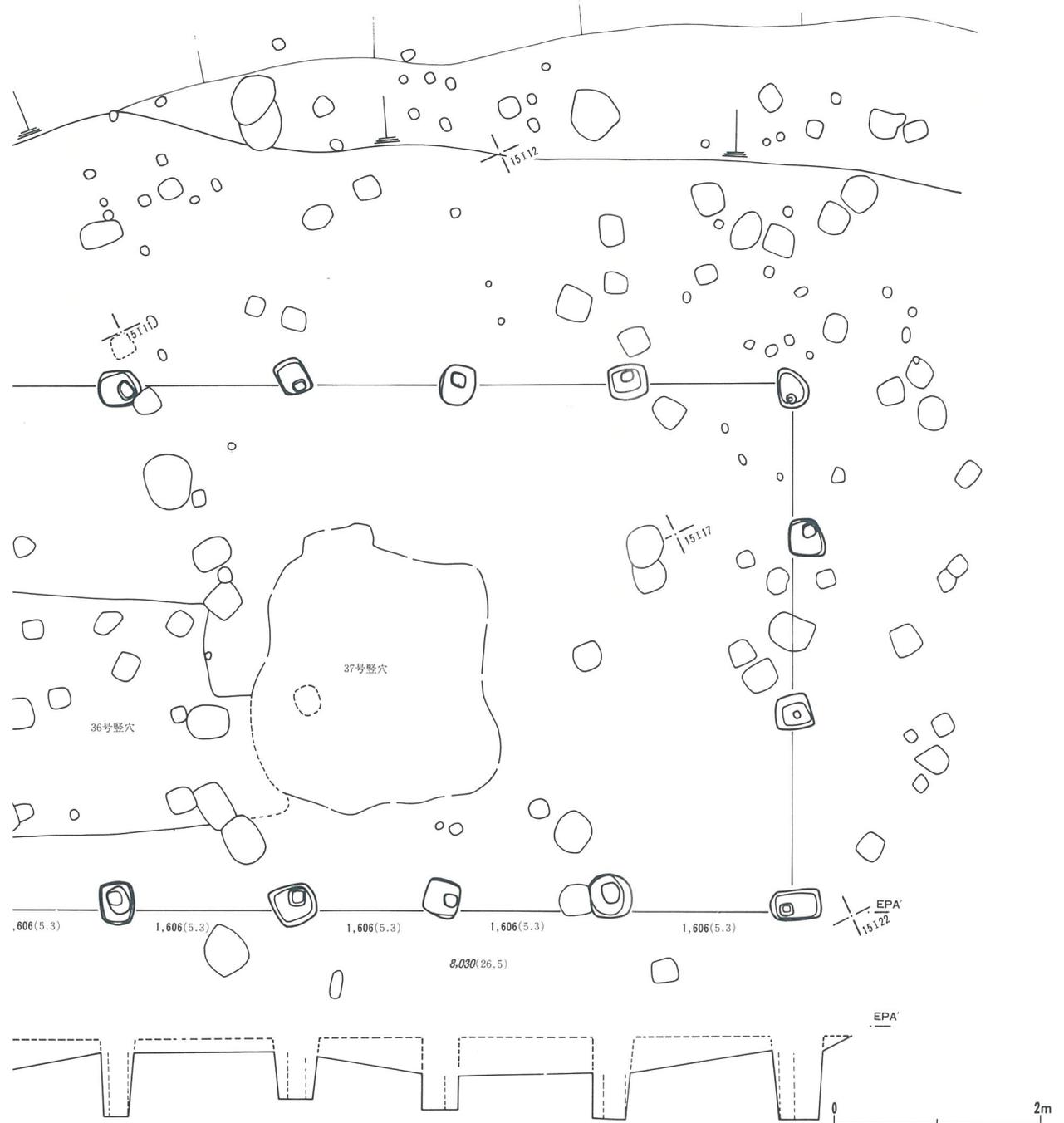
盛土整形直前の旧地表面はIV a層として肥えている（本概報IX）。このIV a層は空壕Bの東2m程からゆるやかに傾斜して、小平坦面の段直下、例



第20図 第1号建物跡想定図



第21図 第2号建物跡想定図



第22图 第3号建物跡想定图

えば15J10区中央のⅢ層下位に連なっている。又第二平坦面Ⅲ層下のⅣ層に連なる物である。従って、空壕跡東2mから第二平坦面肩までの約24mの間は人為的に削られ、さらに空壕が掘られたものと推される（付図地形エレベーション網点部）。

この掘り上げ土の整地層がこの小平坦面をつくりそこに遺構が形成されている。この整地層がⅢ層でありその上位にⅡ層、Ⅰ層が堆積する（付図地形断面斜線部）。

(3) 検出遺構

検出・想定された遺構は掘立柱建物跡と竪穴遺構である。遺構と遺物の供伴関係、焼土（後述）との相互関係等について充分検討することができなかったため、柱穴列等から想定されることを以下に概述することとした。

a. 掘立柱建物跡

第1号建物跡（第20図）：調査区南西端で検出した。35号竪穴と重複し、新しい。南及び東の柱列から3×3間の建物跡を想定したが、西及び北の柱穴対応は明瞭でない。南北約4.5、東西3.15m程である。柱間は約南北1.4～1.5m、東西90～1.15mを計る。面積14.13㎡。

第2号建物跡（第21図）：東と南に柱列が見いだされた。1号より新しい。北、西側の柱穴を検出できず、柱間も不揃いである。

1号建物跡は3～7号とした建物跡と軸線が揃わず、むしろ2号の柱列が同一方向になる。東、北部の調査が不十分な為検出できなかったと推されるが、この一画にも建物があったと推される。

第3号建物跡（第22図）：小平坦面中央北寄りに位置する。3間×5間の平坦地に沿った南北の建物。南北約8m、東西4.8m程で面積38.7㎡弱である。柱間1,605、1,606（5尺3寸）の等間となる。36、37号竪穴が中に入るが新旧関係は不明である。37号竪穴が未完掘に終り、その覆土或いは床面に柱穴が認められるようであり、調査結果によっては間取りや、新旧関係が判るかとは推される。

第4号建物跡（第23図）：小平坦面中央に位置する。3間×3間で平坦面に直行する東西棟となっている。東西5m、南北4m程、面積19.7㎡余である。柱間は東西1.7、1.7、1.6m、南北1.24～1.4mである。2×3間の南北棟とも推される。西柱列中央右の柱穴の重複関係だけ他と異なっている。

第5号建物跡（第24図）：小平坦面中央（南）

に位置する。3×3間の平坦面に併行する南北棟である。南北5.7m、東西4m、面積22.7㎡余である。柱間寸法は約127～137cm、170～200cmで定まらない。これも東西いずれかの1間を庇とする2×3間の建物とも推される。

第6号建物跡（第25図）：小平坦面南端に位置する。1間×2間の小さな建物である。2.2×3.2mで約7㎡の面積である。東西の柱間は北柱列では1.6m等間となるが、南側とは対応しない。周辺に焼土があるが南中央の大きめの焼土遺構や後述の出土遺物などから小規模な鍛冶関連遺構かと推される。

又南の台地へりに東西に検出された小柱穴列はこの小平坦面を限る柵（塀）状のものと推される。

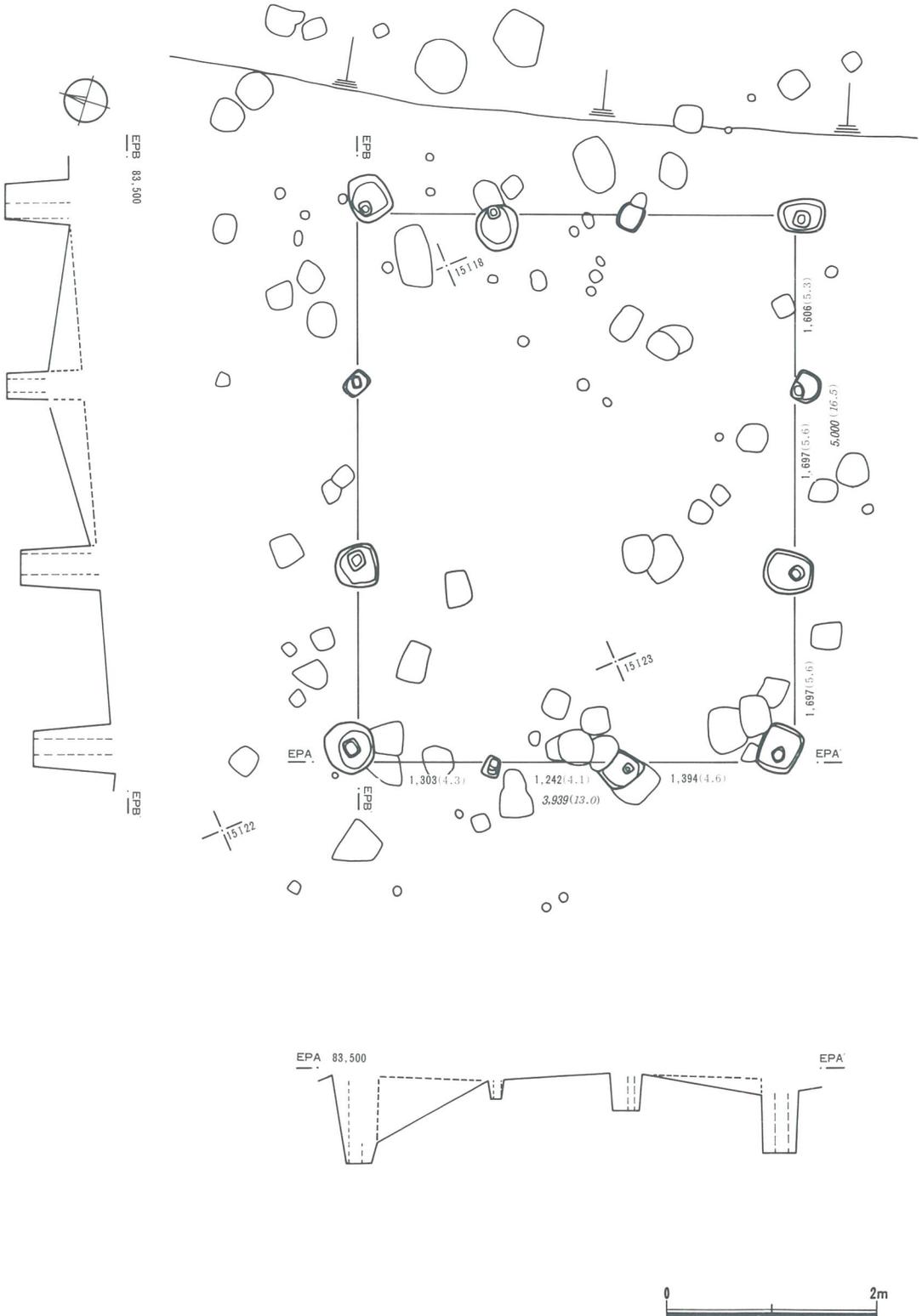
第7号建物跡（第25図）：小平坦面南端は鉤の手に西に曲がる。南西隅から南の段下を東に緩い坂が下っている。第一平坦面の最も広い区画に至るとともに南西に下り宮ノ沢を経て侍屋敷に至る道との分岐点に続いている。小平坦面の南を通過して東へ至る道路跡であろう。その造成は小平坦面同様、空壕掘り上げ土の整地によっている（土層堆積図省略）。

第7号建物跡としたのはこの坂のおりがけで検出した柱穴から木戸等として想定したものである。その位置としてはより西側の傾斜する坂（道）の出発点がより適しているかと推される。巾2m弱である。

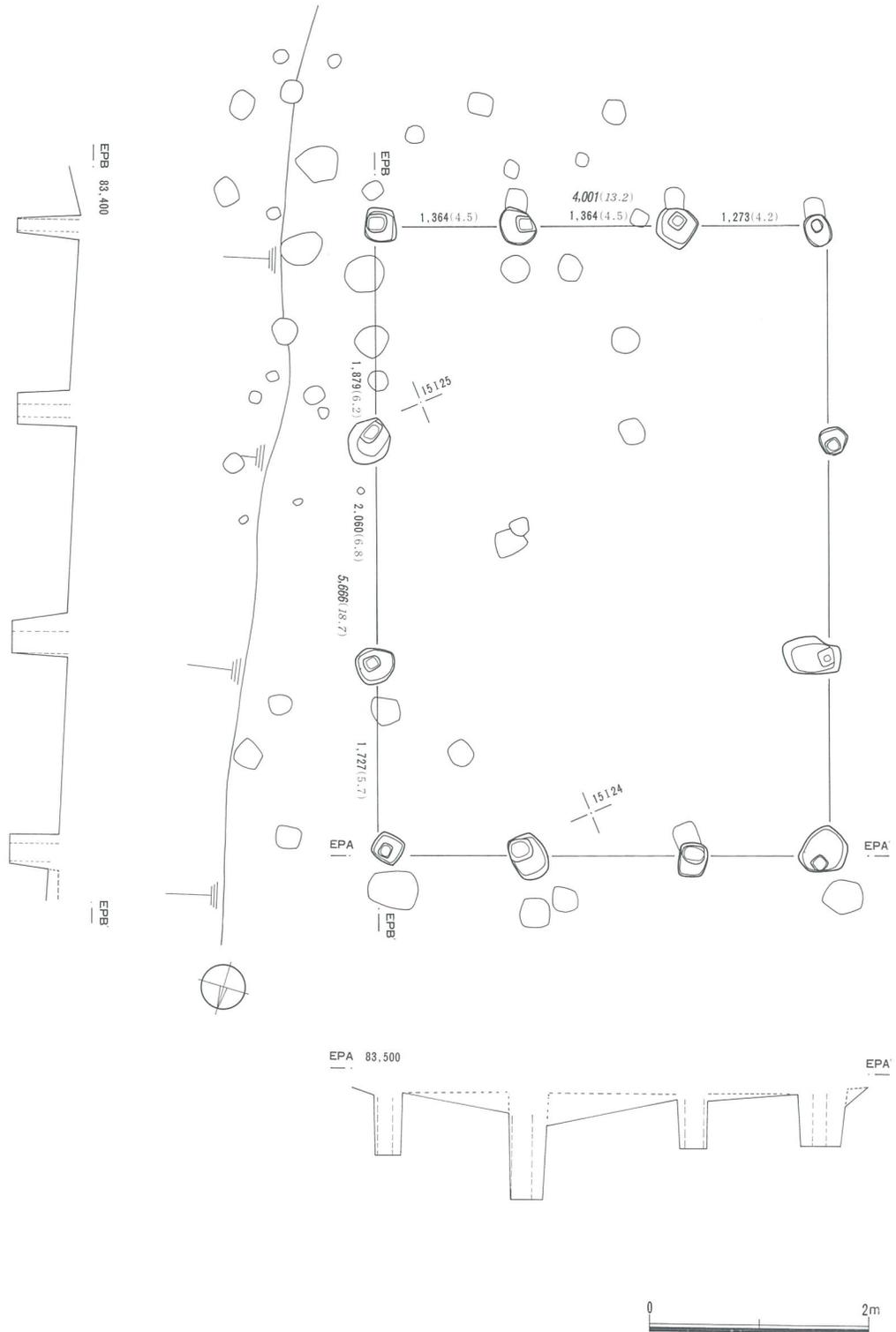
b. 竪穴遺構

小平坦面の北半で3基の竪穴が検出された。内36号竪穴は、62年度調査のトレンチ東端で一部検出されていたものである。又、37号竪穴は焼失家屋であったが実測図の作成途中のまま調査を中断、完掘にいたってない。又個々の竪穴覆土出土の遺物についても充分な検討ができず、共伴関係は明確でない。

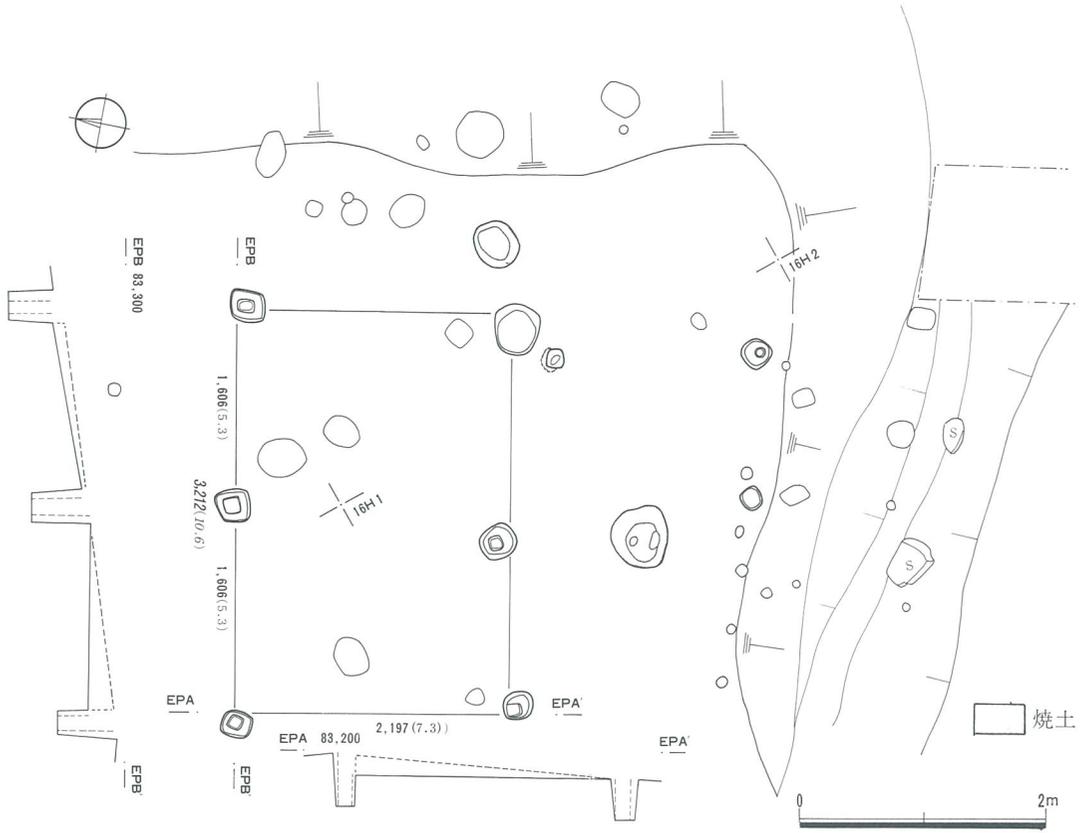
35号竪穴遺構（第26図）：小平坦面北端で検出された。一辺が2m程の方形で南側東半に1m弱の緩やかな傾斜を持つ張り出しがつく。北側の壁高76cm。Ⅲ層整地層を掘り込み面とする。覆土の堆積は、壁際に一次堆積が若干見られるが、基盤礫、粒を含むⅢ' A層が厚く1号建物跡の柱穴が覆土を掘り込んでいる事などから人為的に埋め戻されていると解される。尚、底面直上に黒色の灰混じりの層が薄く堆積していた。



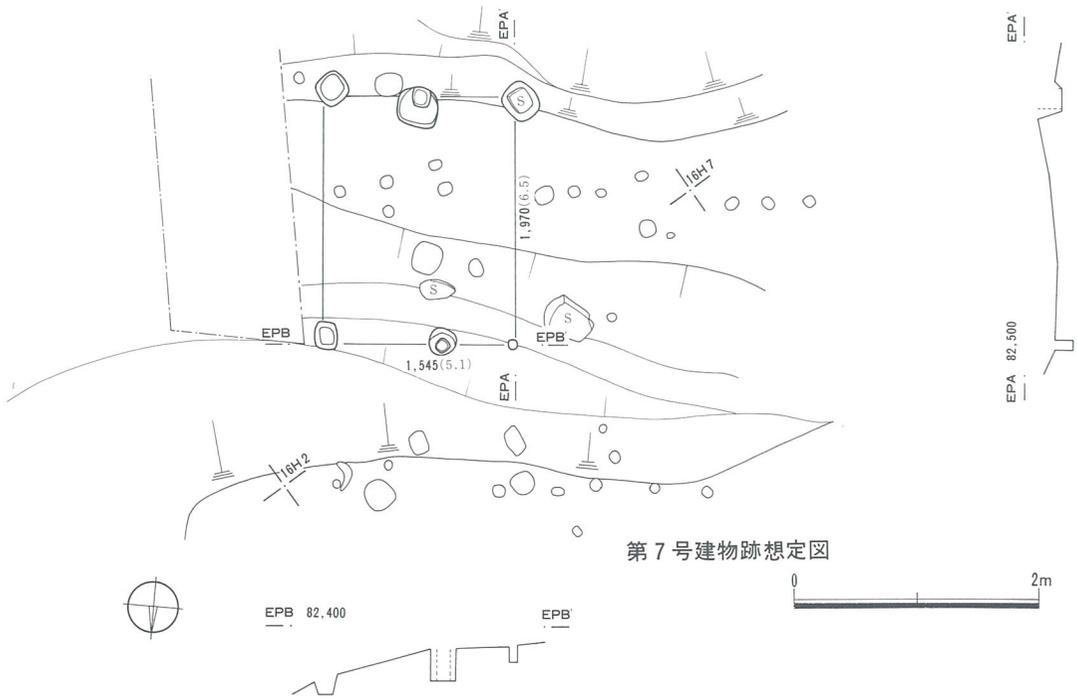
第23図 第4号建物跡想定図



第24图 第5号建物跡想定図



第6号建物跡想定図

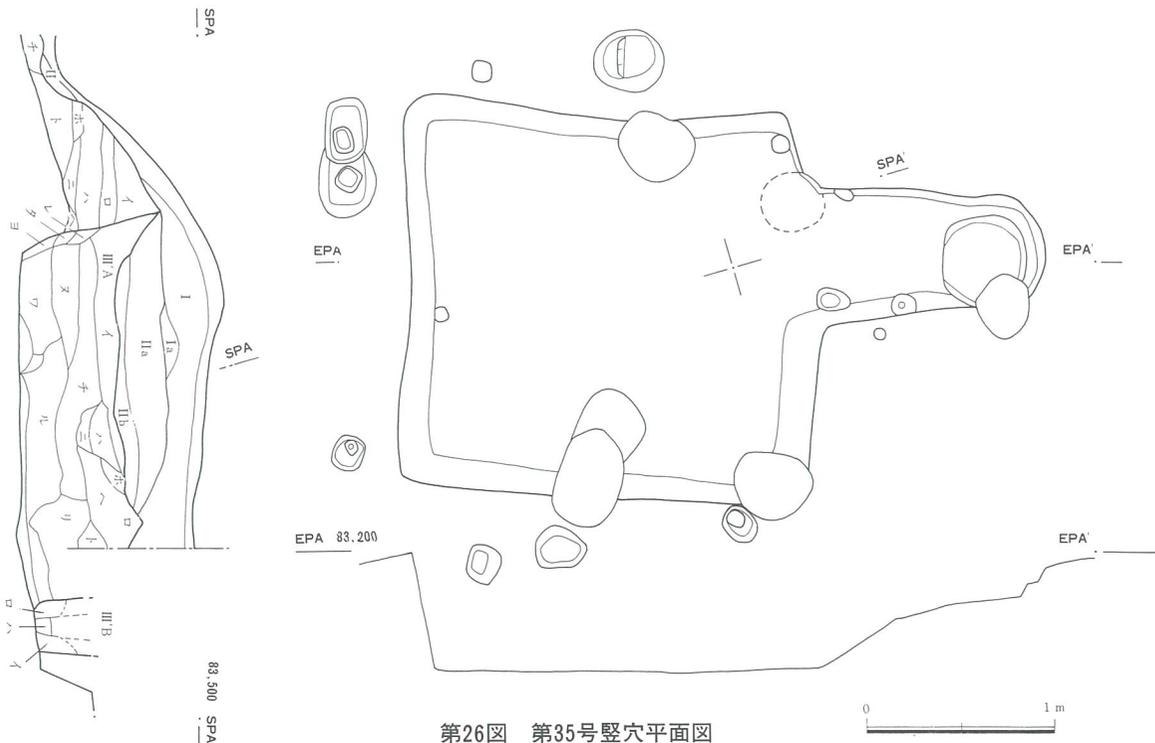


第7号建物跡想定図

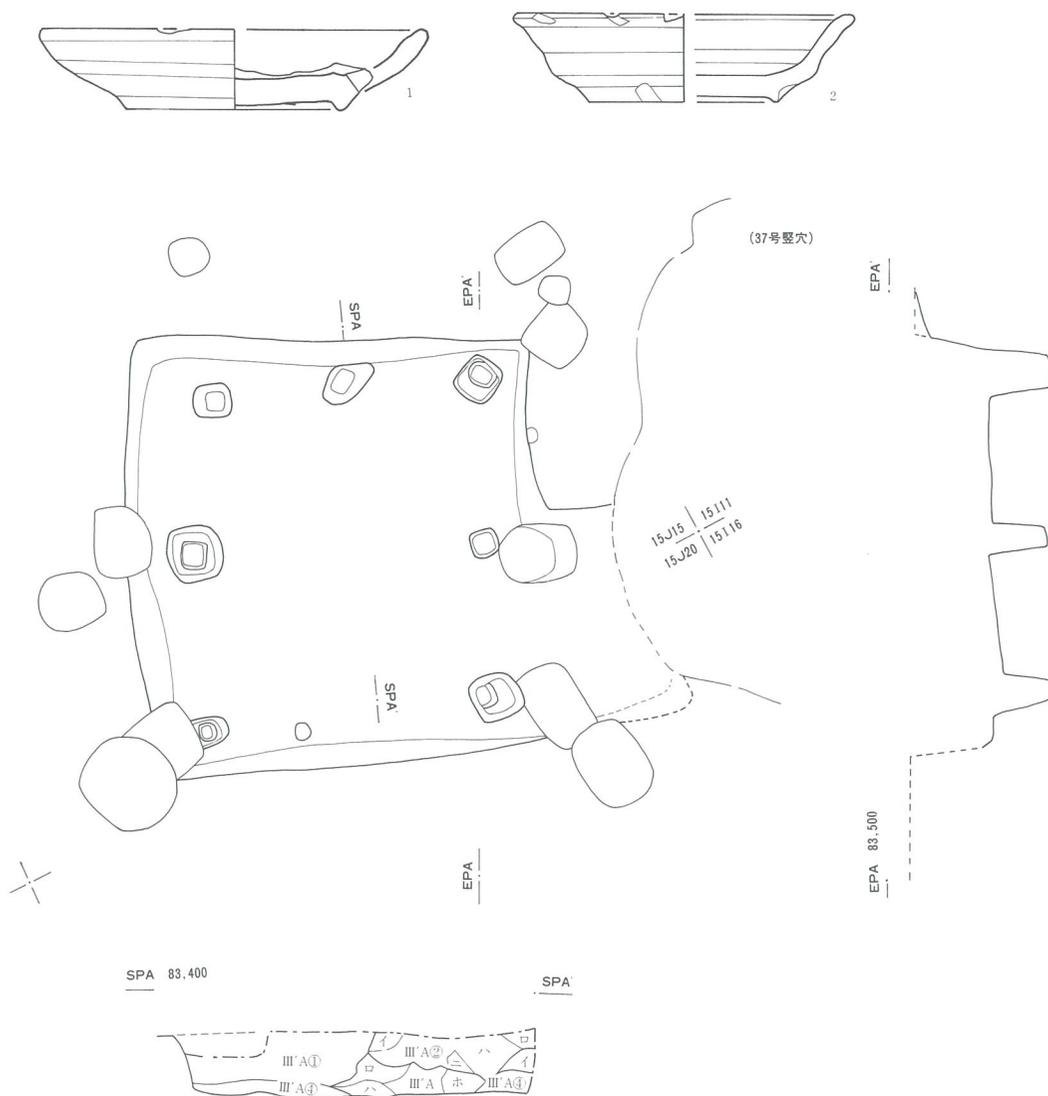
第25图 第6・第7号建物跡想定図

表6 第35号竖穴覆土土層観察表

層序			色調		組成	備考
基本層序	小区分	細別	JIS notation	土色名		
I		a				現表土
		b				
		c	7.5Y R $\frac{1}{2}$	褐	5cm大礫混入5%	かたい
II		a	10Y R $\frac{1}{2}$	暗褐	炭化物混入 1%	ソフト
		b	7.5Y R $\frac{1}{2}$	暗褐	"	" ①よりやや明るく軟い
		c	10Y R $\frac{1}{2}$	褐	基盤礫混入 シルト	
III		a	7.5Y R $\frac{1}{2}$	褐	0.5~10cm大基盤礫含有砂質	イより密
		b	10Y R $\frac{1}{2}$	褐	炭化物含有 シルト	
		c	2.5Y R $\frac{1}{2}$	赤褐	8cm大基盤礫含有砂質	
		d	7.5Y R $\frac{1}{2}$	暗褐	炭化物含有 粘性有	
		e	10Y R $\frac{1}{2}$	にぶい黄褐	2cm大基盤礫混りロームブロック混入	
		f	10Y R $\frac{1}{2}$	褐	炭化物焼土粒含有 シルト	
		g	10Y R $\frac{1}{2}$	黒	炭化物混入 シルト	
		h	10Y R $\frac{1}{2}$	褐	基盤礫粒層	
III'A		イ	7.5Y R $\frac{1}{2}$	にぶい黄褐	基盤礫粒、炭化物混入	竖穴覆土(以下同)
		ロ	7.5Y R $\frac{1}{2}$	暗褐	焼土粒混入20%	
		ハ	10Y R $\frac{1}{2}$	にぶい黄褐	火山灰基盤礫混入	ソフト
		ニ	10Y R $\frac{1}{2}$	"	炭化物混入シルト	
		ホ	7.5Y R $\frac{1}{2}$	褐	ロームブロック基盤礫混入	
		ヘ	10Y R $\frac{1}{2}$	にぶい黄橙	2cm大基盤礫混入炭化物微量	ソフト
		ト	10Y R $\frac{1}{2}$	褐	炭化物基盤粒含有	かたい
		チ	10Y R $\frac{1}{2}$	にぶい黄橙	基盤礫 炭化物ローム粒混入	
		リ	10Y R $\frac{1}{2}$	"	2~5cm大基盤礫、炭化物混入	かたい
		ヌ	10Y R $\frac{1}{2}$	"	基盤粒ローム粒 炭化物混入	密 かたい
		ル	7.5Y R $\frac{1}{2}$	"	1~3cm大基盤礫、炭化物含有	密
		ヲ	10Y R $\frac{1}{2}$	"	2cm大礫炭化物含有	粗 ソフト
		ワ	7.5Y R $\frac{1}{2}$	"	ローム粒、炭化物混入、粘土層	密 かたい
カ	10Y R $\frac{1}{2}$	"	5mm以下礫、炭化物混入 シルト	ヲより暗い		
ヨ	7.5Y R $\frac{1}{2}$	褐	シルト	ソフト		
タ	10Y R $\frac{1}{2}$	黒褐	"	"		
レ	10Y R $\frac{1}{2}$	にぶい黄橙	5mm大礫、炭化物混入 シルト	ソフト		
III'B		あい	7.5Y R $\frac{1}{2}$	暗褐	基盤粒炭化物含有	柱穴覆土
		い	7.5Y R $\frac{1}{2}$	褐	"	かたくしまる(堅緻)
		う	7.5Y R $\frac{1}{2}$	暗褐	"	



第26図 第35号竖穴平面図



第27図 第36号竖穴平面図・出土遺物

表7 36号竖穴覆土土層観察表

基本層序	小区分	細別	色		組成	備考
			JIS notation	土色名		
III'A	①	イ	10Y R $\frac{1}{2}$	褐	3cm以下基盤礫、同粒層	粗 かない再堆積盛(埋)土層
		イ	10Y R $\frac{1}{2}$	"		
	②	ロ	7.5Y R $\frac{1}{2}$	にぶい黄褐	炭化物含有 シルト	①イよりやや暗く軟い 軟い
		ハ	7.5Y R $\frac{1}{2}$	暗褐	基盤礫炭化物含有 湿粘性ありシルト	
		ニ	7.5Y R $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{4}$	明褐	基盤礫粒含有50%	
		イ	7.5Y R $\frac{1}{2}$	褐	基盤ローム粒、炭化物含有湿、粘性、シルト	
	③	ロ	7.5Y R $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{4}$	" 灰褐	火山灰混入層 湿性 ペースト状	ソフト ソフト
		ハ	7.5Y R $\frac{1}{2}$	褐	基盤礫 火山灰含有	
		ニ	7.5Y R $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{4}$	"	基盤礫粒 火山灰炭化物含有 シルト	
		ホ	7.5Y R $\frac{1}{2}$	"	5cm大基盤礫火山灰含有	
	④	イ	7.5Y R $\frac{1}{2}$	"	2cm以下基盤礫 粒含有	
		ロ	7.5Y R $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{4}$	"	基盤礫粒 炭化物含有 粘、湿性 シルト	

底面での柱穴、周溝等の検出はできなかった。張り出し部側方の小柱穴は本遺構に伴うかと推する。又遺構の周囲で柱穴が検出されたが堅穴との関係は明らかでない。底面はローム層であるが、それ程堅められてはいない。

覆土中から出土した遺物はない。底面直上の炭化物混入層中から漆器皮膜、鍛造剥片、魚骨が採集された（P L. 20）。

36号堅穴遺構（第27図）：小平坦面北半で検出された。2.3×2.1m程の方形で南西部に張り出しがつくと推される。壁高は62年度調査層序から50～65cm程である。掘り込み面はⅢ層整地層である。覆土は西半にやや軟かみの粒子の細い層が堆積し、東半は礫混じりの堅い層となる（Ⅲ' A ①）。後者は再堆積の埋め土と思われる。底面に炭化物等を含む薄い層が堆積する。

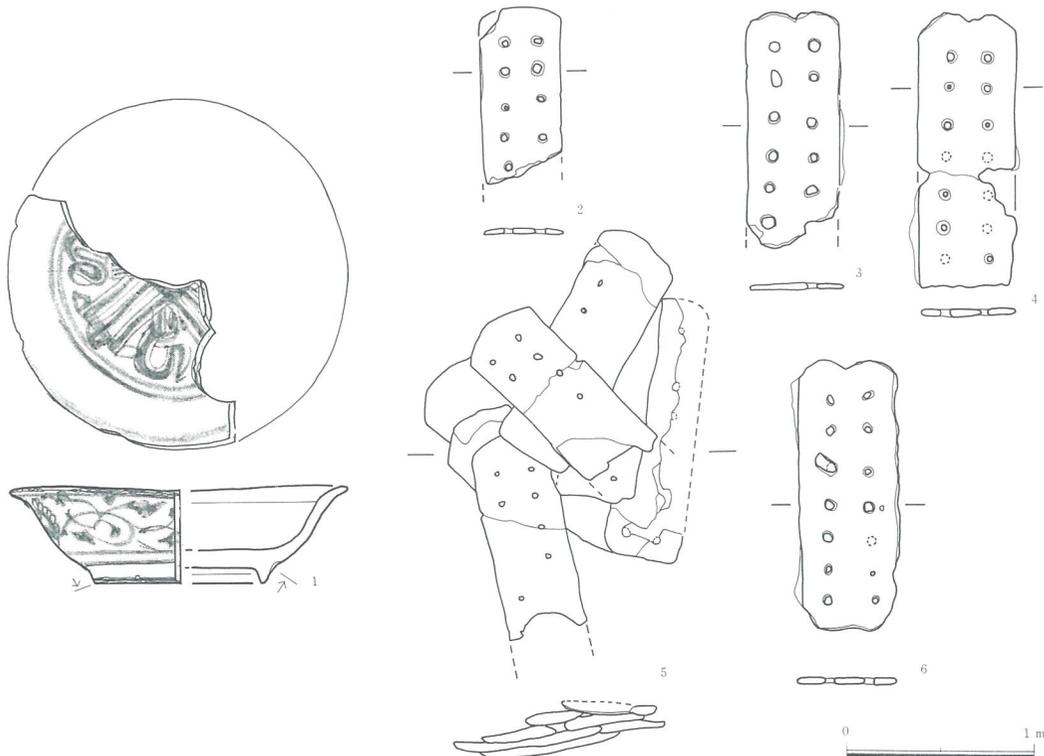
柱穴が7個検出されている。南張出部で37号堅穴と重複している。37号が未完掘であるが、37号の方が新しいかと推される。又3号建物跡との新旧関係も明らかでないが一応本堅穴が古いかと推している。底面は西半は基盤ローム層であるが東半はⅢ層盛土整地層であり、整えられた形跡はな

い。

覆土等から陶磁器等が出土した（P L. 18, 20）。11、12は堅穴西半の底面直上から出土した瀬戸・美濃灰釉碗で11には剣先蓮弁が描かれる。同一個体と推される。14（27図2）は東半の底面より下位及び遺構南のほぼ同一レベルより出土した瀬戸・美濃のやや小ぶりの端反りする丈高の皿である。8、9、13は堅穴覆土上半部からの出土であり、9は37号堅穴上部の他、周辺調査区のⅠ、Ⅱ層中からも出土する。又底面直上層より粒状滓、骨他を抽出した。

14は本堅穴の掘り込まれる以前のⅢ層整地層中の遺物であり、11、12は、堅穴の使用時期或いは廃棄直後の近い時期にあたり、その他は埋没、整地後の遺物かと推される。11は大窯Ⅰ期であり、14もほぼ同時期と思われる。13の内はがしの丸皿は大窯のⅡ期以降の所産であろう。従って本堅穴は大窯Ⅰ期の遺物が使用されていた時期頃との推測が可能と思われる。

37号堅穴（附図、P L. 11）：小平坦面北半中央寄りで検出された。未完掘の為形状等是不詳。35、36号等と同様の方角を呈する。北東に張り出



第28図 第37号堅穴出土遺物

しがある。焼失埋没しており諸部材が残存する。又その上から柱穴が穿たれており、又下位にも柱穴の検出される可能性は高い。

部分的な観察であるが心材を面取りした主柱痕が8個、張出し部にも一部一回り細い柱痕が炭化して残る。主柱痕の外側に板材が横長に立って残りその外側に束状に禾本科植物がある。結縛はまだ明らかでない。内部の炭化材の下位、竪穴底面に近接して南北に細い材がわたされている。

計測、取り上げの途中でありやや不確実であるが、鈴木亘先生のご教示によれば、柱外側の横板は壁であり禾本科植物は屋根又は壁（の補助）材であり南北に根太をわたした床張りの建物の可能性が高いとの事である。

炭化材の直上等で遺物が検出された（第28図、P L、18）。20点余りの小札、釘、鉄滓、粒状滓、陶磁器及び獣魚骨である。陶磁器は青磁稜花皿、染付羯磨皿、内湾気味の丸皿で外面に折枝を内面口縁に四方襷文を描くもの、瀬戸・美濃端反り皿である。小札は大小その他各種ある。他に握り拳大の碗形滓、内部の空洞化した溶解物等がある。

本小平坦面の遺物については後述するところであるがその位置関係等の分析は十分でなく、竪穴の性格等を探るにはまだ無理があるが各竪穴各々で（獣）魚骨が採集され、35、37号から鍛造剥片、36、37号から粒状滓^註が抽出されるなど共通・関連性が窺われるところとなっている。（松崎）

註）この資料についての成分分析などが国立歴史民俗博物館で現在すすめられている。

c 焼土（第29図～第31図）

16基確認された。調査はいずれも半載しセクション図作成後覆土をサンプリングしフローテーションを行なった。（表8）。

焼土1（第29図S P A～S P A'）：15 J 9区にある。約37cm×30cm程の不整形をなす。残存状態が極めて悪い。覆土中には魚骨、炭化物等が微量含まれる。

焼土2（第29図S P B～S P B'）：15 J 9区にある。約25cm×21cmの不整形をなす。残存状態が極めて悪い。覆土中には魚骨、炭化物等が微量に含まれる。

焼土3（第29図S P C～S P C'）：15 J 9区にある。約60cm×21cmの不整形をなす。残存状態が極めて悪い。覆土中には魚骨、木炭、種子等が微

量含まれる。

焼土4（第30図S P D～S P D'）：15 J 9区にある。約160cm×94cmの不整形をなす。覆土中には魚骨、獣骨、木炭、種子が多量に含まれる。その他鉄製品の細片、漆器皮膜等も微量に含まれる。堆積状況より焼成面が明確でない事等より流れこみによるものと考えられる。

焼土5（第29図S P E～S P E'）：15 J 9区にある。約20cm×16cm程の不整形をなす。残存状態が悪く下部より残っていない。覆土中には魚骨、木炭が微量含まれる。

焼土6（第29図S P F～S P F'）：15 J 9区にある。約41cm×26cmの不整形をなす。残存状態が極めて悪い。覆土中には木炭、獣骨、種子が微量に含まれる。

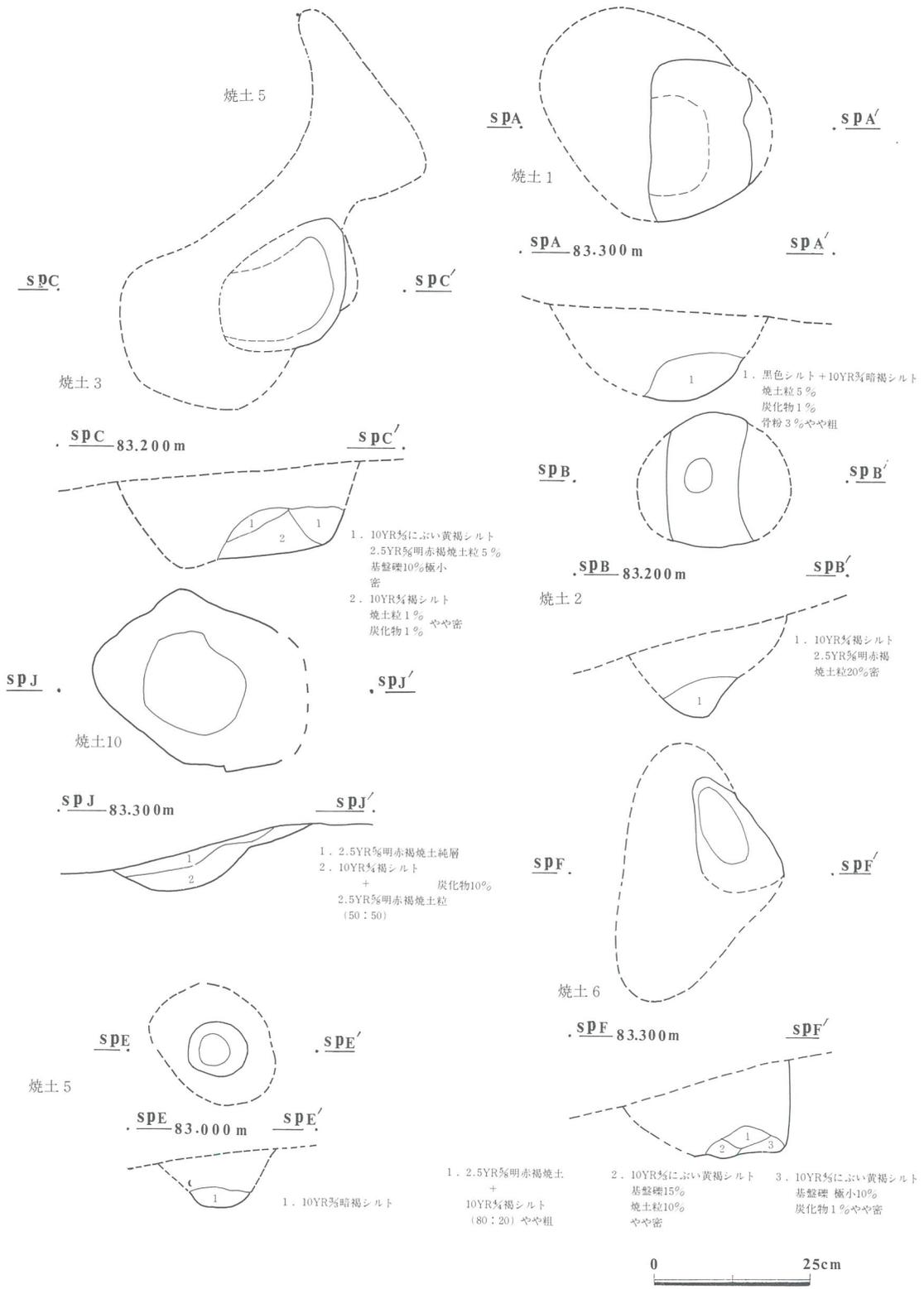
焼土7（第31図S P G～S P G'）：15 J 9区にある。約200cm×56cmの不整形をなす。覆土中には獣骨、魚骨、木炭等が多量に含まれる。その他鍛造剥片微量、海獣骨製骨角器、フレーク、土器片等が含まれる。堆積状況より流れこみと考えられる。

焼土8（第31図S P H～S P H'）：15 J 14区にある。約40cm×33cmの不整形をなす。覆土中には獣骨、魚骨、木炭が含まれる。堆積状況は図上1に焼成面と考えられる焼土純層があるが周囲の2、3、5には焼土粒、炭化物等が全く含まれない。流れこみによるものか、地床炉か不明である。尚当焼土内の礫は加熱されていない。

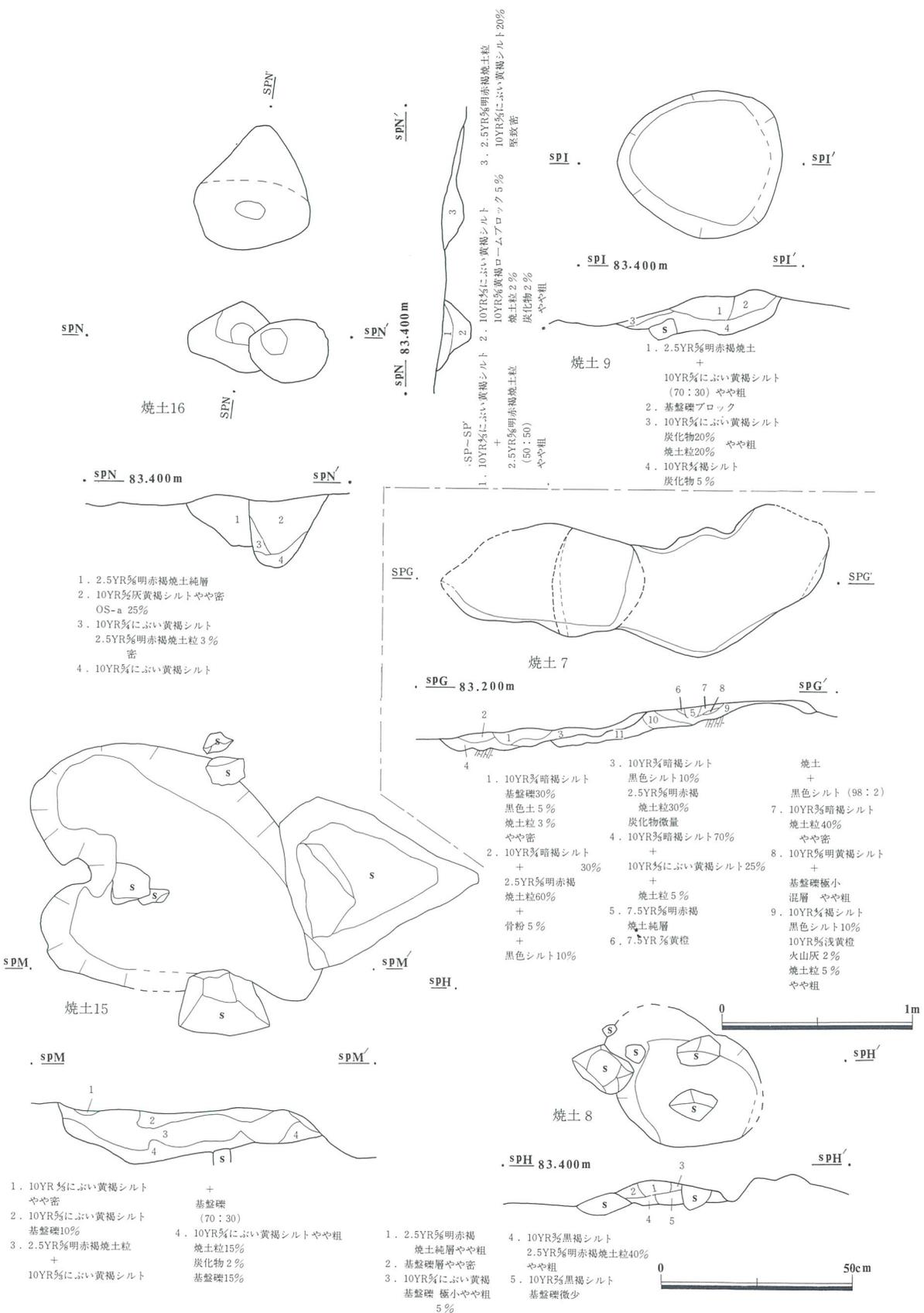
焼土9（第31図S P I～S P I'）：15 J 4区にある。約43cm×38cmの不整形をなす。覆土中には獣骨、炭化物が含まれる。堆積状況より焼成面は1と考えられる。従って当焼土は地床炉と考えられる。

焼土10（第29図S P J～S P J'）：15 J 15区にある。約34cm×25cmの不整形をなす。覆土中には獣骨、炭化物が含まれる。堆積状況より焼成面は1と考えられる。従って当焼土は地床炉と考えられる。

焼土11（第30図S P K～S P K'、S P L～L'）：15 I 11区にある。約61cm×59cmの不整形をなす。覆土中には獣骨、魚骨、炭化物、木炭、鉄片、鍛造剥片等が含まれる。堆積状況より焼土純層の1、3、5が焼成面である事より当焼土は地床炉と考えられる。



第29図 焼土 ①



第31図 焼土 ③

焼土112 (第30図SPK~SPK') : 15I11区にある。約22cm×17cmの不整形を呈する。覆土中には魚骨、木炭、炭化物、鉄片等が含まれる。堆積状況より8が焼土純層であり焼成面と考えられる。従って当焼土は地床炉と考えられる。

焼土113 (第30図SPK~K') : 15I16区にある。約20cm×24cmの不整形をなす。焼土12と隣接して入る。覆土中には魚骨、木炭、鉄製釣針が含まれる。覆土は焼土純層のみであり焼成面が極めてしっかりしている。従って当焼土は地床炉と考えられる。

焼土114 (第30図SPL~SPL') : 15I16区にある。約25cm×17cmの不整形をなす。覆土中には魚骨、木炭、炭化物、種子が含まれる。覆土はシルト土壌と焼土粒の混合土であるが焼土粒が90%と多く焼成面と考えられる。従って当焼土は地床炉と考えられる。

焼土115 (第31図SPM~SPM') : 15I17区にある。約87cm×60cmの不整形をなす。覆土中には獸骨、魚骨、木炭、種子、鉄片、銭細片が含まれ

る。セクションが中央部を横断していないので土層堆積状況は明瞭ではないが、図でみる限りでは焼成面は判然としなく、流れこみによる堆積と考えられる。尚当焼土周囲の礫は加熱されていない。

焼土116 (第31図SPN~SPN') : 15I24区にある。柱穴との重複関係となっており当焼土が古い。覆土中には魚骨、木炭片が含まれる。覆土は焼土純層のみである。従って当焼土は地床炉と考えられる。

傾向 地域的には15J9、14区と15I11、16区の2つのブロックに集中する。覆土堆積状況では15J9、14区の焼土は流れこみ、不明のいずれかに対し15I11、16区は地床炉が多い。覆土中含有物、含有率は15I11、16区地床炉では獸骨、魚骨、木炭が多く種子は微量、鍛造剥片、鉄滓は皆無である。また流れこみの焼土には骨角器、銭、釘等が含まれていた。これらより地床炉の用途は建物に付属する煮炊用、暖房用としての用途が考えられる。(齊藤)

表8 焼土成分表

焼土NO	グリット	サンプル総量(g)	成								分(g)	
			炭化物	木炭	種子	骨	貝	鉄	鍛造剥片	鉄滓	備考	
1	15J9	4455	1.0		0.9	1.3						
2	15J9	2340	1.8			1.1						
3	15J9	3169		1.0	0.9	1.1						
4	15J9	200635		84.0	59.2	257.0	1.0	16.5		1.9	釘、漆器皮膜1.0、縄文土器片112.3、フレーク4.5	
5	15J9	793.7		1.9		1.0						
6	15J9	1875	0.1	3.0	1.8							
7	15J9	22230	12.5	13.4		10.1			1.1		骨角器2.1、縄文土器片19.9、フレーク1.25	
8	15J14	2360		5.0		2.0						
9	15J14	3540	4.8	11.2	4.6							
10	15J15	1820	1.3			1.4						
11	15I11	13960	1.7	7.6		9.8		1.9			鍛造剥片1.2、フレーク3.4	
12	15I11	2625	1.2	1.1		2.5		1.0				
13	15I16	4690		4.0		3.0		1.9			釣針1.9、縄文土器片46.2、フレーク0.9	
14	15I11	9525	3.1	4.7	0.9	9.8						
15	15I17	23960		5.7	1.8	3.7		0.9			銭1.0	
16	15I24	2320		1.2		1.4						

(4) 出土遺物 (第32図～34図)

空壕東側小平坦面から陶磁器、鉄、銅製品、石製品他が出土した。

a 陶磁器 (P L. 17、19-19、21、25、26、14-17)

青磁、白磁、染付、瀬戸・美濃、志野、唐津、越前、珠洲等が出土している。竪穴覆土も合せ234点が出土しているがうち170点程は北半に集中している。碗、皿類は北半に2.5～3.8倍集中するのに対し、播鉢は南半に3倍集中し、南半における播鉢の構成比が高くなっている(表9)。

青磁：線描き蓮弁碗、稜花皿が出土する。4、12は内面に押印のある碗である。他に底部周辺が丸く磨り減り円盤状になったものがある(32図12)。当遺跡では3例目程である。

白磁：皿と小坏がある。19はやや青味ががっ釉が厚めにかけている。(3)。

染付：蓮子碗、口縁内外に圈線の廻る碗、羯磨皿、碁笥底の皿などがある。6の獅子皿や28の端反り皿は当遺跡では新しい段階のものである。

瀬戸・美濃：碗と皿が出土する。46は剣先蓮弁の碗、47は内はがしの丸皿である。49は口縁内外に黒く煤が付着し、口端が再加熱で白色化している。灯明皿としての仕様であろう。

54～58は鉄釉の碗である。当地区から僅か5片しか出土していないのは極だった特色である。

59は志野、60～62は唐津である。61は鉄絵が描かれる。志野・唐津ともに皿である。

他に越前、珠洲形の播鉢、甕等が出土する。

b 金属製品 (P L. 18、19)

鉄製品：この小平坦面で3,243gが出土した。又、鉄滓が3,014.2gが出土している。大まかな傾向をみると1号及び2号建物跡(35号竪穴)周辺にそれぞれ、316.8、98.7g、37号竪穴周辺に1,398.2、562.6g、6号建物跡周辺に572.2gの量が集中して出土している。尚鉄の製品別等の量比較は未集計である。

P L. 18-15～21は鉄鍋類の破片である。15は口縁下4.5cm程のところに段が着くもので口唇は内側に三角形に肥厚する。17は吊耳の部分、20は口縁部破片である。内側に肥厚する。18、19、21、は底部破片。19は大きく外開きする大型のものとして推される。21は5cm程の脚が着く。16は高さ8cm程の浅い容器のようである。22、23は刀子、24も同

類であろう。27は鏃の茎かと推する。28は釣針である。軸の3分の1くらいまで、さきをまげ、軸とほぼ平行させる。軸は上3分の2は扁平で上3分の1程は内側へまげられる。かえしの部分は欠失して不明。あぐはない。34は鉤。垂直な軸に広くふところを作って斜めにまげる。先端は欠失してふめい。軸部断面は扁平につくられる。38も鉤かと推する。但し34とは軸部の形状が逆向きに扁平につくられ、更に34のような明瞭な四角形を示さないなどの違いがあり、別機能を有するものであろう。30はクサビ状のもの、31、32、35は釘、29は火箸である。

銅製品：武具他が出土している(P L. 19)。28は甲冑、梅壇板か胸板の一部かと推するものである。33、29は飾金具、34は止め金具、37、38は縁金具である。40は薄い銅版を折り曲げたもので一端に穴があり、二つに折りまげ2枚を一緒に綴じた様である。44は薄手円形のもので、微隆起線を1条廻らし内外を区分する。内側には花卉状のもの(藤?)が浮き出さされている。仏具類の盤等の一部かとも推される。43は鉢形の容器である。地に鉄を用い銅で包んでいるようである。

C その他

49は陶錘である。P L. 18-74～76は羽口である。74は土製、75、76は石製である。いずれも第6号建物跡周辺から出土している。75、76の先端は火熱を受けた部分が斜めに変色し、76ではその反対側に抉りがつくられ、使用の状態が伺われる。37～43は鉄滓である。

尚6号建物跡南の焼土27からは鉄滓49g、鍛造剥片6.3g、径1～4mm程の粒状の鉄分2.4g等が抽出された。

その他の出土遺物に銅銭がある。15J 9で11点、4号建物跡周辺に48点が集中していた。

又P L. 20-2は焼土7出土の骨角器である。鯨又は海獣骨を用いた中柄と思われ、火熱を受けている。

陶磁器の示す年代は、白磁抉り入り高台の丸皿、瀬戸・美濃蓮弁文碗、珠洲系甕等15世紀後半以降染付獅子皿(P L. 17-42)瀬戸・美濃うちはがし丸皿、志野唐津等16世紀末葉までの勝山館跡の存続期間全般にわたっている。器種の構成は碗皿に播鉢、少量の甕類からなり、日常生活用具類に限られるようである。中でも鉄釉の所謂天目茶碗

が殆んど見られないのは際だった特色とすることが出来る。香炉、茶器等も見られない。

他方、鉄・銅製品の出土が多く見られ、銅製品では飾金具等が多く、鉄製品では37号竪穴を中心に、小札の出土量が多い。

又27号焼土や6号建物跡周辺、37号竪穴等々で羽口、鉄滓、鍛造剥片等が顕著に見られた。

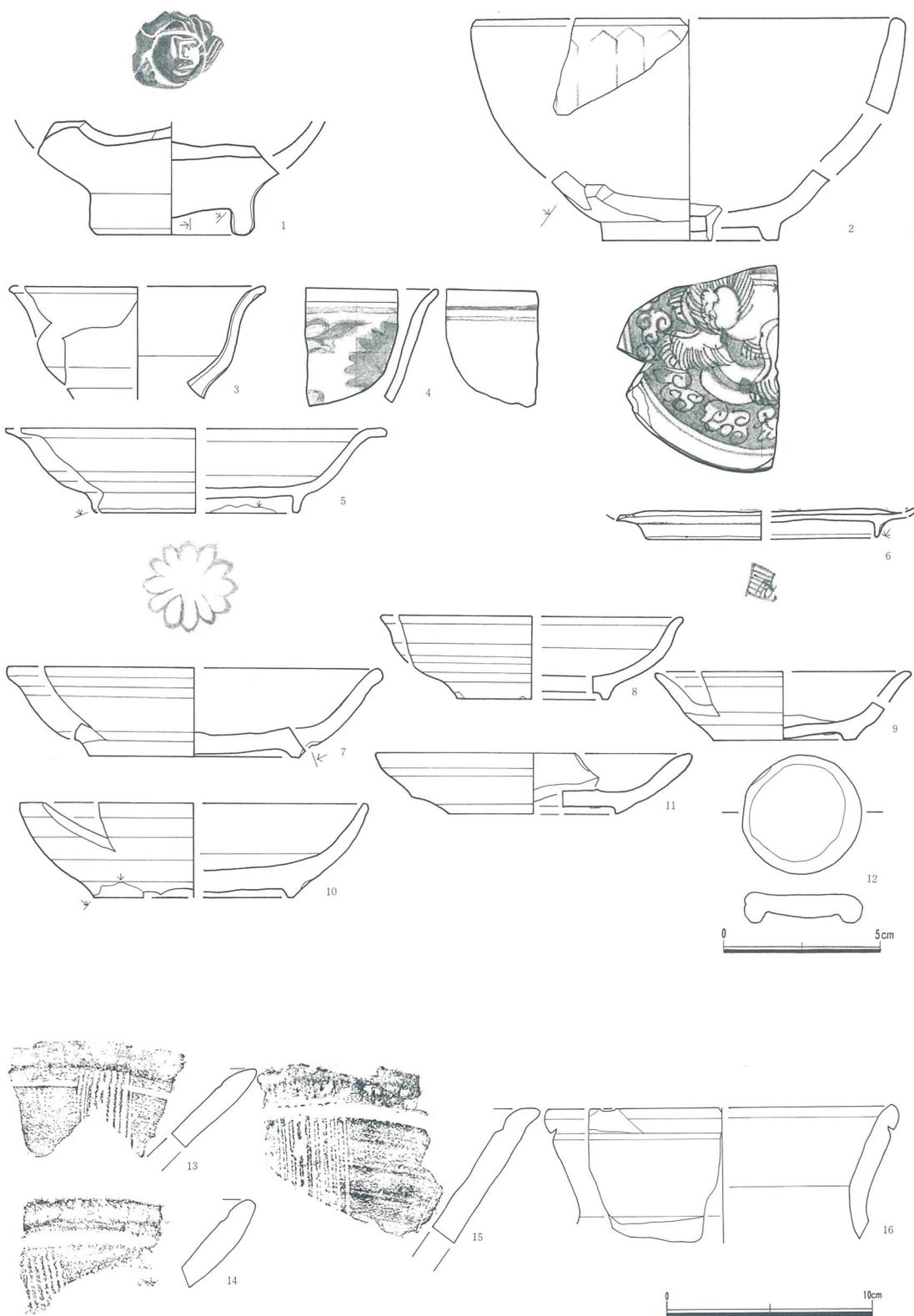
既述のとおりこれら各種遺物について出土地点

と層位、接合関係、更には各遺構との関連等について十分な検討を行うことができなかった。この為、なお個々の遺物については勿論、各遺構更にはこの空壕東部の小平坦面の性格等については全く把握されていない状況にある。更に検討を加える所存であることを記しておきたい。

尚出土陶磁器の一覧を付した。(松崎)

表9 空壕跡東平坦面陶磁器集計表

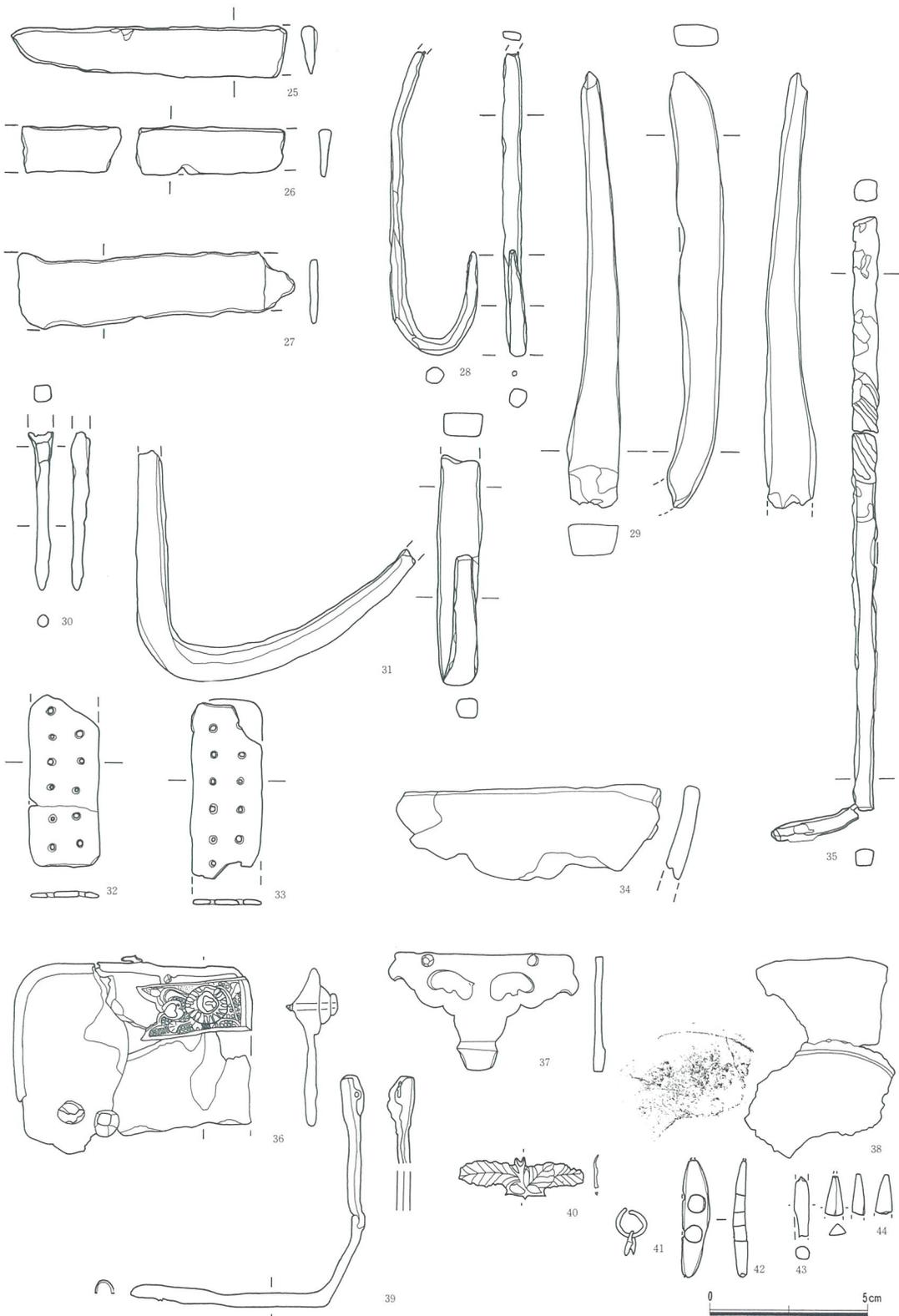
調査区	産地 種別 器種	船 載					国					産					合計			
		青磁	白磁	染付	赤絵	朝鮮	小計	瀬戸・美濃		志野	唐津	小計	碗・皿・計	越前	珠洲	瀬戸 美濃		唐津	信楽	小計
								灰釉	鉄釉											
空壕跡東平坦面	碗	1		2			3	2				2	5						5	
	皿	3	12	16			31	19			1	20	51						51	
	坏																			
	盤																			
	香炉																			
	播鉢													15					15	
	甕・壺・鉢																			
	袋物																			
	円盤	1					1						1						1	
	計	5	12	18			35	21			1	22	57	15					15	
	碗	12		16	2		30	3	4			7	37						37	
	皿	8	20	13	1		42	53		1	2	56	98						98	
	坏		1				1						1						1	
	盤																			
	香炉																			
播鉢													9	1				10		
甕・壺・鉢													3	1				4		
袋物																				
その他																				
計	20	21	29	3		73	56	4	1	2	63	136	12	2				14		
37号竪穴	碗																			
	皿	2		2			4	3				3	7						7	
	坏																			
	盤																			
	香炉																			
	播鉢																			
	甕・壺・鉢																			
	袋物																			
	その他																			
	計	2		2			4	3				3	7						7	
	36号竪穴	碗			1		1	1				1	2							2
		皿			1		1	2				2	3							3
		坏																		
		盤																		
		香炉																		
播鉢																				
甕・壺・鉢																				
袋物																				
その他																				
計				2			2	3				3	5						5	
計		碗	13		19	2		34	6	4			10	44						44
		皿	13	32	32	1		78	77		1	3	81	159						159
		坏		1				1					1							1
		盤																		
		香炉																		
	播鉢													24	1				25	
	甕・壺・鉢													3	1			4		
	袋物																			
	円盤	1					1						1						1	
	計	27	33	51	3		114	83	4	1	3	91	205	27	2				29	



第32図 空壕跡東平坦面出土遺物



第33図 空壕跡・東平坦面出土遺物（17は空壕覆土）



第34图 空壕跡東平坦面出土遺物

4. 15LM区(北側トレンチ)試掘調査(第35図)

(1) 位置概要

御代参道路北側段の下の平坦部で御代参道路南側と同様に空壕A、空壕Bの存在を確認する事を目的とした。尚トレンチの規模は幅3.5m×長さ14mである。

(2) 層序

空壕A

15L10区～15L15区にかけて確認された。規模幅8.6m、深さ1.4m程である。覆土はセクション及び表10によるとI層は10Y R $\frac{3}{4}$ 暗褐～10Y R $\frac{5}{8}$ にぶい黄褐シルトをベースにし基盤礫が含有される。5層に細分された。さらに20cmの厚さのII層の下にIII' A層が堆積する。III' A層は32層に細分され10Y R $\frac{3}{4}$ 褐～10Y R $\frac{5}{8}$ 黄褐シルトをベースに炭化物、基盤礫、ロームブロックが含まれ、やや粗とやや密の層がある。53より62までは、やや密である。63以下はしまりが一定していない。御代参道路東側空壕Aに比し、浅く、幅が若干広い。

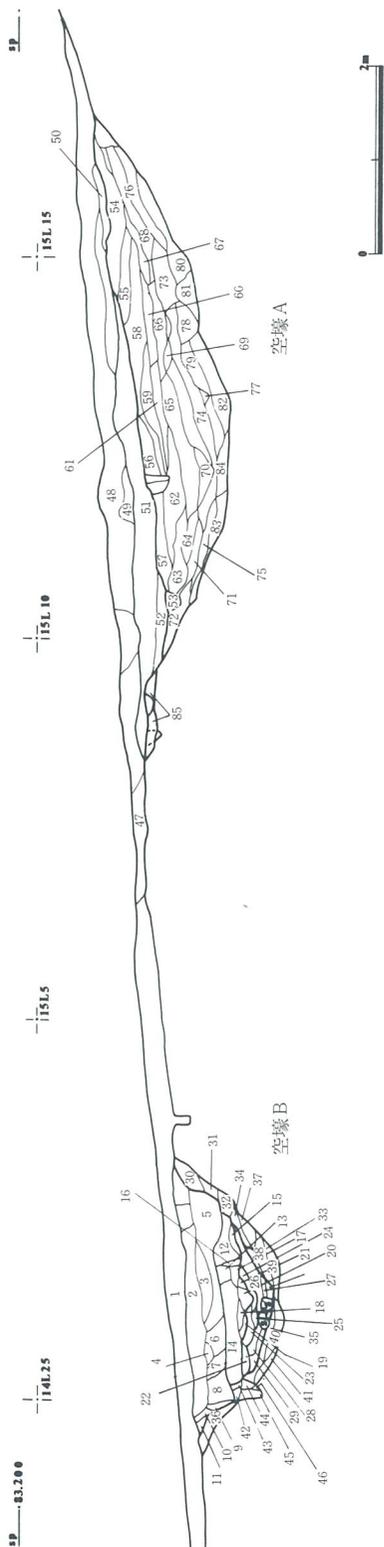
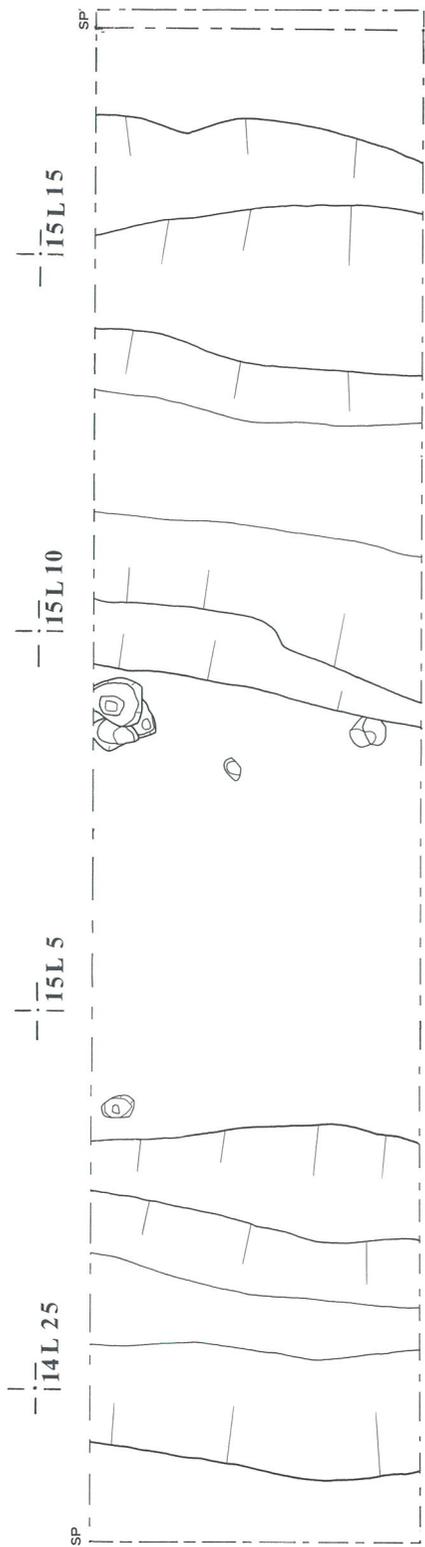
空壕B

14L20区～14L25区にかけて確認された。規模は幅3.2m、深さ1m程である。覆土はセクション及び表10によると10Y R $\frac{5}{4}$ にぶい黄褐～10Y R $\frac{5}{8}$ 褐シルトのI層の下に10Y R $\frac{3}{4}$ にぶい黄褐～10Y R $\frac{6}{8}$ 明黄褐シルトをベースに炭化物、ロームブロック、基盤礫が含有されるI A層、さらにその下に10Y R $\frac{5}{8}$ 黄褐～10Y R $\frac{5}{8}$ にぶい黄褐シルトをベースにロームブロック、炭化物が含まれるI B層が

堆積する。I A層、I B層とも10層に細分される。いずれも明治以後の整地層と考えられる。II層は大きくII A層とII B層に分けられる。II A層は10Y R $\frac{5}{8}$ にぶい黄褐～10Y R $\frac{5}{8}$ 黄褐シルトをベースにOS-a等が含有される4層に細分された。II B層は10Y R $\frac{5}{8}$ にぶい黄褐～10Y R $\frac{6}{4}$ にぶい黄橙シルトでやや粘性をもち、やや粗である。以下はIII' B層で10Y R $\frac{3}{8}$ 暗褐～10Y R $\frac{5}{8}$ 黄褐シルトで基盤礫との混層であり炭化物等が含まれやや密である。空壕Aと同様御代参道路東側空壕Bに比し浅く、幅が若干広い。尚平面図上空壕Aと空壕B間の平坦部に位置するピットの性格は不明である。次年度の当地区の調査に期するところである。

(3) 出土遺物(PL. 19-53-69)

青磁、白磁、染付、美濃の碗、皿、盤、越前系のかめ、壺、播鉢等が出土している。いずれも小破片であり計39点程である。青磁では盤、稜花皿が出土している。盤は外面口縁部をくの字状に外反させ、端部を上方に引き上げ、内部には幅広の蓮弁文をもつものである。釉調は14G7.5の3Sグレイみの黄である。白磁は端反り口縁の皿等がみられる。染付は碗、皿が出土している。碗では、外面口縁部に2条の圏線が入り梅月文の描かれるもの、体部に芭蕉葉文の描かれるもの、皿では碁笥底のものがみられる。美濃では端反り口縁の皿が出土している。また前述の青磁の盤は15世紀末頃のものとして推される。これらの示す年代は15世紀末～16世紀中葉である。(齊藤)



第35図 北側トレンチ平面図、セクション図

表10 15L区トレンチ空壕A空壕B土層観察表

図版 層序No.	層 序			色 調		土 性	組 成	備 考
	基本層序	小区分	細 別	J I S n o t a i o n	土 色			
1	I			10Y R 5/6	にぶい黄褐茶味強い	シルト	草根多い	やや粗
2	I	A	1	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤礫7%	空壕B覆土
3	I	A	2	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤礫大5%炭化物5%ロームブロック1%	2より若干暗い やや粗 空壕B覆土
4	I	A	3	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	ロームブロック5%	密 空壕B覆土
5	I	A	4	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	炭化物2%基盤礫大5%やや粒状あり	やや密 空壕B覆土
6	I	A	5	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤礫中~大5%粒状	空壕B覆土
7	I	A	6	10Y R 5/6	にぶい黄褐、黄褐	シルト	ロームブロック10%基盤礫大5%	密 空壕B覆土
8	I	A	7	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	ロームブロック1%	8よりやや暗い成分同じ 密 空壕B覆土
9	I	A	8	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	草根多量あり	粗 空壕B覆土
10	I	A	9	10Y R 5/6	明黄褐	シルト	基盤礫20%粒状あり	粗 空壕B覆土
11	I	A	10	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤礫中~大10%ロームブロック3%	やや密 空壕B覆土
12	I	B	1	10Y R 5/6	褐	シルト	ロームブロック3%やや粘性	成分は4と同じ やや密 空壕B覆土
13	I	B	2	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤礫中~大10%ロームブロック3%	やや密 空壕B覆土
14	I	B	3	10Y R 5/6	褐	シルト	ロームブロック3%やや粘性	成分は4と同じ やや密 空壕B覆土
15	I	B	4	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	ロームブロック25%粘質土炭化物10%	密 空壕B覆土
16	I	B	5	10Y R 5/6	褐	シルト	基盤礫中2%	やや粗 空壕B覆土
17	I	B	6	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	炭化物5%粒状あり	密 空壕B覆土
18	I	B	7	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	炭化物5%ロームブロック5%	やや密 空壕B覆土
19	I	B	8	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	炭化物10%ロームブロック15%	やや粗 空壕B覆土
20	I	B	9	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	ロームブロック20%	密 空壕B覆土
21	I	B	10	10Y R 5/6	にぶい黄褐、黄褐	シルト	ロームブロック5%、炭化物2%	やや密 空壕B覆土
22	II	A	1	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤礫中~大3%O S - a 35%	密 空壕B覆土
23	II	A	2	10Y R 5/6	灰黄褐	粘質土	堅緻	密 空壕B覆土
24	II	A	3	10Y R 5/6	にぶい黄褐	粘質土	O S - a 2%ロームブロック10%	密 空壕B覆土
25	II	A	4	10Y R 5/6	にぶい黄褐、灰黄褐	粘質土 シルト	堅緻	密 空壕B覆土
26	II	B	1	10Y R 5/6	にぶい黄橙	粘性強 しまる	O S - a 1%	密 空壕B覆土
27	II	B	2	10Y R 5/6	にぶい黄褐、褐	粘性強 シルト		やや粗 空壕B覆土
28	II	B	3	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	O S - a 10%	粗 空壕B覆土
29	II	B	4	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	O S - a 10~15%	やや粗 空壕B覆土
30	III	B	1	10Y R 5/6	褐	シルト		やや粗 空壕B覆土
31	III	B	2	10Y R 5/6	褐、暗褐	シルト		やや粗 空壕B覆土
32	III	B	3	10Y R 5/6	褐	シルト	基盤礫3%、炭化物1%	やや密 空壕B覆土
33	III	B	4	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	ロームブロック1%、粘性なし	やや密 空壕B覆土
34	III	B	5	10Y R 5/6	黄褐	シルト	基盤礫1%	やや粗 空壕B覆土
35	III	B	6	10Y R 5/6	にぶい黄褐、黄褐	シルト	基盤礫大20%	やや粗 空壕B覆土
36	III	B	7	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤礫極小~中15%ロームブロック1%	やや密 空壕B覆土
37	III	B	8	7.5Y R 5/6	にぶい褐	シルト	炭化物1%、O S - a 2% 基盤礫、シルト混層	空壕B覆土
38	III	B	9	10Y R 5/6	にぶい黄褐、黄褐	シルト	基盤礫大20%	やや粗 空壕B覆土
39	III	B	10	10Y R 5/6	黄褐	シルト	基盤礫大2%	空壕B覆土
40	III	B	11	10Y R 5/6	にぶい黄褐	粘質土	ロームブロック2%、堅緻 基盤礫大2%、炭化物1%	密 空壕B覆土
41	III	B	12					空壕B覆土
42				10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト		やや粗 P i t 覆土
43				10Y R 5/6	褐	シルト		やや密 P i t 覆土
44				10Y R 5/6	にぶい黄褐	やや粘性 シルト		やや密 P i t 覆土
45				10Y R 5/6	にぶい黄褐	混層 シルト		粗、柱状 P i t 覆土
46				10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト		やや粗 P i t 覆土
47	I		1	10Y R 5/6	褐		基盤礫50%	やや粗
48	I		2	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤礫極小2%	やや粗
49	I		3	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤礫大5%	やや密
50	I		4	10Y R 5/6	暗褐、にぶい黄褐	シルト	基盤礫極小10%	やや粗
51	II		1	10Y R 5/6	褐	シルト		空壕A覆土
52	II		2	10Y R 5/6	褐	シルト	堅緻	密 空壕A覆土
53	III	A	1	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	ロームブロック20% やや堅緻	やや密 空壕A覆土
54	III	A	2	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤礫極小~中5%	やや密 空壕A覆土
55	III	A	3	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤礫極小~中8%	空壕A覆土
56	III	A	4	10Y R 5/6	黄褐	シルト	基盤礫極小5%	空壕A覆土
57	III	A	5	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	ロームブロック、基盤礫大	空壕A覆土
58	III	A	6	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	基盤礫極小~極大10%	やや密 空壕A覆土
59	III	A	7	10Y R 5/6	にぶい黄褐、黄褐	シルト	基盤礫極小~極大5%	やや密 空壕A覆土
60	III	A	8	10Y R 5/6	にぶい黄褐、黄褐	シルト	基盤礫極小10%	3.0より若干暗い やや密 空壕A覆土
61	III	A	9	10Y R 5/6	黄褐	シルト	基盤礫極小~極大10%	やや密 空壕A覆土
62	III	A	10	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	炭化物2%基盤礫5%	やや密 空壕A覆土

表10 15L区トレンチ空壕A空壕B土層観察表②

図版 層序No.	層 序			色		土 性	組 成	備 考
	基本層序	小区分	細 別	J I S notation	土 色			
6 3	Ⅲ'	A	11	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト	炭化物1%、ロームブロック1%	空壕A覆土
6 4	Ⅲ'	A	12	10Y R 5/6	にぶい黄褐	シルト		空壕A覆土
6 5	Ⅲ'	A	13	10Y R 5/6	明黄褐	シルト	基盤礫10%炭化物1%、シルト混層砂っぽい	空壕A覆土
6 6	Ⅲ'	A	14	10Y R 5/6~5/4	にぶい黄褐	シルト	基盤礫小1%	やや粗 空壕A覆土
6 7	Ⅲ'	A	15	10Y R 5/6	黄褐	シルト	基盤礫20%	やや密 空壕A覆土
6 8	Ⅲ'	A	16	10Y R 5/6	黄褐		基盤礫極小~中	空壕A覆土
6 9	Ⅲ'	A	17	10Y R 5/6	褐	シルト		空壕A覆土
7 0	Ⅲ'	A	18	10Y R 5/6~5/4	褐、にぶい黄褐	シルト	炭化物2%、基盤礫10%	やや密 空壕A覆土
7 1	Ⅲ'	A	19	10Y R 5/6	黄褐	シルト		やや粗 空壕A覆土
7 2	Ⅲ'	A	20					空壕A覆土
7 3	Ⅲ'	A	21	10Y R 5/6	黄褐			やや粗 空壕A覆土
7 4	Ⅲ'	A	22	10Y R 5/6	にぶい黄褐		基盤礫16%	やや粗 空壕A覆土
7 5	Ⅲ'	A	23	10Y R 5/6	黄褐	シルト	ロームブロック2%炭化物2%基盤礫中~大10%	やや密 空壕A覆土
7 6	Ⅲ'	A	24	10Y R 5/6	黄褐	シルト	基盤礫大30~35%	粗 空壕A覆土
7 7	Ⅲ'	A	25	10Y R 5/6	褐	シルト		空壕A覆土
7 8	Ⅲ'	A	26	10Y R 5/6	褐	シルト	基盤礫中20%	やや粗 空壕A覆土
7 9	Ⅲ'	A	27	10Y R 5/6	黄褐		基盤礫大20%、炭化物2%	密 空壕A覆土
8 0	Ⅲ'	A	28	10Y R 5/6	黄褐			空壕A覆土
8 1	Ⅲ'	A	29	10Y R 5/6	黄褐		基盤礫大20%、炭化物2%	密 空壕A覆土
8 2	Ⅲ'	A	30					空壕A覆土
8 3	Ⅲ'	A	31	10Y R 5/6~5/4	黄褐、褐	シルト	基盤礫極小20%	やや密 空壕A覆土
8 4	Ⅲ'	A	32	10Y R 5/6	褐	シルト	基盤礫極小~極大20%	やや密 空壕A覆土
8 5	Ⅲ'	A		10Y R 5/6	黄褐	シルト		やや密

Ⅲ 小 括

第二平坦面の端部に数条の柵列が検出されたが時間差を示すもので本来一条で構成されると推される。巾20、深さ50cm前後の溝を掘りそこに径10cm前後の丸柱が埋設される。柱間は4~17cmとややバラつくが比較的密に立てられる。柱の径に大小あるが配置上の規則性は見出し得ない。62年度調査区(16J25)で柵列の内側に近接して柱穴が検出され、柵と一体の施設を推測した。搦手の柵列の外側にも小柱穴列が検出されており(本概報V)、斜面肩に柱穴だけが確認されたものも、崩落による上部の流失なのか検討が必要である。こうした前後の付帯施設、遺構の追求が不十分なまま当地区の調査を終結したことは大きな課題を残すこととなった。

端部の柵列は南西宮ノ沢斜面上に周る。第二平坦面の斜面肩を巡って第三平坦面、搦手の柵列に連続すると思われる。第三平坦面の柵列(第8~10号地剖面-本概報VII)の柱間は広く離れており、場所により異なるようである。

又、深さ50cm前後の溝底に立てられた柵の地上部の高さはどれぐらいであろうか、「築城記」^{註1}には堀の高さ5尺2寸、柵は6尺余、山城は低くとある。又、柵は1間の内に5本ほど柱を立て人が通らなくするとあるが、検出された柱穴は堀に

近い様子を示している。

第一平坦面の調査では目的とした二条の壕の新旧を直接明らかにする手懸りは得られなかった。

空壕Aを跨ぐ4対の柱穴はかなり大きな構造物を推測させるが、その実体は明らかでない。

壕と壕の間の土壇群のうち1基は明らかに墓壇であり他の土壇も類似の形状をしており、同種遺構かもしれない。

空壕AとBの覆土の堆積は随分と違っている。Ⅲ'Aの厚い層中に人為的再堆積はみられず、上段からの崩落、流入と考えられる。逆にⅢ'Bの堆積は極めて薄く、O S-a(1741年)と把えている火山灰を含むII層堆積後、短期間に埋没している。

壕の東の平坦面は、第二平坦面の端部から空壕Bの東2m程のところに緩やかに続く斜面を削り、壕を掘り上げた土を整地して造成したものであろう。従って平坦面上の遺構と少なくとも空壕Aとは同時に存在したと思われる。

空壕BがAに先行して設けられた可能性もあるが、B西に近接する小柱穴列等はBに付帯したものと解され、他方その掘り込み面を更に高く求めることもむづかしい。又、東平坦面の遺構の軸線は殆んどがBに平行していることもBと平坦面上の遺構の同時性を伺わせる。他方Bに跨がり、B

によって欠失した遺構の検出されていないことはその逆の可能性を少くしている。

蛇足乍らAに跨がる大形の柱穴、土壇等は少くともA以前に遡るものではない。

盛り土整形以前の遺構は旧地表面に残されている可能性があるが、その面までの掘り下げは殆んど行っていない。15J5区にトレンチを設け、巾1m程旧地表面まで掘り下げたが、柱穴その他の遺構は認められなかった。

現在得られた資料をもとに遺構の形成時期を推測したところであるが、空壕跡北半、中央部の調査時に更に留意し検討したく思う。

本年度調査区出土の陶磁器は1,300点弱(但し15L区トレンチのものは除く)であるが、そのうち1,000点弱は、柵列周辺、及び空壕覆土の遺物である。空壕覆土の遺物は基本的に第二平坦面からの流れ込みと推され、壕東平坦面からの出土陶磁器は234点余となる。

柵列跡周辺の遺物には勝山館跡で出土した殆んど遺物が認められている。茶臼、茶釜?、鏡等は、出土例の少ないものであり留意される。他方陶錘、羽口、鉄滓等もあり、種々の様相が推される。

壕東の小平坦面からは230点余の陶磁器が出土した。碗の4倍程の皿と、碗皿の8分の1程の播鉢甕類で構成される。香炉、袋物等がなく、碗、皿中に占める鉄軸類が2%弱と柵列周辺の5%弱に比べかなり少い。一方碗皿中の舶載品の比は55%余で僅かではあるが少なくなる。これらの組み合わせは碗皿を主とする日常食器類のようである。

これに対し鉄製品、鉄滓が3kg余出土し、各々の2分の1前後か一定の範囲に集中して分布する。又、武具等の銅製品も多く見られる。

この小平坦面で検出された遺構は掘立柱の建物跡と竪穴遺構である。

1～7号の掘立柱建物のうち、柱穴にまともりを見たのは1、3～6号であり、3～6号の柱筋はほぼ同一方向となる。又3基の竪穴もこれらと同一の軸を持つ。掘立柱建物は3×3間の長方形を基本とするものが多い。第3号建物跡としたものは柱間も等間と最も整った状態を示している。

3～6号の軸線を同じくする建物跡を同時期と仮定した時、3間×3間の建物が3棟同時にあり、1棟だけ長軸を90°異にすることは何を意味するのであろうか。3×3間という建物自体、その構

造をどう考えるべきなのか。わからないことばかりである。又、竪穴の果す機能がこの平坦面に不可欠のものであるとすれば、35号竪穴を更に同一時期のものとして想定し得るところである。只、鉄滓等の出土は細部は未検討であるが第6号建物跡に共通する感じがあり、或は竪穴の機能がこれに移されているとも推されるところである。この時2号とした柱列が建物として併存したかもしれない。竪穴遺構が3基検出され、少なくとも二時期にわたると推されるのに対し掘立柱の建物に明瞭な建て替えの跡を検出し得なかったことは、こうした推測を消極的にすることになっている。

こうした建物跡の推移、組み合わせ等を検討するためには、個々の遺構に対する、共伴遺物の決定その他の分析作業が必要なことはいうまでもない。従って上述の内容は現時点にあっては単なる思いつきの範囲を出ないものである。

出土遺物から見る本小平坦面は伝侍屋敷跡よりは陶磁器の量が豊かであり、第二、第三平坦面に比べて単純な組成を示し、鍛造削片等を検出する点は伝侍屋敷跡とも共通するが、鉄製品等の量は第二、第三平坦面に近く、諸種の銅製品出土は、ところによっては、第二、第三平坦面を凌ぐことになるかと推される。

総柱の建物跡が検出されず、竪穴遺構が存在することは、第二、第三平坦面に通ずる、館主体部に共通の特徴とすることができそうである。

しかし、これに伴うと思われる掘立柱の建物跡は共通した、比較的単純な構成を示しているが、その構造は今少し明らかでないようである。

尚、宮ノ沢側へ切り落とされた空壕Aが二手に分れ、一は西へ第二平坦面南端斜面下に沿うようであることは全く予想外の事であった。殊に後者の先行きは空壕Bとの関係や、本平坦面南端を一段低く東へ下る道路跡が南から西へと回り、侍屋敷へ到る道として連なっているものと推されることから、この道との関係等について更に検討すべき問題点を提示するところとなった。

これらの課題を踏まえ15L区トレンチで確認した北半の空壕等の遺構の調査を次年度に実施する所存である。(松崎)

註) 本書は鈴木亘先生のご高配により実現することができた。記して感謝申し上げたい。

表11 陶磁器集計表

調査区	産地別 器種	船 載					国						産					合計		
		青磁	白磁	染付	赤絵	朝鮮	小計	瀬戸・美濃 灰釉	美濃 鉄釉	志野	唐津	小計	碗・皿・計	越前	珠洲	瀬戸 美濃	唐津		備前	小計
柵 列 跡 周 辺	碗	20	3	17	2	42	20	17			37	79							79	
	皿	13	46	72		131	95	1		1	97	228							228	
	坏																			
	盤																			
	香炉																			
	播鉢													73	3	1			77	77
	薬壺・鉢														4				4	4
	袋物							1	1			2	2						2	2
	その他																			
	計	33	49	89	2	173	116	19		1	136	309	73	7	1				81	390
空 壕 覆 土	碗	13	5	66	1	85	12	21			33	118							118	
	皿	10	137	88	3	238	155	1		1	157	395							395	
	坏		4	1		5						5							5	
	盤	2				2						2							2	
	香炉																			
	播鉢												67			1			68	68
	薬壺・鉢												14	1					15	15
	袋物																			
	その他																			
	計	25	146	155	4	330	167	22		1	190	520	81	1	1				83	603
空 壕 跡 東 平 坦 面	碗	13		19	2	34	6	4			10	44							44	
	皿	13	32	32	1	78	77		1	3	81	159							159	
	坏		1			1						1							1	
	盤																			
	香炉																			
	播鉢												24	1					25	25
	薬壺・鉢												3	1				4	4	
	袋物																			
	円盤	1				1						1							1	
	計	27	33	51	3	114	83	4	1	3	91	205	27	2					29	234
空 壕 跡 ・ 同 東 表 採	碗	1		7		8	2				2	10							10	
	皿	1	9	4		14	21				21	35							35	
	坏																			
	盤																			
	香炉																			
	播鉢																			
	薬壺・鉢												2					2	2	
	袋物												1					1	1	
	その他																			
	計	2	9	11		22	23				23	45	3						3	48
調 査 区 外 表 採	碗							1			1	1							1	
	皿		2	2		4						4							4	
	坏																			
	盤																			
	香炉																			
	播鉢												2					2	2	
	薬壺・鉢																			
	袋物																			
	その他																			
	計		2	2		4		1			1	5	2						2	7
総 計	碗	48	8	109	5	170	40	43			83	253							253	
	皿	36	226	198	4	464	348	2	1	5	356	820							820	
	坏		5	1		6						6							6	
	盤	2				2						2							2	
	香炉																			
	播鉢												168	4	2			174	174	
	薬壺・鉢												18	6			24	24		
	袋物						1	1			2	2						2		
	円盤	1				1						1							1	
	計	87	239	308	9	643	389	46	1	5	441	1084	186	10	2			198	1282	

IV 保存処理

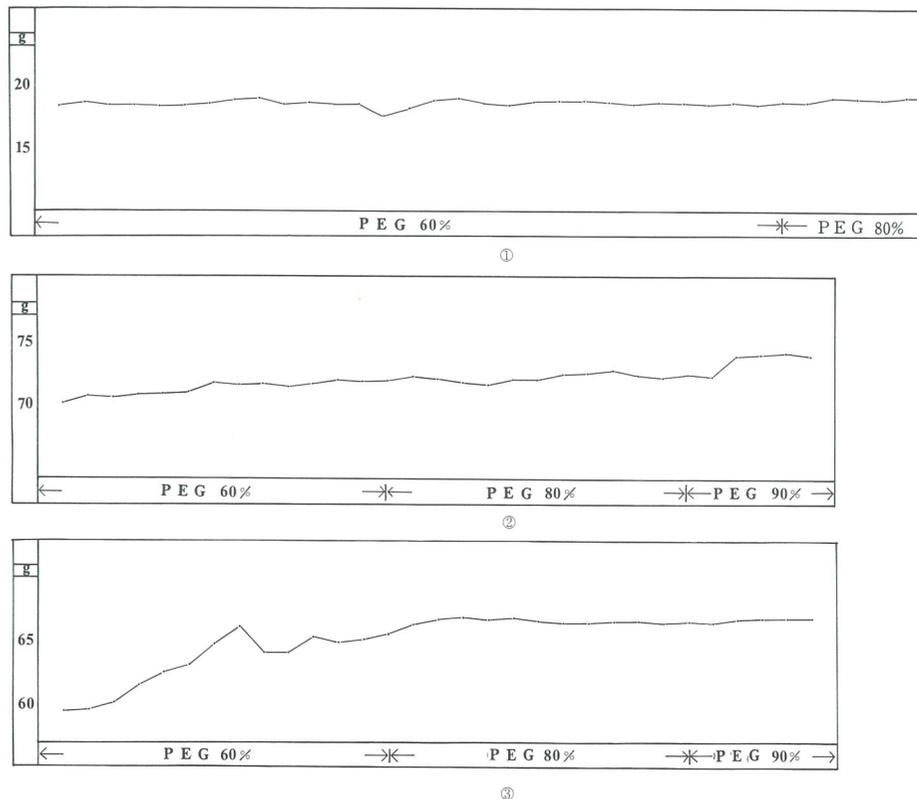
1. 木製品

今年度は箸、折敷等の生活用具等1,015点、昭和58年度用水施設跡より出土の木樋を処理対象として実施した。生活用具等は昨年度まで常温状態でPEG40%含浸中のものである。今年度は従来と同様60%、80%、90%の順に標準液温65°Cの状態にてPEG含浸を行った。第36図2・3は恒温水槽内の木製品重量変化グラフである。尚重量測定は恒温水槽内の任意に抽出した木製品である。尚2は含水率の高い木製品、3は含水率が低くややしっかりした木製品である。2では59gから67gへとその増加率は約1.13倍である。尚80%以降重量に殆んど変化は見られない。3では70gから74gへとその増加率は1.06倍となる。木樋は一昨年度まで常温状態で20%、40%含浸をそれぞれ1年、昨年度標準液温65°Cの恒温状態にて1年間の60%

含浸を経てきている。今年度は60%含浸に引き続き80%含浸を行った。尚木樋が4.9mのため水槽が約6mと大きく、PEG溶液内の水分蒸発が激しいため2～3週間に一度水のつぎ足しを行なった。尚重量測定用木製品は木樋の小破片にて行なった。第36図1によると18.4gから20gへとその増加率は約1.09倍であった。尚木製品重量測定、PEG濃度測定は1週間毎である。生活用具等PEG処理を完了した遺物は昨年同様エタノールをかけ軽いブラッシングをし表面に余分に付着しているPEGを除去した。

2. 鉄製品

今年度は600点の処理を行なった。従来通り錆除去、メタノールによる脱水、パラロイドNAD-10のナフサ溶液20%、30%による減圧含浸を行なった。(齊藤)



第36図 木製品重量変化グラフ

V 「勝山館跡出土炭化種子の識別」

松谷 暁子

資料は、ビニール袋に入れられた炭化種子で、塊をなすものと、遊離した種子の二通りである。

1. 方法

一点ずつシャーレに移し、実体顕微鏡で外形を観察し、分類した。一部の種子はさらに走査型電子顕微鏡で微細構造を観察した。

2. 実体顕微鏡での観察結果

塊をなしているものに大きな粒と小さな粒があり、大きな方は、イネ科に特徴的な乳頭突起が認められるものがあり、イネと考えられる。小さな方は、イネ科の雑穀と考えられる。イネ科雑穀には、ヒエ、アワ、キビなどがある。この小さな雑穀の識別は、炭化粒の表面に外穎が残っている場合に可能である。実体顕微鏡下で横方向の隆起が認められる場合にはアワの仲間、表面が光沢があり、横方向の隆起が認められない場合にはキビかヒエの仲間という見当がつけられる。しかし、走査型電子顕微鏡で表皮細胞を観察し、その形態の相違を併用した方がより明確になる。塊をなしている、イネかイネ科雑穀か不明のものもあった。塊をなさない種子ではイネ、イネ科雑穀の他に、外形から小豆、ソバ、なども識別された。小さな円形の種子が多いのは、アブラナ科の種子かと思われる。もっと大きなものにクルミの殻(内果皮)の半欠けがあり、小さな破片になったものもあった。キハダと記された種子は、キハダの果実で中に種子が入っていた。他にヤマブドウの種子が認められた。また、スギナ類の塊状の貯蔵根や炭化材の破片も混在していた。前者は炭化していないので現在のものの混入と思われる。

3. 走査型電子顕微鏡によるイネ科雑穀の識別

日本で古くから栽培された主なイネ科雑穀は、ヒエ、アワ、キビの三種であるが、粒が1-2ミリと小さいため外形からの識別だけではなく、表皮細胞の形態による差異を利用する方法が有効である(松谷 1988)。勝山館跡から出土したイネ科雑穀は比較的多く、塊をなすものもあれば、遊離した粒もあるが、穎の残存しているものについて観察をしたところ、表皮細胞の形態はキビの細胞に似ており、ヒエやアワと思われる構造は見いだ

すことが出来なかった。全部について実施する時間はなかったため断定はできないが、実体顕微鏡での観察結果を総合すると、キビが主体と思われる。

アブラナ科の種子については、笠原安夫氏によって縄文時代からの報告例(笠原 1985など)がふえており注目されるが、今回出土した炭化種子は保存状態もあまりよくなくて、種類までは判明できなかったが、1ミリくらいの小形種子と3ミリくらいの種子と大きさに二種類あり、前者をアブラナ科A、後者をアブラナ科Bとした。

4. まとめ

識別された植物は、栽培植物と野生利用植物に二分される。

野生食用植物では、クルミとヤマブドウがあり、これらは食用に利用された残さいであろう。ほかに種名も用途も不明のものがある。栽培植物は、粳付イネが多い。塊をなしているものが多い。キビと考えられる雑穀も穎が残存しており、未使用であろう。イネとキビは同じ資料に混在している場合があった。ソバはあまり多くないが、アズキと同定された資料は6点あり量も比較的まとまっている。アブラナ科と思われる種子も多く、大きさに二種類あるが、保存状態はあまりよくない。大麦や小麦が全く見いだされなかったのは、意外であった。これまでに観察したことのある真壁城(松谷1983a)、葛西城(1983b)、岐阜城(松谷印刷中)などでは、大麦が多く認められたのと対照的である。

上記の炭化種子の出土した地点は様々で、貝塚(遺物廃棄場所)周辺、館内主要部の建物跡内、正面空壕の外側(第一平坦面-63年度調査区)、伝侍屋敷跡・倉庫と推定される建物群などにわけられるとのことであるが、遺構ごとに若干の違いが認められ、館主体部では、イネ、キビ、ソバ、小豆の主要食用作物とクルミ、キハダが見いだされたのに対し、伝侍屋敷跡では、アブラナ科とヤマブドウしか見いだされず、正面空壕外(第一平坦面)には、アブラナ科、イネ、キビ、ヤマブドウ、マメ類など種々様々な種子が見いだされた。

倉庫跡に相当する資料は見いだされないので言及できない。

文献

笠原安夫 1985 阿曾田遺跡出土炭化種子の同定。岐阜市中津川市阿曾田遺跡発掘調査報告書、中津川市教育委員会。

松谷暁子 1983 a 真壁城跡出土の炭化物について。真壁城跡—中世真壁の生活を探る—、真壁町教育委員会。

松谷暁子 1983 b 葛西城址出土大麦の走査電子顕微鏡による観察。葛西城、葛西城址調査会。

松谷暁子 1988 電子顕微鏡でみる縄文時代の植物。畑作文化の誕生—縄文農耕論へのアプローチ、日本放送出版協会。

松谷暁子（印刷中） 千畳敷出土穀物の同定。岐阜市教育委員会。

VI 環境整備工事

昭和63年度の整備工事は正面第一平坦面と第二平坦面の5m余の段差を有する斜面とそれに続く空壕跡の法面保護の為の芝張りと昭和62年8月、史跡の範囲に追加指定された夷王山墳墓群の説明板設置を行った。

〈芝張り〉

遺構確認調査によって検出した遺構面に10cmの盛土を行い、その上に芝張りを実施することとした。第一平坦面と第二平坦面との間の段及び空壕跡の側壁は急傾斜面となっており、盛り土をおさえる土留め工を行うこととした。工事は巾15cm、厚さ3cm、長さ1.8mの松板を50cm間隔で、径1cm、長さ30cmの鉄筋を15cm打込んで固定させ、土を入れる方法によった。

〈夷王山墳墓群説明板〉

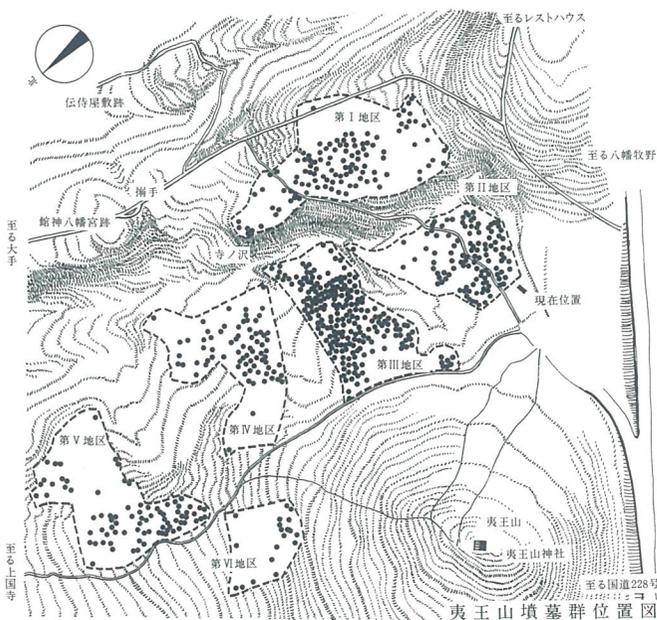
説明板はパーナー仕上げをした黒ミカゲ石にヘアライン仕上げのステンレス名板を取り付けた。名板には夷王山を取り巻くVI地区の墳墓群の分布図と説明文をエッチング処理により印刷した。

夷王山墳墓群

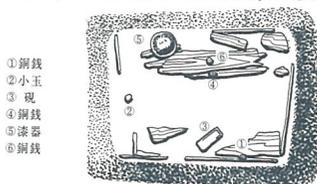
勝山館の背後から夷王山の麓のあたりに、六地区に分れて600基余りの墓がある。大きさは2×1.8m、高さ40cm程の円形で、大きなものは7m程のものもある。

火葬した骨を箱に納めて埋めたり、遺体をそのまま長方形の箱に納め土葬にし、土や石を高く積んで墓を作っている。宋銭や明銭の納められることが多いが、大きな墓には漆塗りの盃、硯、玉なども納められていた。このように埋葬の仕方に違いはあるが、いずれも仏教を信仰していた人達の墓と思われる。

これらの墳墓群には、勝山館を築き道南和人社会を確立した武田信広とその一族、更には勝山館を中心に中世の上ノ国を支えた多くの人達が眠っていると思われる。



夷王山墳墓群位置図



副葬品出土状況 (I-30号墳)



木棺推定復原図

第37図 説明板詳細図

VII ま と め

勝山館跡の主体部は大きな三段の平坦面からなっている。一段目と二段目の段差は5 m余と最も大きい。第一の平坦面（第一平坦面）南東半には昭和30年代の後半に杉などが植樹され、旧状が判らなくなっていた。これらを除きし景観を復す為の仮整備を行ったところ、館の正面が立体的に姿を現わし、壕跡らしい凹みまで見つかった。

62年度にトレンチを設定し遺構の確認を行ったところ、二条の空壕跡が検出され、第二平坦面の端部に柵列の設けられることが判明した。

63年度はこの柵列と空壕跡、更にその北東の小平坦部の遺構を明らかにする確認調査を行った。

柵列跡は溝の中に丸太を密に立て並べたもので数次の造り替えが行われていることが判った。柵の直近に補強その他の関連施設も予測されていたが、充分調査できなかった。

第一平坦面と第二平坦面の5 m余の段差は人工的に斜面を切り取ってつくられたものであり、その下に3 m弱、空壕Aが掘り下げられていたことが判った。このAの更に外側に2 m弱の深さのBがつくられている。又切り取られ、掘り上げられた土を前面に盛土・整地して第一平坦面が作られていると推測できた。

5 m余の段差をもって造り出された第二平坦面と直下の空壕Aは、そこから生じた排土で整地された前面の第一平坦面と併行すると推測することができる。

一方、第一平坦面の最も壕に近い小平坦部で検出された建物跡の軸線と空壕Bの軸線がほぼ平行していることは、この両者の同時性を推測させる。空壕Bの軸線に併せて小平坦部をBの外側に造成するのは余り効率的ではない。Bが古い場合も新しい場合も、小平坦部内の建物跡がB側に広がっている様子は見られない。最大巾4 m弱のBの真中からAの間に建物が建てられた可能性は少なく、5 m余の段、空壕A・B、前面の小平坦部はほぼ同時に存在していたと推される。

これらの遺構が同時に形成されるには、綿密な計画と組織的な土木工事が実施できる体制が備わっていなければならないであろう。

これらの遺構の形成された時期についての確認

はないが、遺構面からの遺物の示す年代は15世紀末～16世紀末と館の存続した初期から廃絶期と推される間を示している。又、小平坦部の堅穴遺構は重複に近いものもあり、建て替えが行われていると思われるが、掘立柱建物跡には明確な建て替えの跡は確認できなかった。

空壕Aの北東前面には約100㎡の空間がある。そこに空壕Bを設けた結果前方の平坦部は60㎡程に縮小される。しかし一方、AとBの間は3～4 mと狭く館を攻撃する寄手の勢力はBの外側に殆どが止められることになりBを越えてくる攻撃を薄いものにする効果があるかと推される。

各遺構の性格については遺物整理等の途中であり明確にすることができない。

壕と壕の間に土塚墓が設けられていたが、館の後方に600基余からなる墳墓群があり、一定地域が墓域として画されているかと推されていたところであり、この発見は新たな問題点となった。

空壕Aを跨ぐ4対一組の大形の柱穴の性格は、中央部での壕を渡る施設等の調査と併せ検討することとしたい。

壕の北東小平坦部で掘立柱と堅穴の建物跡が検出された。掘立柱の建物跡は平面形が3間×3間という特徴を示しているが、建物としての構造は良くわからない。堅穴のうち1基は焼失家屋で炭化材が良く残存している。鈴木亘先生によれば、床張りの建物であろうとのことであり、壁や柱なども明らかに出来そうである。

この小平坦部から羽口や鉄滓が出土した。従来羽口の完形品乃至、大形破片や椀形滓などはその殆んどが館後方の貝塚及びその周辺から出土しており、館の内部からはあまり出土していない。他の出土遺物、堅穴遺構との共伴関係等の整理が進めばこの小区画の場を考える有力な資料とすることができるであろう。

堅穴遺構があり、総柱の建物がないことは伝侍屋敷跡よりは館主体部に近いが、掘立柱建物跡は独特のものでもありそうである。

碗、皿、播鉢を主とする陶磁器の質と量は、伝侍屋敷跡よりは豊かであるが、第二、第三平坦面の館主体部に比べると見劣りがするが鍛冶関連遺

物を多く含むという概その特徴を指摘することができるであろう。

勝山館跡の焼土層等から炭化種子を採集し、紹介してきた。

東京大学総合資料館の松谷暁子先生にこれらの資料の顕微鏡等による鑑定をお願いし、玉稿を頂戴することができました。松谷先生には大変お忙しい中無理をお願い申し上げましたがご快諾を賜わり、心から御礼申し上げます。

コメ、ソバ、キビ、マメ等の食料が明らかになった。従来アワ?として紹介してきたものはキビの誤りであった。又、伝侍屋敷跡でコメを食料としなかったとは出来ないが、第一平坦面、第二平坦面、伝侍屋敷跡の各々で検出された種子類が違った内容を示し、上述の、遺構や他の遺物との比較と奇妙に符合しているのは大変興味のある結果である。

環境整備工事は文化庁記念物課の御指導で、掘り上げ後の空壕、段斜面の保護の為張芝工事を行った。これにより、法面の崩落が防がれることとなった。又、62年8月追加指定となった夷王山墳墓群の説明板を設置した。

勝山館跡の歴史的な位置付けを明確にすべく朝尾直弘、網野善彦、石井進、榎森進、仲野浩の諸先生を上ノ国町文化財保護審議会特別委員・勝山館跡調査研究専門員としてお迎えし、現地調査と御指導を頂戴することができた。

従来、筆者等は十分な資料の分析も経ず、様々に憶説を述べ勝山館跡を喧伝してきたが、今後学問的に検討を行い性格を究明する道が開かれた事は誠に有難い事である。

昭和54年この事業が着手され今年で10年を経過した。当初10年計画で開始したことからすると最終年度になっている筈であった。

1473年の館神八幡宮の創祀から1514年福山（松前）遷都の40年程、それも和人社会の基礎固めの頃の小規模なものとの予想は全く的はずれ、膨大な遺物量とその内容は、館の性格を根本から考え直させるものであった。又その期間も16世紀末葉にまで亘る長いものとなり、地区毎に種々の遺構が形成されている様子が窺われてきた。

この10年間に出土した遺物は20,000点を超え、遺構も多数検出されている。これらの資料を一日も早く整理、解明する事が目下の急務である。徒らにあて推量を繰り返す愚を脱し、確実な資料を提示出来るよう努力をする所存である。

一層のご叱正とご教導をお願い申し上げたい。
(松崎)

図 版

P.L.1 勝山館跡遠景（東から）





調査区全景（柵列跡・空壕跡・建物跡一南から）



遺構整備状況（空壕跡芝張）

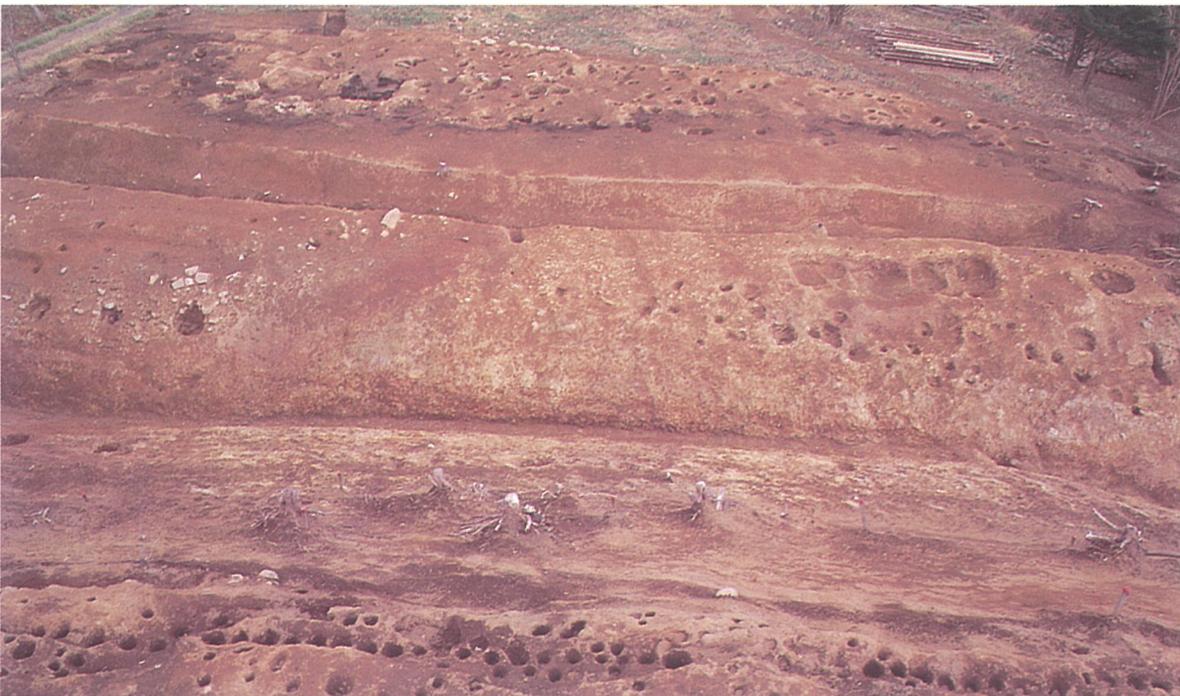


査区全景
(北西から)

P.L.
3

調査状況

遺構検出状況(柵列・塚・建物跡―南西から)



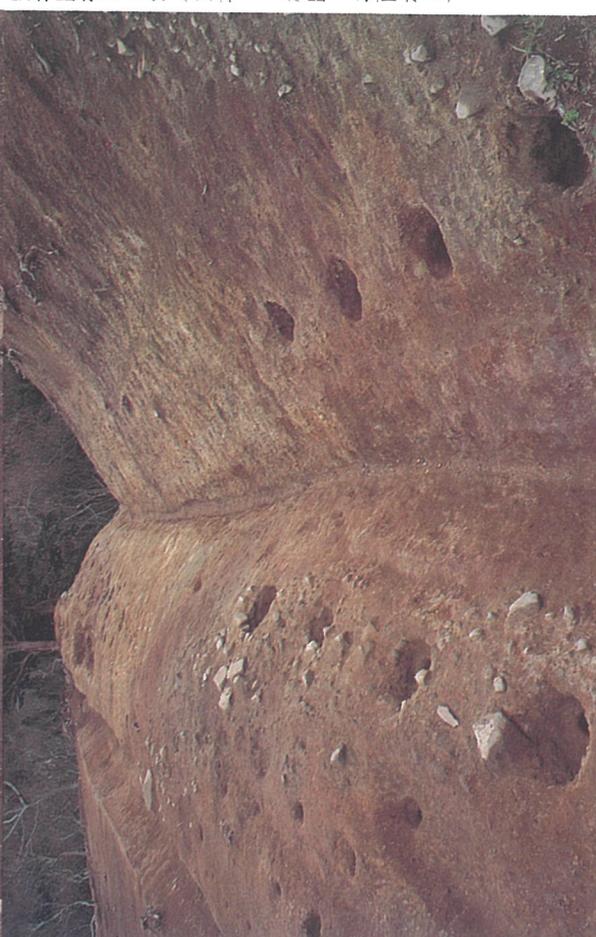
遺構検出状況(建物・塚跡―北東から)



棚列跡検出状況（南東陸）



空壕跡検出状況（空壕A・柱跡―北西から）



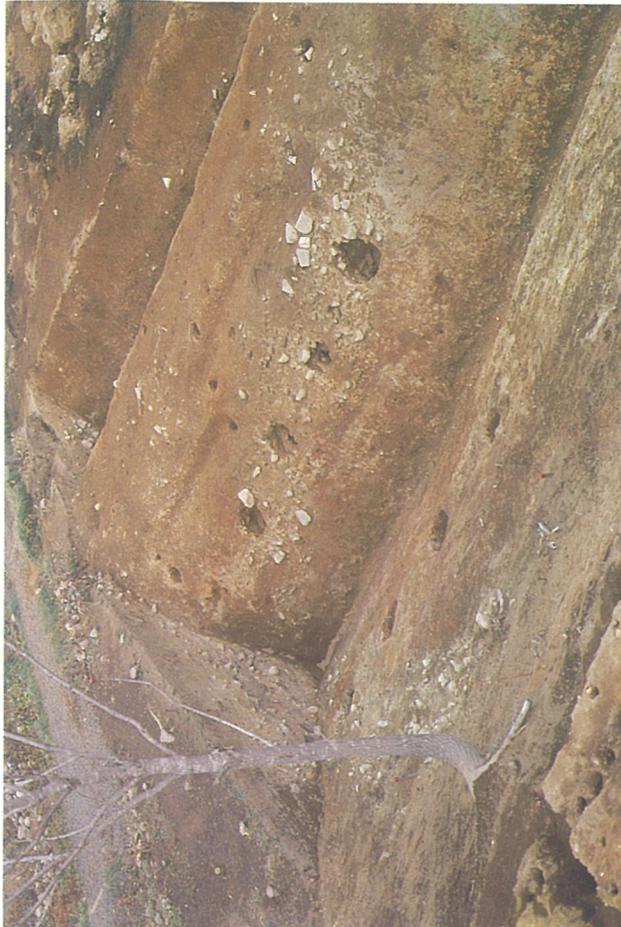
空壕跡検出状況（空壕B 北西から）



建物跡検出状況（北西から）



空壕・柱跡



空壕・土坑(臺)



P.L. 5
検出遺構

土坑 臺



竪穴遺構



棚列跡西端



棚列跡東隅



空壕跡A



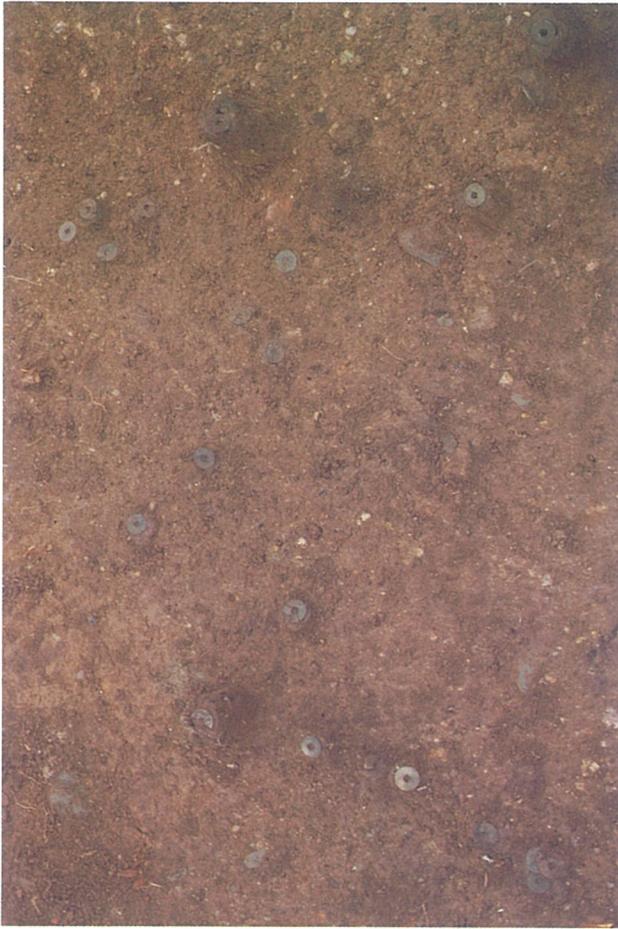
空壕跡B



空壕跡B

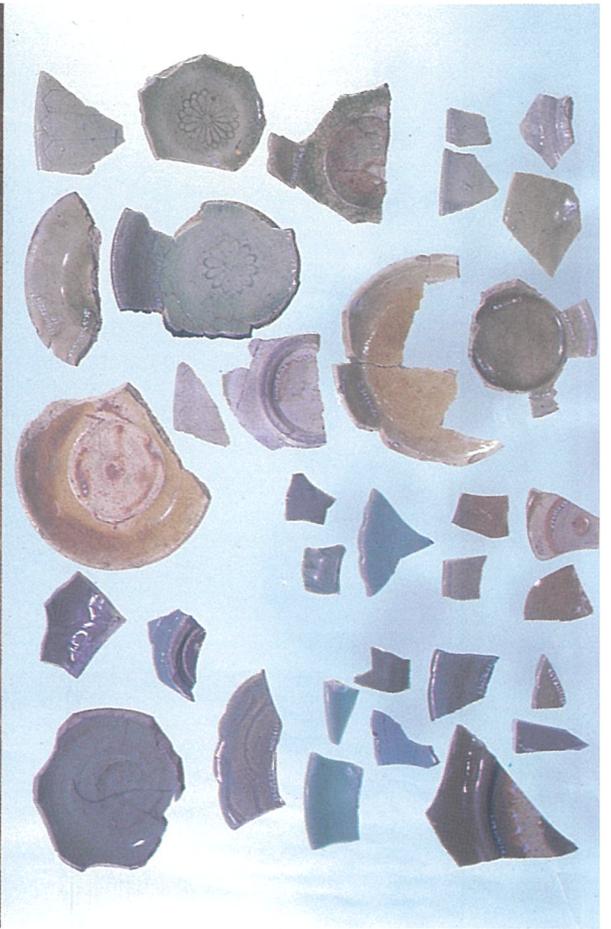


銅錢出土狀況 (塚東平坦面)

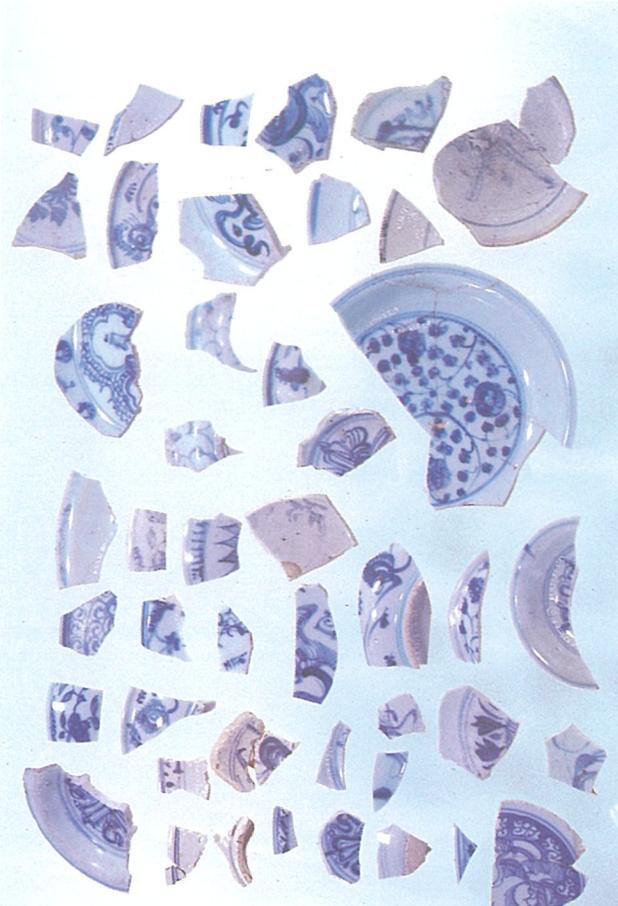


P.L. 7
出土遺物

出土陶磁器 (青磁・美濃)



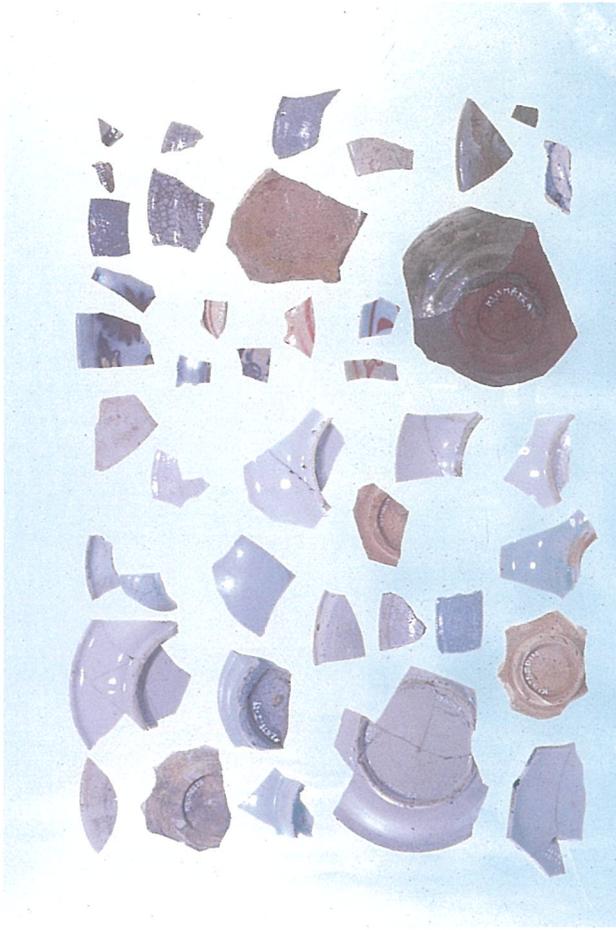
出土陶磁器 (染付皿)



出土陶磁器 (染付碗)



出土陶磁器 (白磁・赤絵・唐津・志野)



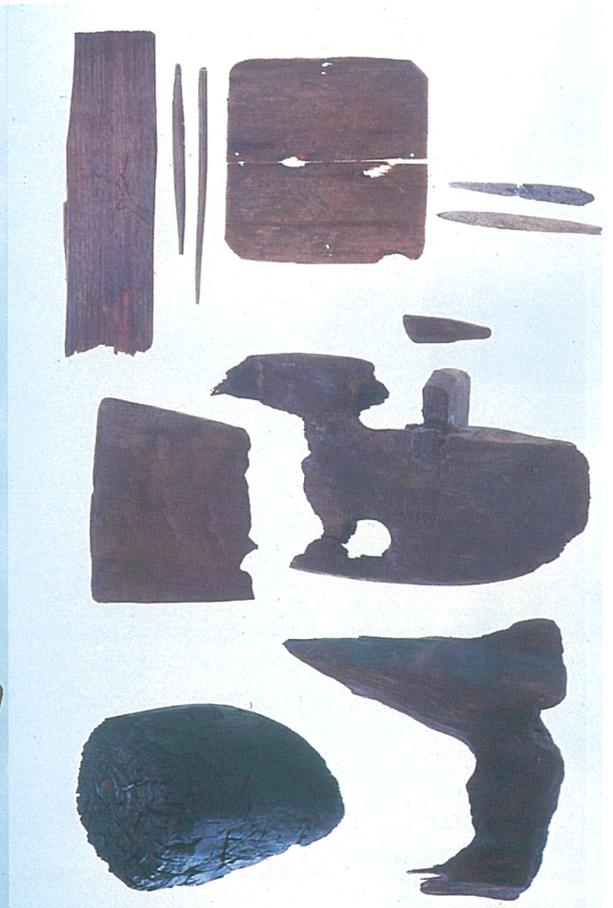
出土陶磁器 (美野鉄釉・越前)



出土金属製品 (小札・鍋・鏡他)



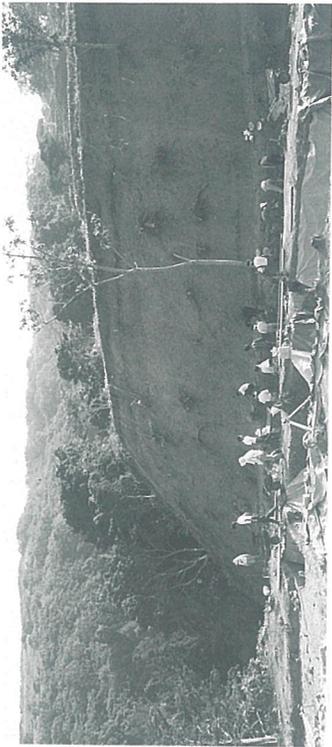
出土木製品 (下駄・箸他)



建物跡・空壕跡（北東から）



空壕跡調査状況



空壕跡再調査状況



柵列・壕・建物跡（南西から）



柵列・空壕跡（南東角）



柵列・壕・建物跡全景（南西から）



空壕跡 (北西から)



空壕柱跡



空壕跡・土塚 (南東から)



空壕跡南東端



空壕跡南東端

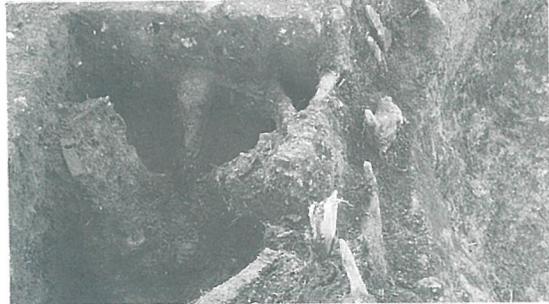


土塚墓



土塚墓

土塚墓



土塚墓



土塚墓



建物跡全景 (南西から)



建物跡全景 (北東から)



35号 竪穴



37号 竪穴 炭化材 (出入口部)



37号 竪穴 炭化材 (柱・根太? 壁・屋根?)



37号 竪穴 炭化材 遺物出土状況



37号 竪穴 遺物出土状況 (獣骨)





空壕跡張芝法面保護（北西から）

空壕跡張芝法面保護（南から）

空壕跡張芝法面保護（南東から）↑



空壕跡張芝法面保護（南東端）

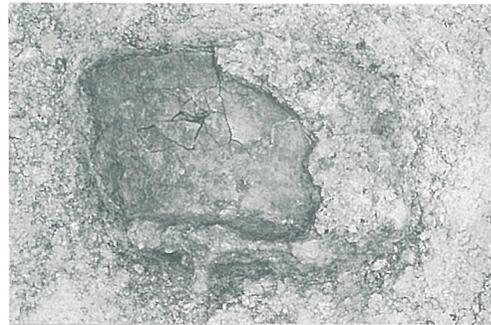


夷王山墳墓群説明板

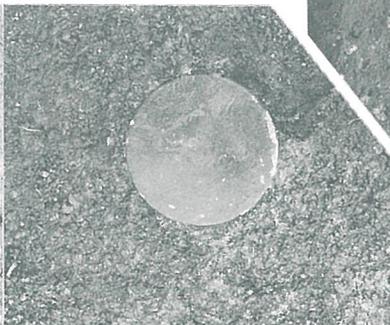


夷王山墳墓群説明板設置状況

鉄・鍋出土状況



銅鏡出土状況

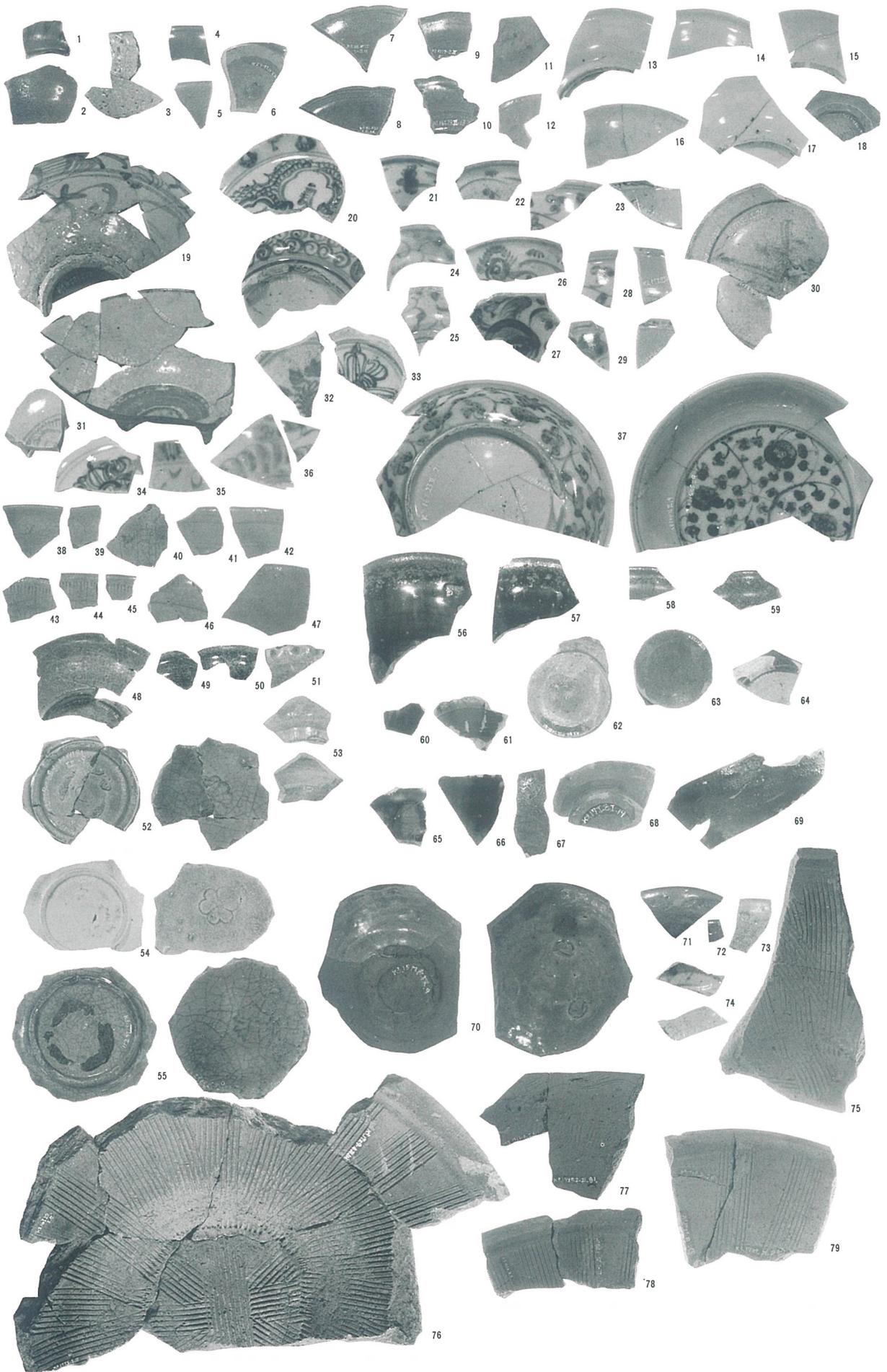


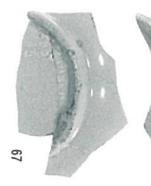
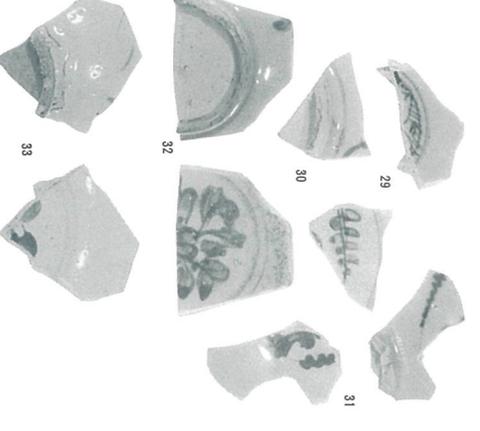
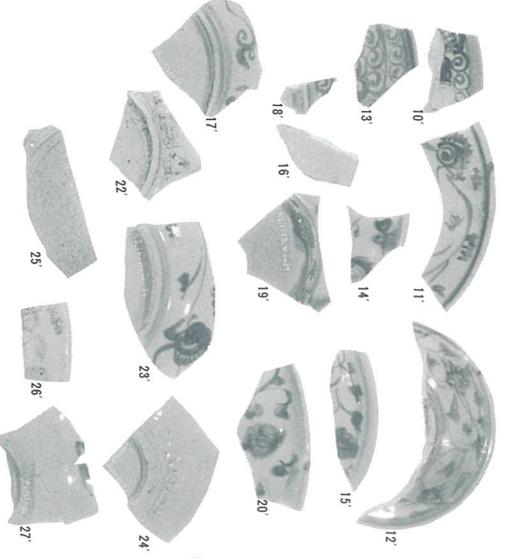
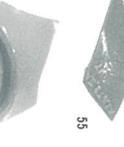
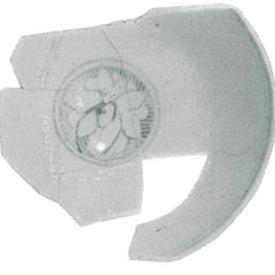
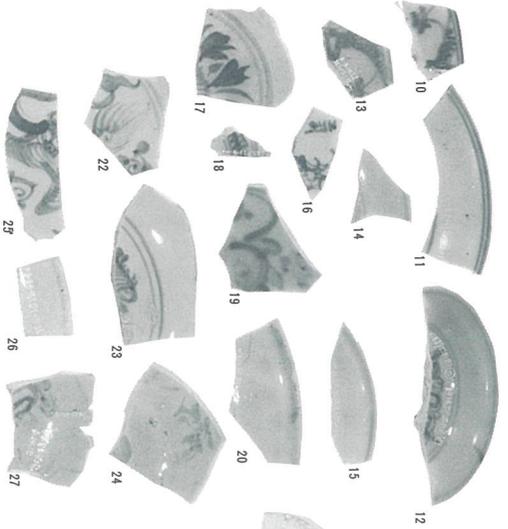
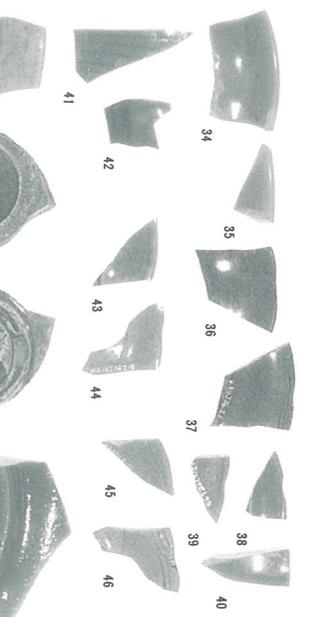
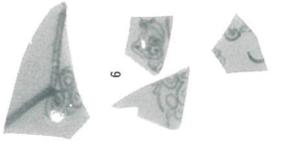
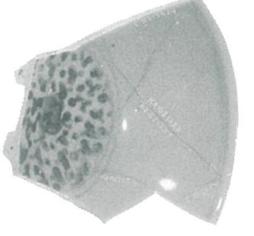
美濃皿出土状況

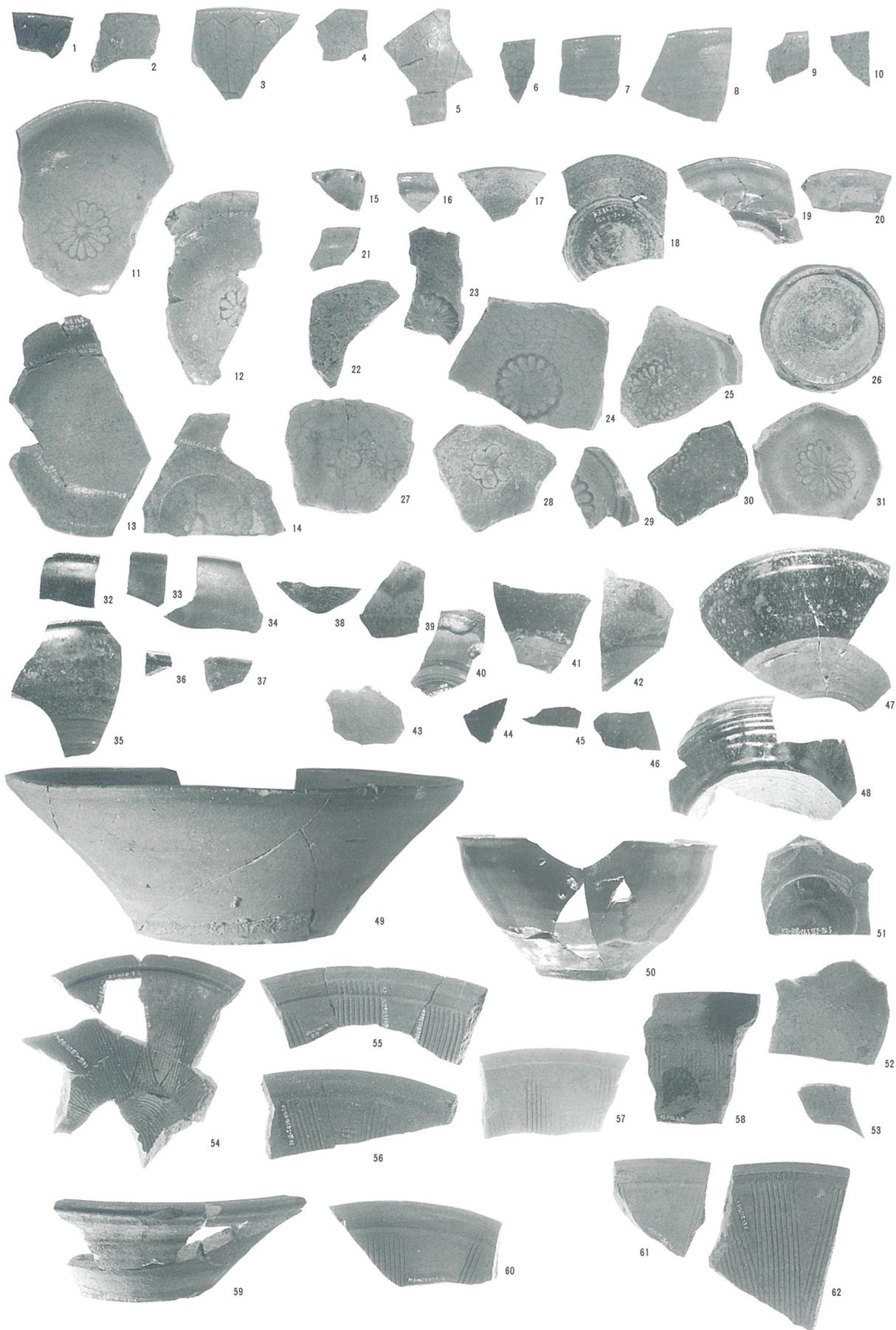
木製品出土状況（下駄・折敷）



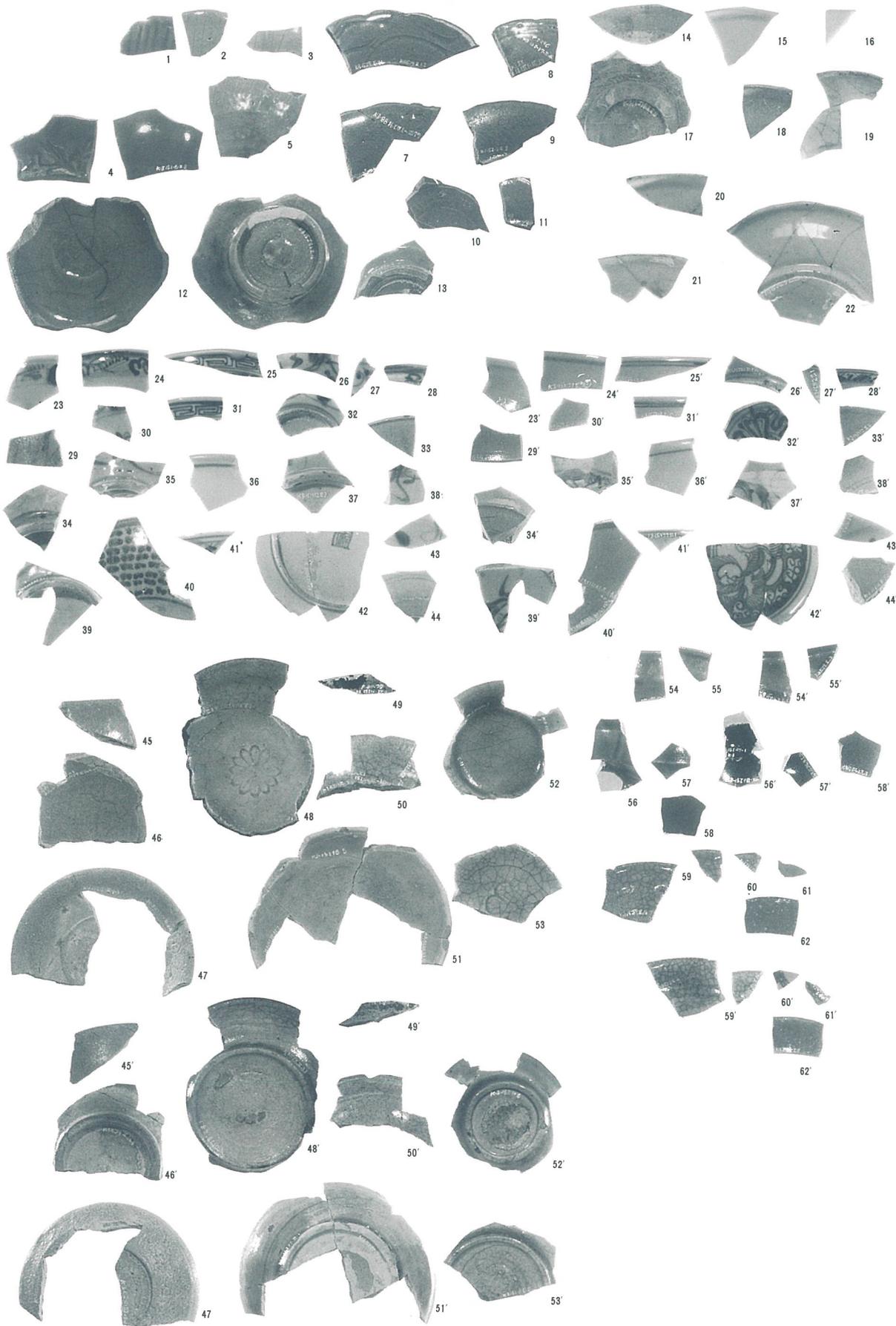
石製羽口出土状況

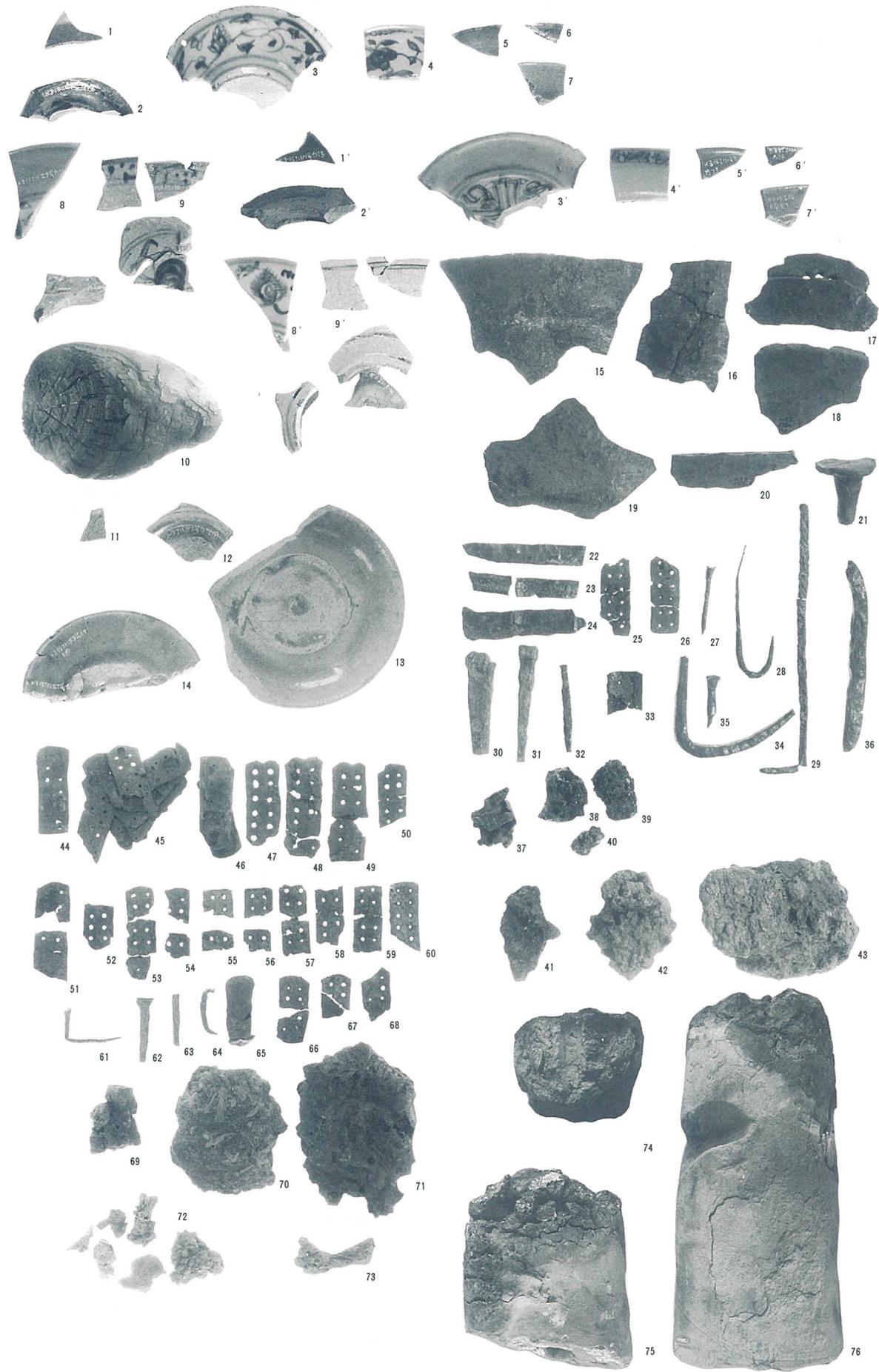




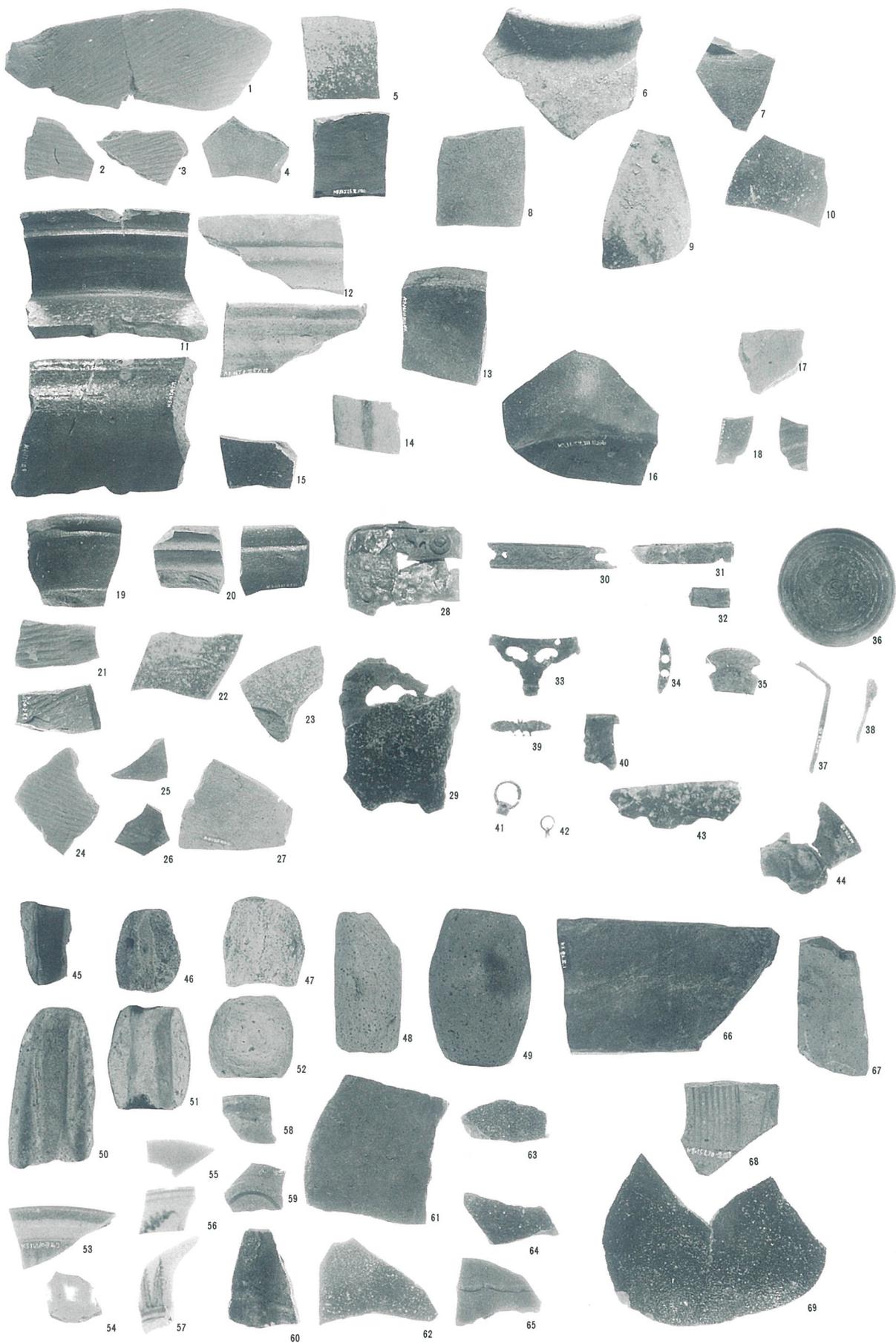


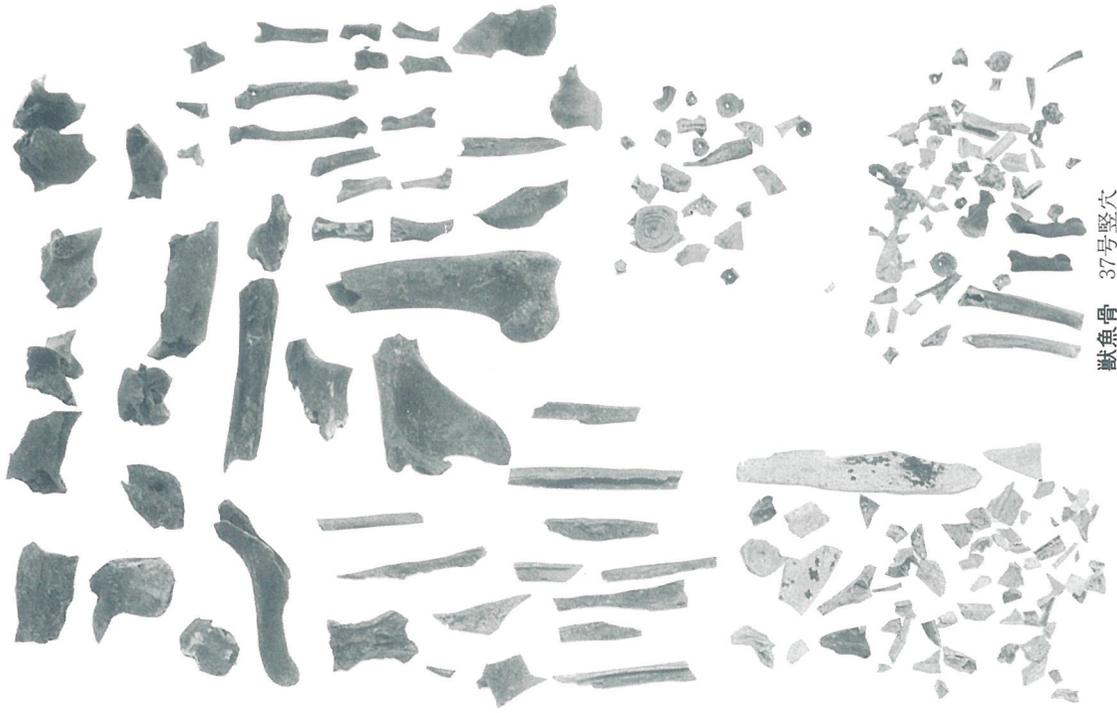






P.L. 19
出土遺物 (1) ~ 5
31
32
35
46
柵列跡周辺、19
21
25
28
33
34
37
44
49
空壕跡東平坦面、53
59
15 L 区トレンチ出土、他は空壕覆土)





獣魚骨 37号竖穴

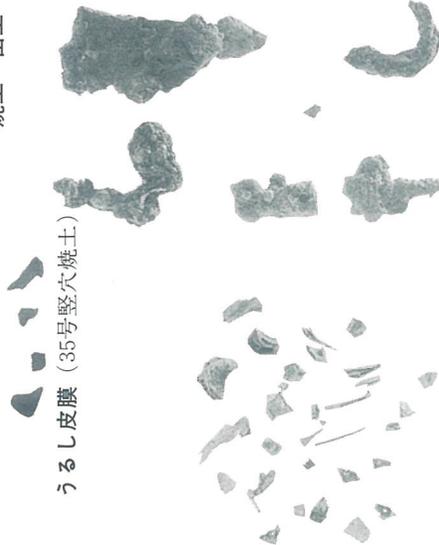


鍛造剥片 (37号竖穴)

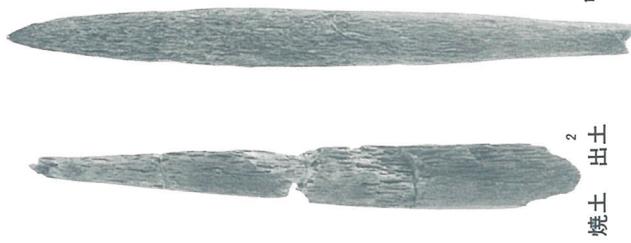
粒状滓 (36号竖穴)



鍛造剥片 (35号竖穴)



うるし皮膜 (35号竖穴焼土)



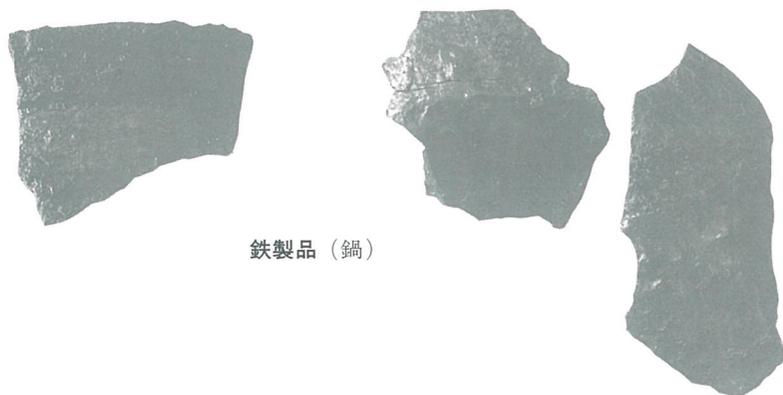
(空塚覆土)

焼土 出土

焼土 4 出土クギ他



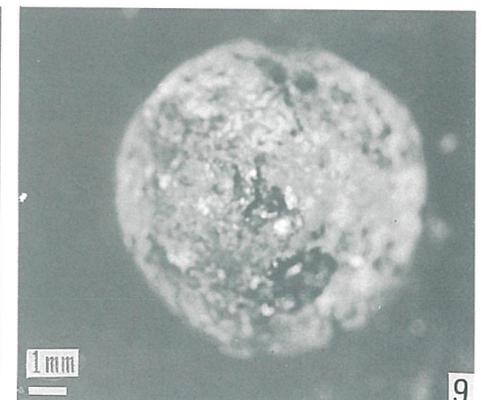
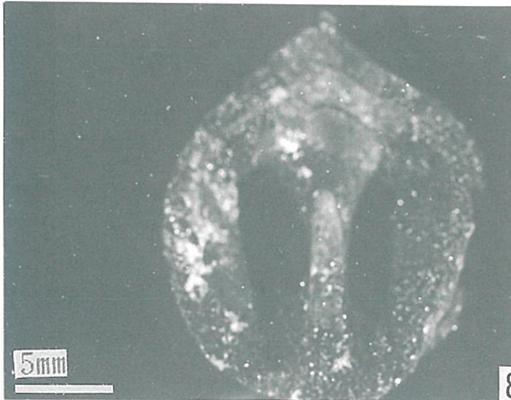
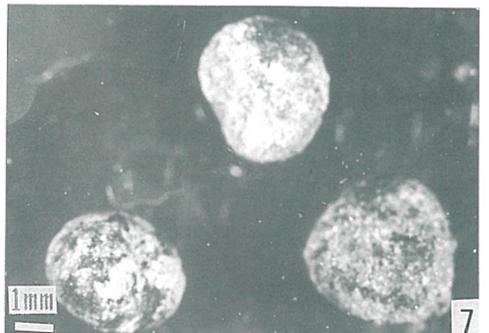
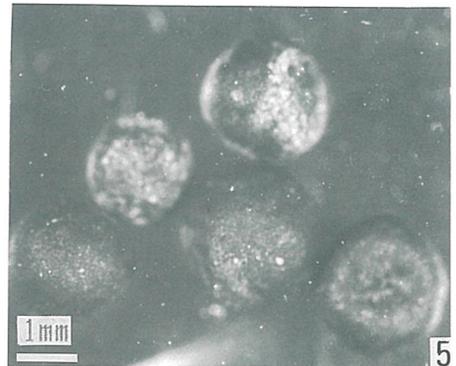
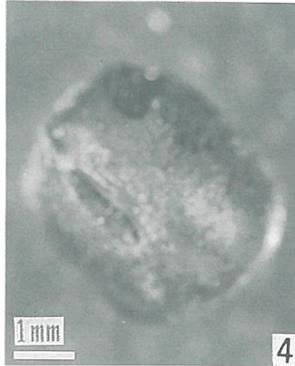
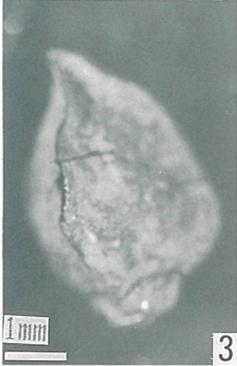
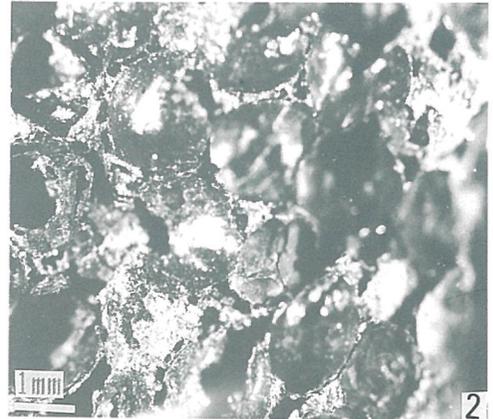
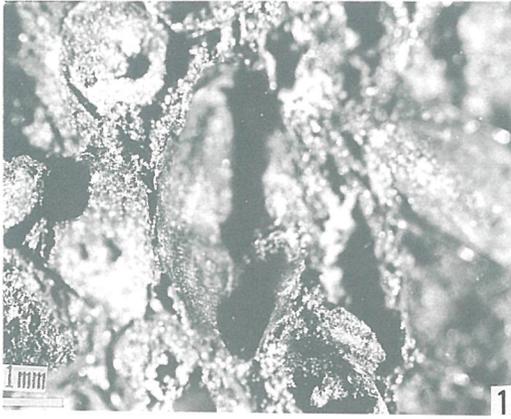
鉄製品（小札、小柄、小刀、鋸、和釘、火箸）



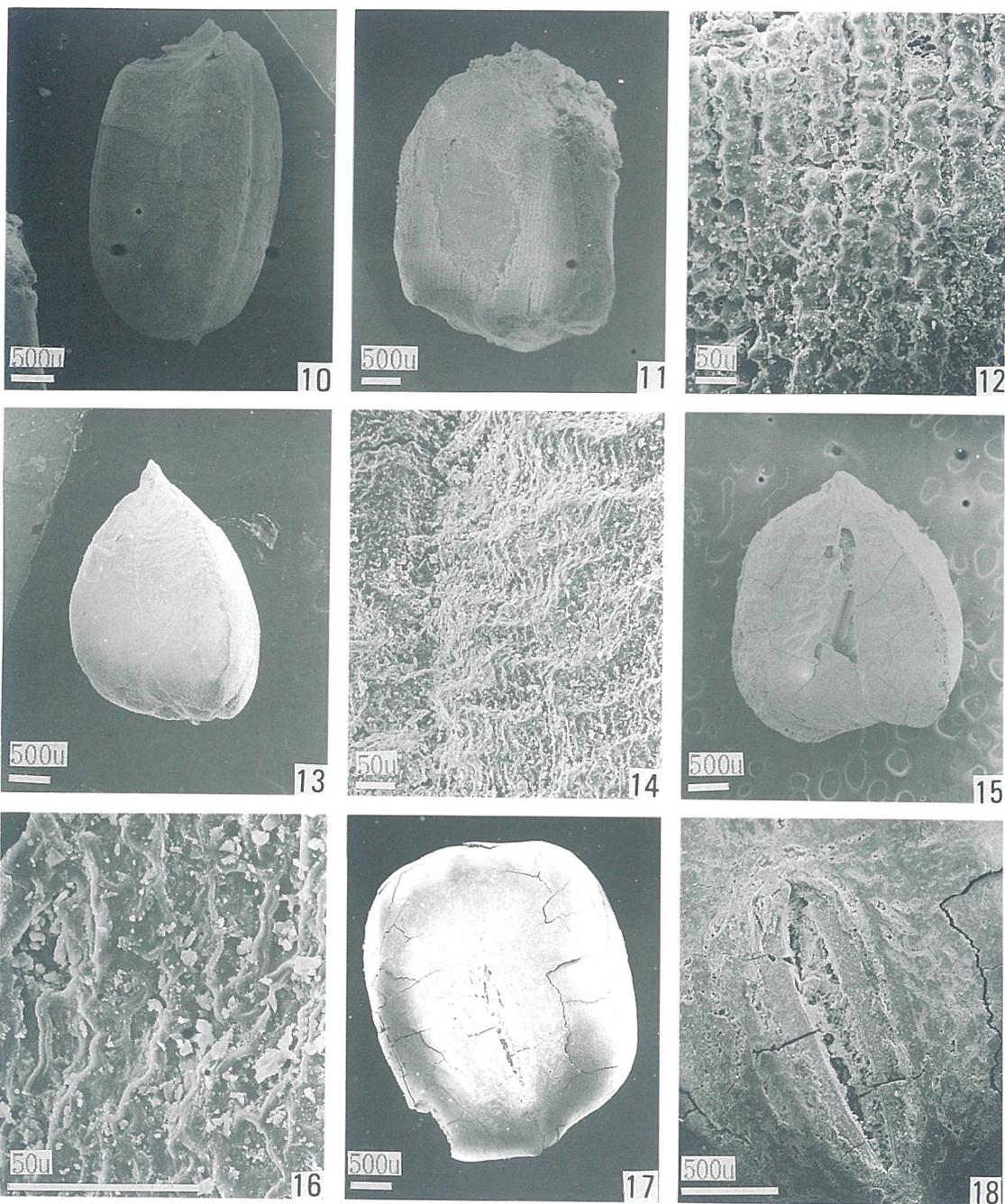
鉄製品（鍋）



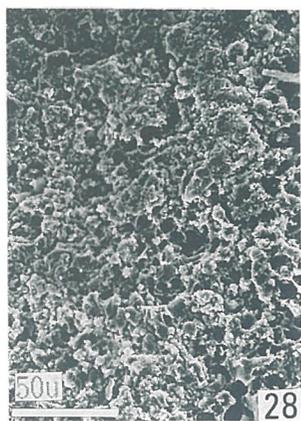
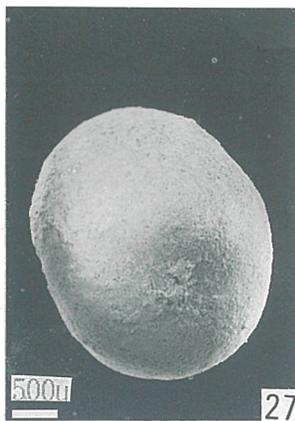
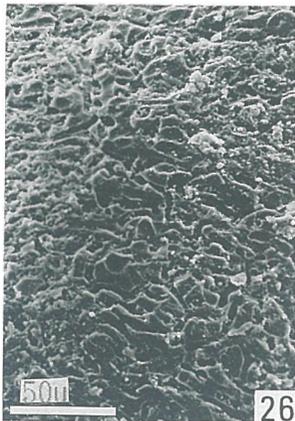
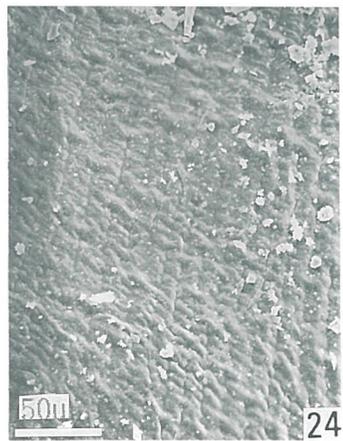
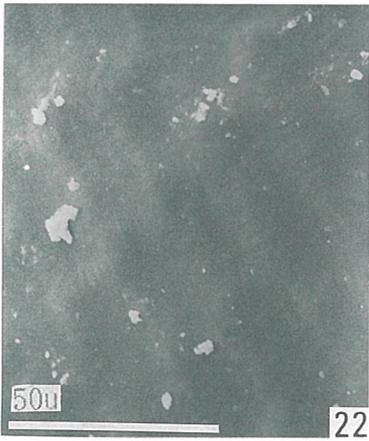
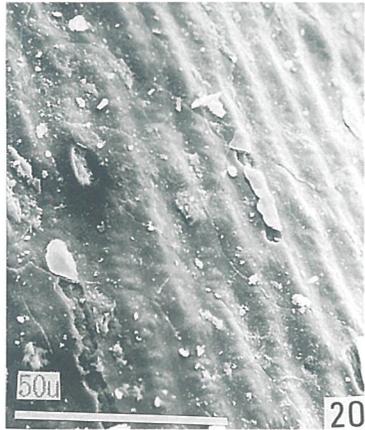
木製品（箸・折敷・曲物底・へら等）



- | | | | |
|---|-------------|---|-------------|
| 1 | イネ粒塊 | 6 | ヤマブドウ |
| 2 | キビ塊 | 7 | アブラナ科? 種子 2 |
| 3 | ソバ | 8 | クルミ肉果皮 |
| 4 | 小豆 | 9 | キハダ果実 |
| 5 | アブラナ科? 種子 1 | | |



- | | |
|-----------------|----------------|
| 10 粳のついていないイネ粒 | 15 ソバ粒 |
| 11 粳が残存しているイネ粒 | 16 写真15の表面拡大写真 |
| 12 写真11の粳の拡大写真 | 17 小豆粒 |
| 13 ソバ粒 | 18 写真17のへそ部拡大 |
| 14 写真13の表面の拡大写真 | |



- | | | | |
|----|--------------|----|-----------|
| 19 | キビ粒 | 24 | 写真23中央部拡大 |
| 20 | 写真19右寄り中央部拡大 | 25 | アブラナ科A |
| 21 | キビ粒 | 26 | 写真25表面部拡大 |
| 22 | 写真21の中央部拡大 | 27 | アブラナ科B |
| 23 | キビ粒 | 28 | 写真27表面部拡大 |

史跡 上之国勝山館跡 X

—昭和63年度発掘調査環境整備事業概報—

発行 上ノ国町教育委員会
北海道桧山郡上ノ国町大留100

印刷 平成元年3月25日

発行 平成元年3月31日

印刷所 (株)長門出版社印刷部
